２０２３年３月ＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会

３月のＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会は、１６日（木）、ＮＨＫ福岡放送局（ウェブ開催）において、８人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、前回の審議会での答申を受け、「２０２３年度九州沖縄地方向け地域放送番組編集計画」を決定したこと、およびこれに基づいて策定した「２０２３年度九州沖縄地方向け地域放送番組編成計画」について、説明があった。続いて、事前に視聴したかごスピ　Ｓｐｅｃｉａｌ「ここがヘンだよ！鹿児島のまちづくり」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に４月の番組編成の説明、視聴者意向および放送番組モニターの報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

副委員長　西野　友季子　（株式会社ニュー西野ビル代表取締役）
委　　員　乾　眞寛　　（福岡大学スポーツ科学部教授）
　　いのうえちず　（雑誌モモト編集長）
　　大館　真晴　　（宮崎県立看護大学　教授）
　　楠田　喜隆　　（株式会社雲仙きのこ本舗常務取締役）
　　久保田　正廣　（西日本新聞社論説委員長）
　　吉島　夕莉子　（吉島伸一鍋島緞通株式会社５代目技術継承者　デザイナー）
　　吉水　請子　　（極東ファディ株式会社取締役商品経営本部本部長）

（主な発言）

＜「２０２３年度九州沖縄地方向け地域放送番組編成計画」について＞

○　これまでＦＭで放送してきた「六本松サテライト」は、テレビ版として深夜に放送される時に、若者のことを勉強するために視聴していた。若者を対象にした特色のある番組が、2023 年度から総合テレビで公開生放送されることは、とても挑戦的なことだと注目している。送り手側の意図とは異なり、想定していない年代層が見て楽しむこともあるかもしれない。今後の展開を期待している。

（ＮＨＫ側）

若者向けの番組を制作したいという思いもあるが、従来の番組を継続していきたいという思いもある。変えていくものと残して

いくもののバランスを取りながら、視聴者に納得していただく番組づくりを心がけていきたい。

＜かごスピ　Ｓｐｅｃｉａｌ「ここがヘンだよ！鹿児島のまちづくり」
（総合　２月１７日(金)放送）について＞

○　冒頭でも鹿児島県知事が出演を見送ったと説明していたが、パネリストが論客ぞろいであり、知事が出演していた場合に番組が本当に成立していたのだろうかと疑問に思った。また、市民が行政に対してスタジオで生の意見をぶつける姿は、非常に挑戦的で驚いた。ただ、視聴者とともに考えるという意味では、パネリストが次から次に思いを語っていたために、自分の考えと照らし合わせる時間的な余裕がなく残念だった。冒頭の市民アンケートが今回の課題となる部分だと思うが、議論の連続性を担保するためにも、アンケートの段階でもう少し課題を絞り込み、討論をブラッシュアップさせてもよかったのではないか。パネリストの人選についても女性や子どもなど多世代・多様性に配慮してもよかったのかもしれない。また、まちづくりをけん引する人の問題提起をメインテーマにするのであれば、パネリストの紹介を市民ではなく民間というくくりにした方が分かりやすかった。無関心層を少しでも少なくするために、これからも思い切ったチャレンジを期待している。

○　地域で活躍している方々が生放送で議論し合う、とてもおもしろい企画であった。しかし、番組概要がつかめていない状態で、ドルフィンポートについて語る始まり方だと、ドルフィンポート跡地の整備計画のことだけを議論し合う番組なのかと思った。また、冒頭でパネリストの坂口修一郎さんの反対意見が１０分間続いたことで、パネリスト全員が計画に反対し抗議しているように見えた。番組が実施したアンケートの結果では、賛成が４７％だったことから、賛成の人の意見も入れて議論し合ってもよかったのではないか。また、最後までドルフィンポートにこだわるのであれば、市民会議として話し合う場にしてもよかったのではと思った。市民の声をまちづくりに生かしていくためにはといった前半の議題に対し、後半は広い視点での議論で論点があちこち飛んでいたために、議論というよりもただ意見を言い合って終わるといった印象を受けた。議題を絞り深く議論できるような場であれば、より有意義なものになったのではないかと思った。

○　鹿児島局としてのチャレンジであり、行政をはじめ世の中にまちづくりの問題があると声高に叫んだ番組であった。民放の番組を意識して制作したときいたが、その路線でいくのであれば第２弾・第３弾と続けて放送し、県知事や県議会、県庁の幹

部も自分たちの言い分を伝えないとこれはまずいと思わせるぐらいの番組になってほしい。地域のまちづくりという点では全国で共通する普遍的なテーマであり、全国区でも展開できる番組になると感じた。ただ、あれだけのパネリストを集めて４５分という長めの放送尺で放送するのであれば、県知事や県庁側の担当者が出演できないということだけでなく、関係者の声を拾うことや取材の過程を詳しく説明することで説得力が増し、視聴者もより納得できたのではないか。今後も、ＮＨＫの地域局でこうした問題を、今回のような切り口と尺で取り上げることを一般化してほしい。東京の政治や経済だけではなく、地方でも議論が分かれる問題を鋭角的に取り上げれば、公共メディアとして注目されるのではないか。また、司会の白鳥哲也アナウンサーのかじ取りがうまく、生放送の番組であれだけの人の話をうまくまとめて次の人につないでいく腕前はなかなかなものだと思った。事前の打ち合わせなど何か工夫した点があったのか、教えてほしい。もう一つ、放送後の県庁側の反応はいかがなものだったのか、分かる範囲で構わないので確認したい。

（ＮＨＫ側）

番組に対する抗議や批判的なコメントは来ていない。十分な取材を行い、鹿児島県側の言い分も伝えたという点では納得していただいていると感じている。県知事の出演に向けた交渉も、時間をかけてやってきた。難しい議論であると感じている一方で、まちづくりの議論が沸き起こることへの期待感もあるのではないか。その意味でも引き続き、第２弾・第３弾を仕掛けていかないといけないと思っている。まちづくりから離れた議論にはせず、ドルフィンポートにこだわったのであれば、こだわり続ける姿勢を見せていきたい。

（ＮＨＫ側）

白鳥アナウンサーは鹿児島県出身で、地元に対する覚悟を持っている。今回の番組も事前の打ち合わせというよりは、ふだんから歴史的建造物や鹿児島の文化・伝統を守っていきたいという意識を持っていたからこそ、司会進行が成立したと思っている。

○　前半のドルフィンポート跡地の整備計画についてはスピード感がありテンポも良かったが、後半は画面に動きがなく、ずっと同じ絵面のように思えた。途中で街頭アンケートのＶＴＲを出すなど、話題を切り替えるときにメリハリのある演出があれば、場面が切り替わっていることをより感じられたのではないか。また、ドルフィンポートを知らない人に対しても、説明が不足しているように感じた。インターネッ

トで調べてみると、県はこの問題についてこれから検討し、公募も行うと発表していたこともあり、番組が少し批判意見に偏っているように思えた。異業種のパネリストが集まって、さまざまな意見が出てきていたという意味では深い内容の番組であったが、鹿児島県民ばかりで対立する県側の意見がなく、演出に工夫をしてほしかった。制作者の意図としても、今回のバランス感覚でよかったのかどうか。今後も生放送でチャレンジしていくのであれば、その点について自己評価も含めてどうだったのかを確認したい。

（ＮＨＫ側）

一般的にＮＨＫでは、議論が分かれる問題は公平に放送すべきだと言われていて、それは当たり前のことだと思っている。本来は今回も事業を進める立場の方にも出演していただくべきであり、さらに言えば、なぜ出演いただけないのかというのも丁寧に説明するべきであったと考えている。

○　異なるジャンルのパネリストが分かりやすいコメントをしていて、鹿児島のまちづくりに関する問題点が浮き彫りになっていた。白鳥アナウンサーが論点を結びつけ、行政や財界、市民とのコミュニケーション不足という問題などを浮き彫りにすることで、鹿児島局の「地域の課題に向き合って掘り下げていくコンテンツを発信する」というテーマに、見事に合致した番組であった。ただ、出演していたパネリストには偏りがあったように思えた。県の総合体育館の整備に反対か、もしくは何らかの意見を持っている方が多かったにもかかわらず、冒頭で紹介されたアンケート結果を見ると、賛成が４７％となっていた。実際にこの４７％の方々はどういった意見を持っているのだろうか、声を上げにくい状況なのかなどと思いをめぐらすと、どのような意見を持っているのかを確認したかった。また、総合体育館建設に関する話でもあることから、スポーツ選手の意見を聞きたかった。スポーツの団体やその関係者をパネリストとして選定しなかった事情があったのか、確認したい。

（ＮＨＫ側）

実際に街中で取材をしてみると、「何もないよりはあった方がよく、体育館建設に賛成」といった声をよく耳にした。一方で、具体的に何ができるとよいかと聞いてみると、体育館と答える人はほとんどいなかった。番組内で商業施設、観光施設をつくってほしいという声も紹介したが、指摘のとおり、意見に偏りがあるように見えてしまう点もあった。また、スポーツの競技団体にも出演に向けた交渉を行っていたが、この問題の当事者ではないとい

う声も多く断られてしまった。さらにいえば放送尺の関係もあり、実際に体育館ができたらどうなのかということをテーマ設定するのが難しかった。

○　出演者の人選について、バラエティーに富んだ意見が出ることは大切であるが人数が多く、ジェンダーバランスもやや取れていないと感じた。意見が偏っていたという点についても、取材の中で体育館ができたらうれしいと言う側の意見を拾ってくることや、ドルフィンポートにスポーツコンベンションができるメリットを紹介するＶＴＲがあってもよかったのではないか。街頭インタビューは、平等に声を拾っているように見える一方で、関心のない人は予備知識を持って意見を言っているわけでもないというデメリットもあると感じている。ただ、出演していたパネリストからは、交流ツーリズムのような体験や交流が大事といった話や、東京のまねごとではなく文化的なことをやってほしいといった話、さらには経済や利便性だけ求めるのはよくないといった話も出ていて、問題提起としては非常におもしろかった。今後もこのテーマについては、議論をより深める形で継続していただきたい。

○　さまざまなジャンルのパネリストが出てきたところはよかったが、それぞれのバックグラウンドが違いすぎて、議論を絞り込めてなかったように思えた。まちづくりの定義が広すぎて、今回の課題について話し合うとしても、行政の担当者はどこの誰なのかという状況もある。パネリストそれぞれの主張に応える担当者を引き出すことができると、さらに議論として深まっていったのではないか。また、パネリスト全員が反対意見を持っているように見えたほか、本来は中立の立場を保つ役割でもある司会の白鳥アナウンサーも完全に同調する形で番組を進行していたため、生放送なのに何かが仕込まれているかのようにも思えた。ただ、まちをつくるといったときに、観光というブランディングや第一次産業も九州にとっては大切であり、桜島の景観を生かす意味でも、最終的には鹿児島の皆さんで何かよい解決策を見つけてほしいと感じた。その意味でも、この番組は一度放送して終わりということではなく、しっかり議論を続けられるようにすることで、まちづくりを導いていくきっかけにしてほしい。賛成が４７％だからと行政が力技で決めたという結果にしないためにも、ＮＨＫが公共放送としての役割を果たすよいきっかけになると思う。

○　ドルフィンポートの整備計画については、前の県知事のときから議題に挙がっていて、そのときは県民が反対したことにより取りやめとなったが、今回はなぜかそのまま進んでいる状況にある。そういった中で、ＮＨＫがこういった番組をつくったことには、すごく意味があると思っている。ニュースなどでも伝えられているが、こういった討論番組を放送することで、県民に関心を持ってもらうことは大事であ

る。パネリストに関しては、女性の割合が確かに少ないように思える部分もあったほか、鹿児島市以外の方々は関心が薄いところもあり、鹿児島県民の中でも意見に偏りがあるように感じられた。第２弾・第３弾の放送では、スポーツ関係だけでなく議員や県行政などいろいろな分野の方たちに参加してもらうとともに、より多くの県民に見てもらえるような情報発信を目指していただきたい。

○　生放送で「まちづくり」についてディスカッションする番組ということで、成立するのか心配しながら視聴したが、白鳥アナウンサーの卓越した司会進行と、レベルの高いパネリストの面々によって素晴らしい番組に仕上がり、驚かされた。その背景には鹿児島への深い愛情と、日頃から「まちづくり」について高い関心を持ち、しっかり勉強していることがあると推察した。同様のディスカッション番組と比較しても、問題意識を持った方々を配置した方が深い議論に達しており、他県の私が見ても自分事として捉えることができたのはとても良かった。今回の主たるテーマは、鹿児島県が主導して進めているドルフィンポート跡地に体育館を建設することに一石を投じるものであり、ＮＨＫのチャレンジする姿勢も感じ取れた。鹿児島特有の問題ではなく、日本全国の自治体において、ハードの整備だけではなく、ソフト面を充実させた「まちづくり」にどうやって方向転換していくのかは重要な課題だと思うため、各地方局において、このような番組を制作していただきたい。

（ＮＨＫ側）

ゼロから生み出すというところもあり手探りだったが、もう少し取材を尽くすという点と取材相手がワンサイドにならないようにするべきであった点は反省している。今後展開するときに放送尺が短くなったとしても、どのように構成するのかについては考えていきたい。反省点も多い一方で、「おもしろかった。ぜひ県民の議論のきっかけとなる番組をつくってください」などという好評意見もいただいた。これまでＮＨＫとして、今回のような議論の場を追求する役目が果たせてこなかった部分もあり、引き続き議論のきっかけをつくるという志で取材や制作を続けていきたい。

（ＮＨＫ側）

ドルフィンポートにこだわるのであればテーマをより絞り込み、県知事の出演見送りについても丁寧な説明をという意見は、放送番組のモニターからも来ていた。パネリストのバランスも我々としては考え抜いたところだったが、もっと取材を続けていれば、よりよい方がいたかもしれない。課題を挙げれば切りがないが、

いただいた意見を踏まえて第２弾・第３弾では頑張っていきたい。今回は４５分という放送尺だったが、もう少し長く放送することも将来的には考えてもよいかと思い、そのような構成も学んでいかないといけないと感じている。議論の場を提供しさえすればよいということではなく、放送することで世の中を変えていく力が起きることを期待している。ＮＨＫが何かを教えるのではなくて、市民の皆様と一緒に変えていく力を醸成できたらと思っている。

＜放送番組一般について＞

○　２月１９日(日)のＢＳ１スペシャル「基地の街　女たちの声なき声～あるアメリカ人弁護士の闘い～」を見た。アネット・キャラゲインさんという女性のアメリカ人弁護士が、沖縄の基地被害の中の性犯罪や養育費を払わない問題などを丁寧に取り上げた番組で、非常に見応えがあった。アネットさんが活動していた 1990 年代や 2000 年代の映像も使われていて、ＮＨＫはどれほどの期間、彼女を取材していたのかと興味を持った。また、現在のシングルマザーの問題と過去の暴力について、昔の犯罪と今のシングルマザーの問題がリンクするような形で番組を構成しているのも非常によかった。社会的な背景を踏まえた上で、照屋という町とアメ女という用語を丁寧に説明しているのもとてもよく、基地問題に興味や関心のない方にとって分かりにくい背景も丁寧に拾っている番組であった。

○　２月２３日(木)の「テレビ７０年　柳田邦男×池上彰×大学生　テレビジャーナリズムを語る」(総合 後 6:05～6:43)を見た。ジャーナリストとして一流の方の、一流たるゆえんがひもとかれる、すばらしい番組であった。出演者２人の若い頃の写真紹介は興味深く、自分を育てている真っ最中のとがった感じと、今の成熟した風貌との対比を見ることができてよかった。内容が膨らんだ後半でも、限られた時間の中で難しいテーマを多面的にまとめ上げていた。一方で、テレビジャーナリズムという限定されたテーマに対しては、ＳＮＳとの対比を語られただけで収まりきれていないように感じた。ただ、池上彰さんが番組の最後で問題点を指摘したことによって、不確かな情報に踊らされることなく、良いものと悪いものを自らの考えで取捨選択できるような視点を持つことの重要性を、改めて感じさせられる番組であった。

○　２月２３日(木)の「テレビ７０年　柳田邦男×池上彰×大学生　テレビジャーナ

リズムを語る」(総合 後6:05～6:43)を見た。深掘りがやや足りないように思ったが、３月７日(火)の「テレビ７０　柳田邦男×池上彰×大学生　テレビジャーナリズムを語る　拡大版」(ＢＳ１ 後7:00～7:49)を見て、消化不良だった点が解消された。編成の都合などで放送尺が変わると思っているが、４０分で収まり切れないテーマだったことから、５０分版として再度放送することになったのではないかとも感じた。この番組はテレビジャーナリズムを語るということであったが、とりわけＮＨＫ社会部についての話で、ジャーナリズム全体を語るという意味では物足りないように思えた。ＮＨＫだけではなく民放の話も含めて、テレビ全体がこの７０年でどう変化していったのかを、もう少し大きなスケールで語っていたほうがよかったのではないか。羽田沖日航機墜落事故も、どういう事件でどの点がＮＨＫとしての特ダネだったのかが分からなかった。また、浅間山荘事件も内容が断片的であり、予備知識がある人は分かるかもしれないが、若い人には伝わらないのではと感じた。今回、スタジオに集まっていた大学生はもともと問題意識を持っていて、彼らには届く内容であったと思う。ただ、７０年という記念として興味本位で見た人にも届くような、もう少しかみ砕いた内容でもよかったのではないか。

２月２５日(土)のＮＨＫスペシャル「調査報告・ロシア軍～“プーチンの軍隊”で何が～」と、２６日(日)の「ウクライナ大統領府軍事侵攻・緊迫の７２時間」を見た。見応えがあり、さすがＮＨＫという取材力や総合力を感じられる番組だった。２５日(土)の「ロシア衝突の源流」(ＢＳプレミアム　後7:30～8:59)もだが、ウクライナ侵攻から１年という世界的にも大きな節目で、いま起こっていることを歴史的にふかんできる非常に勉強になる番組で、ＮＨＫとしてのメッセージがしっかり伝わったのではないかと思った。

３月１０日(金)のザ・ライフ「ある原子力学者の遺言～未公開資料が語る～」(総合 後8:15～8:40／九州沖縄ブロック)を見た。九州大学の副学長で科学技術・原子力の専門家でもあった吉岡斉教授の未公開資料ということで期待していたが、２５分の番組でありながらも内容に深みがあり、真実が緻密に積み上げられていた。国がいま、まさに原発政策を大きく変えようとしている局面であり、吉岡教授が問いかけた問題は内容も価値もあることから、今回の番組で出しきれていない情報があれば、それらを加えてより長い尺にするなど、全国に届くようなアプローチでもう一度放送されることを期待している。

○　２月２５日(土)に再放送された「ウチナーンチュ　沖縄のルーツを探して」(総合前7:35～8:00／九州沖縄ブロック)を見た。海外から来た沖縄の人々が自分のルーツを探す姿や、沖縄で見つけた家族とのつながりを２５分でまとめ、３人の出演者それぞれの背景や思いなどを丁寧に伝えていた。核家族など家族間のつながりが薄くなっている中だからこそ、家族のつながりやルーツというテーマには響くものが

あった。また、いろいろな背景を持った人が出演していたが、この３人をターゲットにして番組をつくった理由は何だったのかが気になった。私自身、ルーツを探るということに興味があり、「ファミリーヒストリー」のような番組にもつながるＮＨＫの取材力と調査力はとても高いと評価している。番組の最後には沖縄のにぎやかな祭典の映像もあり、人や家族のつながりという部分に希望というイメージを持つことができる、とてもよい内容であった。

○　２月２６日(日)のＢリーグ　２０２２－２０２３「熊本ヴォルターズ」対「ライジングゼファー福岡」(総合 後 2:05～4:25／熊本県域・福岡県域)を見た。普段から熊本ヴォルターズの試合を会場やＷＥＢ配信で観戦していたため、今回の放送はどのような特色を持っているのか興味があった。最初に驚いたのが画像のきれいさで、細かい選手の表情まで見えてよかった。また、普段見ない画角からの映像が多数見られ、会場で見ているかのような臨場感があった。プロの解説者と実況のアナウンサーとの掛け合いによって、それぞれのプレーについての理解が深まっただけでなく、基本的なルールを解説してくれるシーンもあり、初めてバスケットボールを見る方にとっても楽しめる放送になっていると感じた。それだけでなく、試合中も細かい統計データが発信されていたことから、現地で観戦するよりもおもしろく、試合後のインタビューも新鮮であった。気になった点としては、出身地を誤って表示されていることや実況にＮＨＫ側で指示する声を拾ってしまっていたところである。放送権の問題はあると思うが、バスケットボールファンを増やすためにも、今後も積極的な放送を期待している。

○　３月４日(土)のＮＨＫスペシャル　南海トラフ巨大地震「第１部　ドラマ」(総合 後 7:30～8:48、後 10:00～10:54) と３月５日(日)の「第２部　“最悪のシナリオ”にどう備えるか」(総合 後 9:00～9:54) を見た。合計約３時間と長時間であったが、番組の質や情報量ともに満足できるもので、南海トラフ地震で起こり得るさまざまな現象を詳しく理解できる内容であった。南海トラフ地震の今後の可能性についても、その危険性を分析して示すことで、視聴者に対して大きく警鐘を鳴らす役割を果たしていた。高知県が日頃から行っている防災訓練や避難訓練を通して、高齢の方は避難までに時間がかかる姿や、逃げようとしても引き戸が開かず逃げられないといった、小さいことではあるが命を守るために重要な要素が番組中に散りばめられていた。しかし、第１部では描写が変わるごとに地震発生までの時刻を表記していたのに対して、地震発生後は何分経過という時間表示がなくなり、それぞれがいつ起こっている事象なのかが分かりづらかった。最後には、地震発生後１週間といった表記もあったが、気象庁が動き出したタイミングや津波が到達した時刻についての表記はなかった。概算であったとしても、命のリスクが高くなる事象の時間を出

すとより実感が増したのではないか。

○　３月８日(水)のロコだけが知っている「ふるさと自慢対決！福岡ＶＳ.佐賀」を見た。印象としては、福岡ＶＳ佐賀というより北九州ＶＳ佐賀のように思えた。これまでもふるさと自慢対決が放送されてきたが、地域の情報は少ない印象があり、今回もそこまで芸人に頼らないといけないのかと疑問を抱いた。芸人のエピソードよりも市民の声を聞いたり、故郷を見て懐かしんだり、故郷の新しい発見ができたりといった内容をもっと放送すると、より見応えがあったのではないか。ただ、その一方で旦過市場を盛り上げる取り組みや佐賀の中央マーケットの人の温かみなど、地域に寄り添った内容はしっかり取材されていた。今後は、もっと地域に寄り添った情報が全国向けに放送されていくことを期待している。

○　３月１０日(金)の「九州・沖縄　地震コレダケハ！」(総合 後 7:30～8:15／九州沖縄ブロック)を見た。専門的になりがちな活断層や津波に関する説明が、非常に分かりやすく伝わってきた。活断層は熊本地震の際に畑の作物のラインがずれた様子を活用して説明し、津波の高さはクレーン車を用いて出演タレントが実際に乗車し伝えていた。言葉ではなかなか表現し切れないような、いわゆる映像でないと説明できない事象に関する説明の仕方に工夫がたくさんあり、テレビが持つ説得力というものを改めて知ることができた。また、取り上げた地域は福岡と宮崎だけであったが、２次元コードを画面上に表示するといった細やかな配慮があり、非常によかった。南海トラフ巨大地震によって、地震の意識が高まってきている中、具体的に何をすればよいのかという素朴な疑問に答える、意義のある番組であった。子どもや高齢者のために、これからも放送を続けてほしい。

○　３月１０日(金)のザ・ライフ「ある原子力学者の遺言～未公開資料が語る～」(総合　後 8:15～8:40／九州沖縄ブロック)を見た。３・１１に向けて東北や福島から遠く離れた九州の番組が、どういった視点で３・１１のことを考えるのかという思いで視聴した。九州大学の吉岡斉教授が残した未公開資料を丁寧に掘り起こし、吉岡教授が闘ってきた国家権力や電力会社の利益誘導、あるいは原子力政策という意思決定が公平・公正さを欠いていたのではないかという問題提起が、きちんとなされていた。この３・１１を機に、高速増殖炉もんじゅなど今進めていることが本当に正しいのかをもう一度考え直す形となり、さらには地震だけではなく原子力発電についても再稼働の流れが大きく動いている中、それで大丈夫なのかということをテーマにしていたのは非常によかった。国の原子力政策に疑問を抱いていた吉岡教授の遺志を継いでいる人々のことばや活動を通して、国の政策に対して物申すという姿勢を、今後はローカル番組だけではなく全国向けにも伝えていただきたい。

（ＮＨＫ側）

この１か月、節目となる番組がたくさんあった。節目となるタイミングで番組を打ち出すことも重要だが、そのときだけ騒いで終わりにしないことが非常に重要だと思っている。「ＮＨＫスペシャル」についても、今回初めて半割れについて具体的に取り上げたところを評価していただき、非常にうれしく思っている。助けようにも助けられない地域が残っていくということを、どうやって伝えていけばいいのかと我々も悩んでいた。数字だけを映しても理解してもらえない部分をどのように伝えていくことがよいのかと考えながら番組をつくることが、日々の緊急報道の糧になると思っている。これからもしっかりと続けていきたい。鹿児島はことし、８・６水害から３０年を迎える。３０年だからということではなく、改めて大きな災害を思い起こしていただくことを通年のテーマにしていきたい。また、１０月には国体が行われるほか、１２月には奄美群島の日本復帰７０周年を迎える。離島やそれぞれの文化・伝統の継承がいま、どうなっているのかなどを考えていくきっかけにしていきたい。

（ＮＨＫ側）

３月１０日(金)の「ザ・ライフ」は、当時の原子力政策が結論ありきで進んでいたことについて、未公開資料とともに当時の原子力委員会の事務局長へのインタビューで客観的に伝えた。また、地域の課題解決に向けて、「かごスピ　Ｓｐｅｃｉａｌ」やこれから放送する「ＫｉｔａＱ　ｇｏｏｄ＆ｂｏｏ(きたきゅーぐーぶー)大作戦」のような番組を増やし、ＮＨＫが情報の発信源となった議論が全国どこでも起きていくようになればと考えている。

ＮＨＫ福岡放送局
番組審議会事務局

２０２３年２月ＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会

２月のＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会は、１６日（木）、ＮＨＫ福岡放送局（ウェブ開催）において、８人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、「２０２３年度国内放送番組編集の基本計画」および「編成計画」についての報告があった。引き続き、「２０２３年度九州沖縄地方向け地域放送番組編集計画（案）」の諮問にあたって説明があり、審議の結果、番組審議会として原案を可とする旨、答申することを決定した。続いて、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に３月の番組編成の説明、視聴者意向および放送番組モニターの報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長　古荘　貴敏　　（株式会社古荘本店代表取締役社長）
副委員長　西野　友季子　（株式会社ニュー西野ビル代表取締役）
委　　員　乾　眞寛　　（福岡大学スポーツ科学部教授）
　　いのうえ　ちず（雑誌モモト編集長）
　　楠田　喜隆　　（株式会社雲仙きのこ本舗常務取締役）
　　久保田　正廣　（西日本新聞社論説委員長）
　　吉島　夕莉子　（吉島伸一鍋島緞通株式会社５代目技術継承者　デザイナー）
　　吉水　請子　　（極東ファディ株式会社取締役商品経営本部本部長）

（主な発言）

＜「２０２３年度国内放送番組編集の基本計画」および「編成計画」について＞

○　ＮＨＫとして大きく変化していくことは重要だが、テレビ離れも進む中、2023 年度の番組編成について視聴率をどのように考えてきたのかを伺いたい。また、衛星波の再編について、これまではＮＨＫらしい映像と音声で非常に質の高いものを提供し、民放では手を出せないであろう領域の報道やドキュメンタリー、スポーツなど非常に多様な番組を放送することで、コロナ禍でも相当な人がＮＨＫを見ていた。そういった中で、今回の再編に向けた送り手側の狙いは理解できたが、衛星波に期待していることなど視聴者のニーズをくみ取るような調査を行ったのかどうかを確認したい。さらに、脱コロナということになると、巣籠もりしていた人が以前のように外出し、家族でいっしょにテレビを見るというライフスタイルよりも、携帯やパソコンでますます個別にテレビを見るという多様化の流れが一段と加速することが

予想される。この点については、どのように考えているのか、教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

視聴率を意識していないわけではなく、マーケティングに基づき、視聴者の生活時間帯の変化などを総合的に検討し、来年度の時刻表をつくっている。衛星波についても同様で、視聴者の声に基づいて直すべきところは直していきたい。また、コロナの状況によって、さまざまなコンテンツの見られ方が変わり、テレビが右肩下がりで見られなくなっていることは認識している。テレビだけではない多様な形態で、ＮＨＫのコンテンツを楽しんでもらえるように努力していくしかないと思っている。

○　公共放送として、すべての方々のニーズをいかにカバーしていくかが大事であると思っているが、自分が興味を持っていない番組にどうやってたどり着くことができるのかが疑問である。若い世代の好きなものだけを選び取るといったスタイルに対応し、編成の全体像をどう伝えていくのか。全体像を理解したうえで、初めて高品質な番組を選ぶスタート地点に立つ視聴者が多く、接触機会が失われてしまうのではないかと危惧している。ＮＨＫの全体像を示すといった点では、どのようなことが配慮されているのかを確認したい。

（ＮＨＫ側）

番組に接する機会や、興味関心を研ぎ澄ますような機会といったものは公共放送として大きな課題である。「ＮＨＫプラス」ではプレイリストという形で、歴史番組が好きな方には同じジャンルのドキュメンタリーを見てもらうなど、関連番組から新たな番組を見つけてもらいたいと思っている。放送においても関連番組を続けて編成するなど、デジタルも含めた活用をしていきたいと考えている。

＜「２０２３年度九州沖縄地方向け
地域放送番組編集計画（案）」についてー諮問ー＞

○　多くの局の重点事項に、地元のスポーツを盛り上げていくという項目があった。特に福岡はラグビーが盛んで、バスケットボールについても高校が非常に強く、この２つの種目は福岡や九州で関心が高い種目であると思っている。各県のプロチー

ムを応援するのはもちろん、九州・沖縄という広い視点で今年行われる国内外の世界大会を盛り上げ、スポーツ全体を活性化するという視点があるとよいのではないか。また、2022 年は本土復帰５０年の節目を迎え、九州・沖縄で制作した沖縄の問題を考える番組がたくさん放送されていた。メディアは節目の年に向けて盛り上がっていくが、その年が終わってしまうと急に関心が冷めてしまうところもある。５０年は一つの大きな節目であるが、九州・沖縄が引き続き一体となって沖縄の問題はまだまだ続いているということを、ＮＨＫの立場で発信していただきたい。そういう意味では、１月２９日(日)に放送した「誰が島を守るのか　～沖縄若き自衛隊員の葛藤～」(ＢＳ１　後 11:00～11:49)は、若者に密着する、まさに沖縄の今の姿を切り取った番組であった。最後に、今年は公共放送として無視できない４年に一度の統一地方選挙が大きなトピックになっている。その前哨戦ともいえる北九州市長選では、接戦とも言えるなかでＮＨＫの当確はとても早かった。当確と打つ決め手になったのは何なのかということが、大変興味深い。

（ＮＨＫ側）

基本方針にもあるように地域を盛り上げるために、野球やサッカー、バスケットボールなど、地元スポーツの中継や取材に積極的に取り組んでいきたいと考えている。国内外の世界大会については、放送権料などの問題からどこまで主体的に関われるかという課題もあるが、地域のスポーツをきちんと伝えるという方針を固めていることから、できる範囲でしっかり伝えていきたい。また、沖縄についても引き続き、九州・沖縄ブロックでしっかり取り組んでいきたいと考えている。北九州市長選挙については、情勢取材や各種調査といった現場の記者が積み上げていったものをしっかり判断して、当選確実を打つに至った。

（ＮＨＫ側）

沖縄の問題について、2022 年は地元の局として相当力を入れてきた。５０年が終わったから終わりというわけではなく、その次に向けたスタートにしたいと考えている。沖縄局には、非常に強い思いを持って赴任した職員や沖縄出身の職員もいて、すでに今後に向けていくつか提案も出ている。沖縄戦のことをきちんと検証していくこともだが、いま、起きていることについても、さまざまな角度から見つめた番組やニュースを届けていきたい。それが沖縄局の大きな役割だと思っている。

○　九州は自然災害が非常に多く、ＮＨＫが発信する情報は災害時に最も信頼される情報だと思っている。ＮＨＫの河川情報では、生活圏に近い河川の水位がリアルタイムで見られるようになっているが、今後もこのようにエリアに特化し、ピンポイントな災害情報をリアルタイムで発信していくシステムをさらに精度を上げていただきたい。また、福岡は１０代、２０代という若者世代が非常に多い町だと言われている。地域間や世代間のギャップを埋めるとあったが、福岡の人口は増え続け、子育て世代も多い。昨今話題になっている子育て支援や少子化対策の福岡版というような、地域に根ざした情報を発信していただきたい。また、リアルタイムでＮＨＫを見る若者は少なくなってきている中で、「ＮＨＫプラス」などのデジタルコンテンツを活用しながら、どうやって若い世代にも見てもらえるようにするのか。システム面も含めたさらなる進化を期待したい。

○　これまで６時台のニュースは、地域社会への貢献や接点づくりのような、いわゆる仕事を引退された方々に向けたコミュニティーの提供という観点に重点が置かれているように思っていた。しかし、継続的に視聴をしていると、地域のビジネスに携わる層にとっても非常に有益な情報がきめ細かく盛り込まれていることに気づいた。地域経済の中での出来事が、わかりやすくまとめられていることから、もっと幅広い層に視聴していただきたいと思った。また、北九州局では「参加感を満たす」といったことが書かれていたが、「ニュースブリッジ北九州」ではキャスター４名の温かさといったものが画面越しに伝わり、参加感を醸成しているのではないかと感じている。各局でいろいろなアプローチがあり、地域の課題や出来事もそれぞれあるかとは思うが、基本項目を押さえたうえで温かさの醸成にも取り組んでいくことが大切ではないか。

（ＮＨＫ側）

もともと年度当初に、温かさといったコンセプトで作っていこうと現場のアナウンサーとは話をしており、それが伝わっていたのであればありがたい。また、「関門ＷＥＥＫ」は県境を挟んで、生活圏を一つにしている人たちの魅力や地域の特性といったものを徹底的に伝えてきた。ビジネスの面から見ても、発見するものが多かったという意見については、大変感謝している。

○　広くあまねくという基本方針があり、それをさらに九州・沖縄地方各局の地域に落とし込むということで、非常に多様性のあるテーマを一つ一つ発信することはよいことだと思っている。歴史観や安全保障の問題について、インターネットやＳＮＳなど、さまざまな媒体から情報が入ってくる時代になっている。それらの情報が

正しいかどうかを確認するときに、ＮＨＫが言っているからこれは間違いないといった、ほかの媒体の情報に対する答え合わせや軸となるような、正しい情報を発信し続けていくことを望んでいきたい。

○　鹿児島は、８．６水害から３０年というだけでなく、奄美においても日本復帰７０年ということで節目の年にあたる。そういった時代を知らない人たちが増えている中で、若い人たちにどうやって伝えていくかというのは重要であり、より興味を引くような形を考えてほしい。また、「かご調～あなたの疑問募集します！～」のような視聴者の疑問を募集し調査する企画があったが、今後も地域の課題に対してしっかりと調査し放送していただきたい。アフターコロナということでインバウンドも回復してきているが、以前よりも地方が注目されてきているからこそ、日本国内の魅力的な、その土地に住んでいても知らない部分をさらに掘り起こして伝えていくことが重要だと思っている。そのうえで、いかに番組を視聴してもらうかも大切であり、デジタルなどさまざまなコンテンツと連携して、若い世代に伝えていくことを重点的に取り組んでいただきたい。ジェンダーや環境問題といった関心が高まっているテーマについても、ＮＨＫだけではなく民放や他業態と連携することで、より見てもらえるようになるかもしれない。人々に寄り添ってもらえるようなＮＨＫになるにはどうすればいいかを考えながら、引き続き番組をつくっていただきたい。

○　宮崎局の「もっと若い世代へというスローガンから、若い世代と共にコンテンツを制作」の取り組みのような成功体験が九州・沖縄地方で広がっていくことを期待している。学生だけでなく２０～３０代にも寄り添うことで、若い層にたくさんＮＨＫを見てもらい、より地域から活発な動きにつながればと感じている。また、その活動を取材することで、刺激を受ける人がさらに増えていけばとも考えている。さらに、アフターコロナによって世間の雰囲気も変わってくると思われることから、テレビだけでなくイベントも企画し告知も行うことで、いろいろな世代が集える放送局となっていただきたい。

○　沖縄戦や首里城再建、基地問題や貧困問題などの沖縄が抱える課題については、引き続き丁寧な取材を行っていただきたい。また、2023 年には「ＦＩＢＡバスケットボールワールドカップ 2023」が予定されている。沖縄のチームである琉球ゴールデンキングスからも日本代表に選出されるかと思っているが、地元スポーツを盛り上げるという点でも、引き続き取り上げていただきたい。さらにもう一つ、奄美日本復帰７０年に向けて、当時の島民は復帰をどのように捉えていたのか、どう受け止めたかということを、地元目線で取材された内容で見てみたい。奄美群島と鹿児島本土とのギャップといったものも含め、沖縄と奄美の間での複雑な気持ちのやり取

りなどが取り上げられることを楽しみにしている。

（ＮＨＫ側）

バスケットボールについては、放送権料の課題もあるが、琉球ゴールデンキングスは沖縄ではとても人気があり、そういった関心に応えていかなければならないと思っている。沖縄のスポーツの魅力はしっかりと伝えていきたい。

○　かねてから言われていて、なかなか実現されてこなかった地方創生がいま、一気に実現できるような流れが来ている。そういった意味で、各局における地域の情報発信はすごく重要だと感じている。東京では埋もれてしまう取り組みも地方では目立ち、地域を活性化するという視点ではそういった取り組みも今後増えていくのではないか。若者や新しいことに挑戦する人たちが地方で行っている取り組みを放送することで、日本全体の活性化につながるのではないかと期待している。また、スポーツで地域を盛り上げるという点については、昨年度以上に中継を行うことで、視聴者にスポーツのおもしろさを伝えていってほしい。ただ、スポーツを活性化させるためには、各スポーツチームがきちんと経営していけることも必要である。放送権料などの課題もあるが、まずはそれらの敷居を低くして、みんながスポーツを楽しめるようになるとよいのではないかと思っている。

○　諮問された「２０２３年度九州沖縄地方向け地域放送番組編集計画（案）」については、各委員の意見の趣旨が番組編成に生かされることを前提に、原案を可とし、答申をしたい。

○　異議なし。

（ＮＨＫ側）

答申を受け、このあと具体的な地域放送番組編成計画について決定し、３月の審議会で編成計画についてご説明したい。

＜放送番組一般について＞

○　２月１日(水)のクローズアップ現代「安いニッポンから海外出稼ぎ　▽時給三千円バイト▽低賃金に見切り」を見た。海外での出稼ぎについて、夢がある、簡単にお金が稼げるなど、危険性には触れずにポジティブなことばかり取り上げて放送して

いたため、これは大丈夫なのかと不安になる番組であった。リアルタイムのＳＮＳを見ても、前向きなツイートであふれていた。仕事内容は簡単そうで早く退勤でき、遊ぶ時間もある海外へ行こうといった内容をそのまま受け止め、危険性や将来のことを深く考えない人たちが多いという印象を受けた。海外に出稼ぎに行くことに関しての注意喚起は、わずかな時間に少しのテロップとコメントで紹介しただけであり、国内で働いていた時よりも給料が上がり、貯金ができるようになったなど、夢のある話ばかりであり、安易に海外への出稼ぎを選択してしまうのではないかという危険性を感じた。グローバルな人材になれるかどうかも疑問であり、高度人材までもが流出してしまった日本が今後どうするべきかが重要であることから、そこを掘り下げてほしかった。海外へ行く若者を取り上げる前に、給料が安く、働いても正当な評価が得られないなどの問題を含めた日本の将来について、若者と一緒になって考えていけるような番組をつくってほしい。

○　２月３日(金)のザ・ライフ「埋もれた特許を掘り起こせ」を見た。埋もれた特許というと全国に共通する内容であり、地域ならではといったローカリティがどこにあるのかと疑問に思っていた。ところが、全国的なテーマでも、具体的な課題を地方に求めることで、地方発全国ネットで放送できる経済番組をつくれることが分かり、大変注目している。また、２５分という短い時間で番組内容が過不足なくまとめられていた。コメンテーターの森永卓郎さんについても、番組の構成がしっかりしていたこともあるが、的確で無駄のないコメント内容であった。今後も、全国どこでも通用するテーマの素材を九州・沖縄地方に求めていく取り組みを続けてほしい。

１月３０日(月)の「ロクいち！福岡」を見た。福岡と言えば博多豚骨ラーメンというのが一つの定説になっているが、最近福岡にできるラーメン屋は豚骨ばかりではないということを取り上げた企画であった。１月２６日(木)の西日本新聞でも同じようなコンセプトの記事を書いていたが、食べ物の話題は映像を使うテレビにはかなわないと改めて思った。また、翌日の「おはよう日本」でも取り上げ、前日の企画を拡大再利用という形で全国の視聴者に投げかけていた。前日とは異なるキャスターを起用し、福岡で見ていた視聴者の目先もうまく変えていた。取材したのは大阪出身の記者ということにも、ＮＨＫのよさが表れていた。

もう一つ朝の番組として、１月２５日(水)の「あさイチ」を見た。お金に困った女性に融資する「ひととき融資」に関する企画で、女性ディレクターが実際に融資をしている現場に出向いて取材していた。この取材自体かなりリスクが大きいと思ったが、いま世の中で起きていることを、主婦層が中心となる朝の情報番組で放送していることも、非常に刺激的であった。放送後のＳＮＳを見ると、「朝から放送すべき内容だったのか」という声もあがっていた。ラーメンのような内容であれば問題ないが、調査報道の独自ネタとはいえ売春類似行為の現場リポートのようなも

のを、朝の時間帯で放送するというのは、心の準備ができていない一般の視聴者からすると、見るのがつらいという印象を持たれたのではないかと思った。制作の担当者がこの件をどう考えているのか、教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

どの時間帯でどういった内容を放送するのかについては、ニュースに限らず、どの番組でも意識している。あえて主婦層が見ている時間帯に放送することで、こういった深い問題があることを伝えたいという、制作者の強い思いがあったのではないかと思っている。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫの持ち味というのは、地方のネタを全国に届けることができることではないかと感じている。「ザ・ライフ」の特許の話についても、地域経済を長く取材しているディレクターがいて、番組をつくっていく中でネタにたどり着いたと言っていた。この特許の話については、「ニュースウオッチ９」でもリポートとして放送した。また、ラーメンの企画についても、転勤があるＮＨＫだからこそ拾えたネタであると思っている。ネタを１本１本大事にどこの枠が適当なのかということも、当然取材した現場でも考えているが、引き続きいろいろな意見を聞きながら、よい時間帯で放送するという形で進めていきたい。

○　２月３日(金)のドキュメント７２時間「奄美大島　ＦＭラジオを聴きながら」を見た。鹿児島といっても島々でことばは異なり、元気なことばから始まるラジオの演出を見て、方言のよさを実感した。生放送で飛び入り出演する場面など、その土地ならではの緩さがあり、地域の人々とともにつくっているローカルのラジオ局という、人々の距離の近さを感じた番組であった。集落にいる年配者の声を収録し、アーカイブとして方言などを記録に残す取り組みは、今後どの地域においてもとても重要なことだと改めて思った。スタジオを中心にさまざまな人々が出演する様子を伝えるとともに、後半では親の介護をしながらラジオを聞いている人にもスポットを当てた構成となっていたことで、両方の視点や思いが伝わってきて番組に広がりが出ていた。また、語りの市川実日子さんのナレーションがすばらしく、島のことばや温かさを通して見入ってしまった。この番組では、日本全国さまざまな場所が取り上げられているが、登場する人々は自然体で、カメラで捉える制作者との距離感が近いからこそ表現できることだと思った。

○　２月５日(日)の「ズームバック×オチアイ　落合陽一、オードリータンについに会う。」(Ｅテレ 後2:30～3:29)を見た。「デジタル×民主主義」という、本で読むと途中で挫折しかねないようなテーマを、わずか１時間で見せてくれる圧巻の編集力に感動した。この番組のおもしろさは、人間の能力を否定する思想の延長上にあるようなＡＩと、オードリータンさんという台湾の天才ＩＴ大臣の人間味と人間愛との対比にあったと思っている。落合さんが、早口で少し難解な物言いで問いかけるのに対して、オードリータンさんがとても分かりやすい平易な普通のことばで応答をしていた。そのやり取りを通して、課題の難しさもとてもわかりやすく見る側に伝わったのではないか。半導体の受託製造やデータ戦略で、アジアをリードする台湾のさまざまな事例紹介を見ながら、日本にいる私たちも時代の変化を受け止めて、アップデートしていかなくてはならないと思った。また、デジタル化に対する批判的検証といった視点はほとんどなく、ＡＩの課題については疑問が残るが、落合さんの世界観、未来像の提示に徹底した潔さのある番組だと思った。最後に戦争をテーマにした場面で取り上げられた、デジタルが構築する心の連帯、デジタル×民主主義の課題提示の行き着く先が、一連の台湾有事を想定していると思わせる点では、非常に身につまされるエンディングでのデジタルの活用事例であった。

○　２月６日(月)の映像の世紀バタフライエフェクト「ブルース・リー　友よ　水になれ」を見た。番組を見るまでは、ブルース・リーといえばカンフー映画に出演する俳優というのみの認識であったが、実際にはハリウッドや香港で映画スターとして大成しただけでなく、武道を追究し、また自分の人生を高めていく哲学的な思想を持った武道の人物であったと理解することができた。タイトルで使用されていた「ビー・ウオーター・マイ・フレンド」ということばも適切で、番組がこのひと言に集約されていた。ブルース・リーの人生観がもたらした、現代社会にまでつながる影響についても、順序立てがしっかりしているとともに、生前のインタビューも交えながら構成することで、わかりやすい内容となっていた。

○　２月７日(火)の「てげビビ！」を見た。総務省家計調査における餃子（ギョーザ）の年間購入額及び購入頻度について、宮崎市が浜松市・宇都宮市を抑え、２年連続日本一となったことを報じていた。県民の歓喜の様子を丁寧なインタビューで詳細に報じていたことに、好感が持てた。また、宮崎市内老舗餃子店での中継では、元プロ野球選手で野球解説者の金村義明氏が登場し、宮崎餃子への長年の愛情を語っていた。この金村氏への取材は宮崎餃子の魅力を異なる視点から紹介するだけでなく、宮崎がプロスポーツチームの有力なキャンプ地であることを併せて報じるという機

能も果たしていた。この金村氏へのインタビューはエンターテイメント性だけでなく、内容に厚みのあるものとなっていて非常に見応えがあった。この餃子に関する報道は、九州沖縄向け地域放送番組編集計画(案)において、宮崎局が掲げる重点事項「県内の『食』の魅力発信で地域活性化に寄与します」を体現したものであったと言える。その一方で、「なぜ、宮崎では餃子の消費が多いのか？」「なぜ、宮崎では餃子の生産が盛んなのか？」という、素朴な問いに答える場面があってもよかったのではないか。重点事項に「県民の疑問や要望によりダイレクトに応える内容をお届けします」と掲げている以上は、この点についても今後は掘り下げた放送を期待している。

○　２月１０日(金)のくまもとの風「失われゆく故郷―遊水地計画に揺れる集落―」を見た。令和２年７月豪雨で大きな被害を受けた、球磨川の上流寄りの大柿地区が舞台の番組であった。今後の甚大な被害を防ぐために、国の方針で大柿地区を遊水地にすることは、地元の住民にとっては衝撃的な話だったのではないか。住民の移転問題によって大きな溝ができ、これまで仲がよかった集落の関係が悪化していく様子も描写されていた。国の方針を受けて人吉市役所の課長が、反対派の住民と話をするために１軒ずつ訪ねて回っていると言っていたが、そういった現場の痛みにも想像力を働かせることが重要ではないかと感じた。この番組は熊本だけではなく、過疎化が進む日本全体において同様の問題が起こり得るという示唆を与えてくれる内容であった。２年半にわたってこの難しい問題を追い続けたことに感銘したと同時に、ナレーションが非常に落ち着いているなど、番組全体が洗練されていてよかった。

○　２月１１日(土)に再放送されたサッカーの園～究極のワンプレー～「サッカーの園アウォーズ２０２２」（総合 後 3:30～4:19)を見た。単に試合の中継や結果を伝えるだけではなく、Ｊリーグのおもしろさや新たな視点を、サッカーに関してあまり知識がない人たちに対してもサッカーの魅力を興味深く伝える番組であった。出演者の中村憲剛さんや中澤佑二さんといった、かつての日本代表選手たちが繰り広げるトークの掛け合いも楽しく、興味深く見られる内容であった。今後も定期的にこういった番組をつくることで、コアなサッカーファンだけでなく、新たにサッカーを楽しみにして見る人が増えるようになってほしい。九州・沖縄地方各県にＪリーグのクラブがあり、Ｊ１・Ｊ２・Ｊ３ともに九州ダービーと呼ばれる九州どうしの対戦カードも含まれている。ぜひとも、地上波のインターローカルでの中継など、お互いの地元でサッカーを盛り上げていただきたい。

○　２月１３日(月)の映像の世紀バタフライエフェクト「朝鮮戦争　そして核がばら

まかれた」を見た。冒頭から、マッカーサーが平和主義者だとして、日本人が支持していたという驚きの描写であったが、その後そうした見方がひっくり返っていく淡々とした進行が、ナレーションのよさも相まって心地よく感じられた。また、沖縄から見た日本の現代史などを思い起こしながら見ることもでき、非常におもしろかった。この番組では、小さな出来事のつながりから、大きな歴史のうねりが生まれるという展開が多いが、今回の朝鮮戦争は王道ともいえる大きな出来事が続くこともあり、いつもの回とは異なっていた。ただ、近現代史の解像度というのは、人によって理解が違うことから、見せ方には幅があってもよいとも感じた。番組の合間にちりばめられているエピソードが多くスパイスとして効いていて、何となく今の日本とつながっているなと考えさせられる回であった。

（ＮＨＫ側）

ザ・ライフ「埋もれた特許を掘り起こせ」については、経営者やビジネスに携わっている視聴者層を意識して、番組をつくったと思っている。今回も数多くの番組について、貴重な意見をいただき感謝している。いただいた指摘を踏まえて、今後の番組づくりに生かしていきたい。

ＮＨＫ福岡放送局
番組審議会事務局

２０２３年１月ＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会

１月のＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会は、１９日（木）、ＮＨＫ福岡放送局（ウェブ開催）において、８人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、事前に視聴した、いちおし！九州沖縄　プラスみやざき「３１文字から、アオハル～俵万智のわけもん短歌～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に２月の番組編成の説明、視聴者意向および放送番組モニターの報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	古荘　貴敏	（株式会社古荘本店代表取締役社長）
委　員	乾　眞寛	（福岡大学スポーツ科学部教授）
	岡野　涼子	（一般社団法人ＮＩＮＡＵ代表理事）
	楠田　喜隆	（株式会社雲仙きのこ本舗常務取締役）
	久保田　正廣	（西日本新聞社論説委員長）
	関西　剛康	（南九州大学副学長）
	吉島　夕莉子	（吉島伸一鍋島緞通株式会社５代目技術継承者デザイナー）
	吉水　請子	（極東ファディ株式会社取締役商品経営本部本部長）

（主な発言）

＜いちおし！九州沖縄　プラスみやざき
「３１文字から、アオハル～俵万智のわけもん短歌～」
（総合　１１月５日(土)放送）について＞

○　短歌に対して昔の文化や古いイメージといった思いが強く、興味もなかったことから、短歌が詠まれている場面では共感できない部分もあった。しかし、番組を見続けることで、俵万智さんの人柄やことばの意味の大切さに気付かされた。特に、俵さん本人の若い頃の失恋体験談をもとに短歌をつくられたことなどを、テレビでありのままの形で話している姿には引き込まれていった。また、番組の最後では、これからの若者（わけもん）の人生を応援する激励のメッセージもあり、見ている私自身にも通じるところがあってよかった。改めて、自分のことばで表現することや、日常を丁寧に生きることについて考えさせられ、出演していた若者たちが詠んでいた短歌にも、刺激や新鮮さを感じられる番組であった。

○　宮崎の子どもたちはもともと短歌を詠む土壌があるといった話や、宮崎の夕方のニュースコーナーを掘り下げた形でつくった番組ということを聞いて、こういった取り組みが全国に向けてムーブメントとなってほしいと期待感を持った。子どもたちのみずみずしい感性とそれぞれが抱える複雑に揺れる感情に、胸が締めつけられた。インタビューを通して、この子どもたちの背景にある出来事などを知り、冒頭の俵さんのことばの意味がさらに深まり、最後まですっと一本筋の通った番組になっていた。過剰な演出もなく、子どもたちの目に映る風景や景色を想像しながら、忠実に再現していた点がとてもよかった。うまく詠むとか短歌を勉強するという以前の、短歌が持つ本質的なことに気づかせてくれる番組であった。

○　宮崎県民向けの番組で、すでに県民と短歌の距離が近いことから、なぜ番組で短歌を取り上げたのかといった詳しい説明は必要ないと思った。一方で、私自身が知識不足だったこともあり、なぜ宮崎で短歌なのか、なぜこんなにも活発に短歌が詠まれているのかという点が理解できなかった。タイトルの「アオハル」というフレーズについても、全世代に通じるものなのかと疑問に感じ調べた結果、若者向けに作った番組ということを知り、結果的にはアオハルということばや字体は世代に刺さるタイトルだったのではないかと思っている。ただ単に短歌を紹介するだけではなく、短歌を詠んだ背景や１０代の子どもたちの心情などがそれぞれ深掘りされた点はおもしろく、見入ってしまった。さらに、俵万智さんのことばや思いも同時にうまくまとめられていて、見応えのある番組であった。

○　短歌という３１文字の中に若者の素直な感性を盛り込めることの新鮮さを感じられ、宮崎で暮らす人々の様子や優しい人柄、若者の生活が素直に感じられる番組であった。「見ないふりあなたの隣の白い花　はやく春とか終わればいいのに」という、何とも切ない若いときの甘酸っぱい失恋の体験をもとにした短歌に対して、恥ずかしくないのかと思いながらも素直に歌える若さの在り方が非常によかった。短歌を歌った女子高生の、いつもの制服を着ている姿と美容師になるためにアルバイトをする化粧をした大人の雰囲気に近い姿とのギャップからは、青春や思春期の経験をしていく姿を感じ取ることができた。自分が１０代のときの思いをよみがえらせてくれる、アオハルということばがふさわしい爽やかな番組であった。また、２５分という番組尺については、もう少し見たいとも感じた。１０代のときにしか歌えないアオハルの歌を聴いて、５０代なら５０代にしか歌えない歌もあるのではといった思いも想起させられる、宮崎の自然と優しさにもあふれた番組であった。

○　２５分の番組に対し、これまでは長く感じることや、内容を詰め込み過ぎて消化

不良だと思うこともあったが、この番組はもっと見たいと思わせるようなまとめ方になっていた。また、短歌というとこれまでは新聞や雑誌などの活字メディアがお客様を集めていくようなコンテンツだったが、今回ＮＨＫでは作品をつくった人が出演し、どういう思いで作品をつくったのかを語り合うといったリアルに再現する手法を取っていて、その構成は新しいものであった。もともと宮崎は短歌が盛んな地域ということで思いついた企画かもしれないが、普遍性があり、ほかの地域でも短歌や俳句、文芸を取り上げ展開する手法として参考になるのではないか。県民性もあると思うが、出演した子どもたちは飾り気がなくナチュラルに宮崎弁を話していた。相手に対して信頼関係がないと、あそこまでふだんの自分を出すことはできないはずであり、人選を含めてどのような工夫をしていたのか聞きたい。タイトルの「アオハル」が一つのテーマと話していたが、これはつくり手の遊び心みたいなものがあったからこそ、うまく目立ったものだと感じている。宮崎の文化の多様性を発信していくためにも、ローカルだけでの放送ではなく、九州沖縄や全国でも宮崎の新しい一面を紹介する番組として展開させていってほしい。

（ＮＨＫ側）

この番組を担当したディレクターは､出演者を決めるにあたり、応募者一人ひとりに実際に会って、番組にふさわしいかどうかを取材してきた。しかし、１０代ということもあり、短歌で自分の内心を吐露するといったことに難色を示し、出演いただくまでに苦労したと聞いている。なかなか心を割って話してくれない学生もいたため、宮崎出身の若い番組スタッフを連れていき、宮崎弁で話しかけることで内面を引き出していくような工夫も行った。

○　心情や自分の内面を映し出すものが短歌だと理解していたが、つくった人の内情や心情を映像にすることでこんなにも背景が広がるのだと鮮明に感じ、短歌とテレビの相性の良さに気づくことができた。「十代には十代にしか歌えない気持ちを十代のときに形にしておく」という俵万智さんのコメントにもあったように、ガラスのようにきらきらした、大人の私たちが恥ずかしくなるくらいとても美しく、そしてはかないさまざまな感情が映像と一緒に現れることでより鮮明に響いてきた。その人自身のことを知らなければ、そこまで深く理解することはできないが、映像が入ることで、なぜこの短歌をつくったのかということや日常の風景がこんなにも表現できるのものだと考えさせられる番組であった。忙しく自分の気持ちを振り返る時間が持てないときに、この番組を見ることで少し落ち着いて物事を考えるきっかけが生まれる。そういった意味でも、夕方にこういう企画を放送することは十分に意味があるのではないかと思った。

○　１０代の若者のことばが非常にピュアで心に刺さってきた。「十代には十代にしか歌えない気持ちを十代のときに形にしておく」という俵万智さんのことばで、自分は１０代のときに何か短歌を一つでも残したかと振り返るきっかけになった。宮崎の小学校や中学校など、学校教育の場ではかなり短歌が浸透しているのか。そうだとすれば、ことばの教育としてすばらしいもので、宮崎の子どもたちは自分の１０代の短歌を大人になっても持っているものなのかと非常に興味を持った。ＳＮＳにより、ことばを詰めたり略したりと日本語が変わってきている中で、ことばに向き合うのは非常にすばらしい視点であった。ただ、題材については、出演した本人たちが同意していたとはいえ、いじめやからかわれたりする材料にならなければよいがと心配してしまった。失恋の歌では、本人が説明する前に俵さんの失恋の体験談をし、タイミングとしてはよかったと思っているが、俵さんの話がなくいきなり彼女の体験談だときつかったのではないか。ただ、結果的には１０代にしか感じられない受け止め方をしていて、それを表現できたのがこの番組だと評価している。ちょうど、１７日(火)の連続テレビ小説「舞いあがれ！」で、最後に詠まれた短歌に俵さんがＳＮＳでコメントし話題になっていたこともあるが、短歌という新しい切り口でＮＨＫのローカル番組を紹介するといった視点では、非常に新鮮な番組であった。

（ＮＨＫ側）

若山牧水の出身地である日向市では、多くの人が小学校の授業で短歌を詠んだことがあり、宮崎県全域でも同じような取り組みをしていると聞いている。そういう下地も含めて、宮崎の短歌に対する環境はほかの地域とは異なっているように感じている。

（ＮＨＫ側）

日向市では、俵万智さんが選者を務めている高校生の短歌大会が毎年夏に開かれている。また、小学校低学年から高校まで一貫して短歌を作る文化が受け継がれていると聞いている。

○　短歌はいろいろな人生経験を積んだ人が詠むからこそ優れた作品が生み出せると思っていたが、そういった固定観念をがらりと崩し、若者だからこそ生み出せるものもあることを気づかせてくれた番組だった。それが顕著に現れていたのが「見ないふりあなたの隣の白い花」といった歌で、そのときの感情を吐露し、それを歌にすることは若者だからこそできる良い短歌づくりであるように感じた。ここ最近、和のすばらしさをもう一度見直す風潮がある中で、こういう番組をつくることは我々にとっても非常によいことではないかと、その視点から考えてもよい番組であった。

○　「わけもん短歌」として短歌だけ紹介するだけでなく、作った人の日常にも目を向けたことで、とても興味深くおもしろい番組になっていた。短歌からも意味や思いが一方的にイメージはできるものの、どんな人が作り、どんな背景や思いがあってそのことばが生まれたのかを知ると、短歌がまた異なって見えてくる。５人のそれぞれの短歌と合わせた映像から、その歌にまつわるエピソードとその人の日常ドキュメントの流れは、限られた枠の中でも分かりやすく編集されていた。ドキュメントの映像においても、右上に小さくともその人の短歌が文字として出ていたのも分かりやすくてよかった。短歌が家族に目を向ける機会となっているという高校生、そして俵万智さんも「歌を詠むとは日常を丁寧に生きること」と言っているように、短歌を通して見えてくる世界があるのではと感じた。１０代だから詠める感性の短歌と映像に、ほのぼのとした気持ちになった番組であった。

○　１０代がみずみずしい感性で詠む短歌を、それぞれの背景を丁寧に取材しながら構成するというコンセプトは理解し、子どもの事情に寄り添うことも大切だと思ったが、それだけでは「それぞれいろいろあるんですね」という表面的な感想しか出てこなかった。誰に向けてつくった番組だったのかが分からないままで、２５分の尺も長く感じた。もとは夕方のニュース番組の人気コーナーとして、ほっと一息つけるような短いコーナーで人気があるのは理解できるが、２５分番組としてフルコースを構成するのは、相当な工夫がないと難しいように感じた。

（ＮＨＫ側）

短歌の企画は来年度以降も夕方のニュースで続け、今回のように特集番組としても取り上げていきたいと考えている。情報性について、最初に説明し過ぎると子どもたちのきらきら輝く短歌の本質を邪魔してしまうのではないかと考えた結果、そぎ落とすことにしたが、もう少し工夫できたのではないかと思っている。１０代のあまりにも無垢なことばに、俵さんが最終的に補助線を入れたことで、一本筋が通ったと感じられる番組になった。宮崎で培っている文化を大切にし一緒に育てていくという気持ちで、これからも番組制作を続けていきたい。

（ＮＨＫ側）

もともと宮崎の皆さんがこの企画について知っているということを前提にして作った番組ではあるが、宮崎でも 100％知られているとは限らないわけで、そういう人たちでも違和感や疑問を持

たない表現というのは、工夫すれば絶対にあると思っている。そういった表現を何とか紡ぎ出していくのがプロの仕事だと改めて実感した。制作現場と協力しながら、今後の番組づくりに生かしていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　１２月１６日(金)のザ・ライフ「“安保大転換”　南西諸島で何が？」を見た。安全保障関係３文書の閣議決定が行われた日で、非常にタイムリーな番組であった。今までは北朝鮮や南方の話と思っていたものが、鹿屋に無人偵察機が来て南西諸島全体に次々と基地ができ、新たなあつれきも生まれているということが２５分間でよく分かった。廣瀬アナウンサーのコメントも無駄がなく非常に聞きとりやすいもので、難しいテーマでも分かりやすく語ろうと工夫しているのが伝わってきた。今後もあのスタイルを踏襲すると、優れた報道アナウンサーになるのではないか。また、鹿児島から沖縄にまたがる南西諸島を一元的に捉えるのは、民放ではなかなかできないＮＨＫの力だと思っている。

１月８日(日)のこころの時代～宗教・人生～「小さきものの声を聞く～思想史家・渡辺京二の遺言～」を見た。九州を代表する思想史家が１２月２５日に亡くなったこともあり、結果的にこの番組自体が遺言になったことで注目していた。なかなか本音を語ろうとしない渡辺さんが、方言を交えながらフランクに遠慮のないことばで話していたことから、取材した人は相当心の窓を開かせていると驚いた。水俣病など今後もいろいろな節目にタイムリーな形で、渡辺さんの声や考えを紹介する番組を放送してもらいたい。

○　１２月１７日(土)の「ロバート秋山Ｐｒｏｄｕｃｅ　緊急！町民オーディション」（総合 後 11:20～11:45／九州沖縄ブロック)を見た。クリエイターズ・ファイルで人気のロバート秋山さんの持ち味を全面的に生かした番組で、笑いが止まらず、それでいて吉富町という町のことがよく分かる番組であった。本来は町民が主体となって地域をＰＲできることが理想だが、何をＰＲすればよいのか、ほかの場所にない魅力とは何かに気づけていないことが多い。しかし、この番組はその町民たちをＰＲ活動に巻き込むカンフル剤のような内容であった。言われなければＮＨＫとは気づかないふざけた雰囲気を醸し出した番組だったが、その中でも地域の魅力を紹介するという点にはぶれがなく、番組づくりに新しさを感じた。吉富町のようにコンパクトな町だからこそ、突出したキャラクターで宣伝部隊となる方たちを発掘

できたのかもしれないが、また次回作を見たいと思える内容であった。ただ、ナレーションについては、声のトーンや言い回しが特定の民放番組を想起させるものであったため、今後はオリジナリティーを大切にしてほしい。

○　１２月２９日(木)・３０日（金）に２夜連続で放送された、ＮＨＫスペシャル　未解決事件　Ｆｉｌｅ．０９　松本清張と帝銀事件（第１部・第２部）を見た。確定死刑囚が亡くなり、ほとんどの人は過去のことだと思っている事件に対して、無罪を勝ち取ろうと動いている人々がいることを紹介するとともに、これは冤罪ではないかと蓋然性を示す非常に優れたドキュメンタリーであった。松本清張没後３０年という節目で地域に特化したり専門家が語り合ったりする番組が放送されてきた中で、ＮＨＫはこれを最後に持ってくるかと驚かされた。この番組では、ドラマとドキュメンタリーといった二つに分けた構成で、すっきりとまとまっていた。時間をかけて制作した番組だと思うが、そもそも番組を制作する際は同時にいくつものテーマを並行して追っていくものなのか、それとも一つテーマを決め、特定の人たちが追っていくものなのか。番組のつくり方について何か工夫があれば教えていただきたい。

（ＮＨＫ側）

「ＮＨＫスペシャル」という本道のドキュメンタリーをテレビの前でゆっくり見るという時代ではなくなったときに、ＮＨＫのもう一つの柱であるドラマと融合させることで、両方の価値を高めていこうという新しい取り組みがこの未解決事件であった。未解決事件だと分かっているのに視聴者を納得させるという非常に難しいテーマであるからこそ、ドラマをうまく活用してきたと思っている。この番組では、これまで番組関係者が取材するスタイルであった中で、今回は松本清張さんという取材者をその間にかませたことも新しい挑戦であった。歴史をさかのぼれば未解決事件はいくらでもあるが、今回の番組は次の展開の難しさをまた感じさせる演出だったと感じている。

○　１２月３０日(金)のドキュメント７２時間　年末スペシャル２０２２で視聴者投票９位に入った「絵本専門店　わたしの物語」(総合　後 1:05～1:35)を見た。東京神保町にある人気の絵本専門店ブックハウスカフェを舞台にした７２時間の密着取材だったが、絵本を通じて今を生きている人々の心の声を聞き、大人たちにこそ絵本が大切だということが伝わってくるなど、考えさせられる番組であった。昼間は絵本専門店だが夜はお酒を出すバーになり、現代人の心の闇や疲れている現状でありながらも希望を持っている姿など、さまざまな人の日常を伝えていくというよい

番組であった。

１２月３１日(土)の「第７３回ＮＨＫ紅白歌合戦」を見た。この年末年始にＮＨＫの番組をたくさん見てきたが、私にとっては紅白歌合戦こそが、この季節の風物詩であることを改めて感じることができた。これからも、ストレートで人々の心に響くような番組をつくっていただきたい。

○　１２月３１日(土)の「第７３回ＮＨＫ紅白歌合戦」を見た。歌合戦というと勝負をやり合うという構図にこだわってきたところがあるが、今回は交互に歌わない「歌祭り」というイメージであった。ジェンダーの問題もあり、男女分けること自体に世の中の反応もさまざまであることから、現代にあわせてバランスよくつくられていると思った。ＮＨＫホールにお客さんが入るとアーティストも気合いが入り、テレビで見ている側も盛り上がって一緒に楽しめるのは、有観客で行うライブの強さだと思った。ただ、今年はコロナ禍でも行動制限のない年越しで、ＮＨＫに限らずメディア全体、そして政府がそのまま年越しを迎えていったが、本当にそれでよいのだろうかと思っていた。初詣や正月のスポーツなどを取り上げれば、どうしても人の動きを促進させてしまう。紅白歌合戦のように国民的なインパクトのある行事をあのような形で放送すると、「もうコロナは大丈夫だ」という空気を作ってしまうのではないか。年明け以降、コロナ第８波の感染者が増えているわけだが、ＮＨＫとして人の動きが増えてしまう点をどのように考えていたのか教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

３年ぶりに有観客で開催した紅白歌合戦は、お客様と一体になるライブ感の中で、歌の力を最大限に生かしてほかの演出を極力削るというのが、今回の姿勢であった。また、紅白歌合戦はこの番組だけで成り立っているわけではなく、その前に放送する「ＳＯＮＧＳ」や「うたコン」、夏に放送した「ライブ・エール」においても、お客様だけでなく出演者や裏方周りでも感染症対策も行ってきた。その結果、クラスターの発生を起こさずに開催できるめどが立ったため、今回はほぼ満員の観客を入れて紅白歌合戦を放送するに至った。指摘のように、人の動きを増やしかねないという影響があるかもしれないとは考えていたが、今回の有観客での実施については、感染症対策を常に積み重ねながらやってきているものだと理解いただきたい。

○　１月１日(日)のＮＨＫスペシャル　混迷の世紀「２０２３巻頭言　世界は平和と秩序を取り戻せるか」を見た。正月のお祝いムードの中にこの番組を見ることで、世

界を取り巻く状況により、日本はこれから危機感が増していくという現実に引き戻されるような緊張感と気づきのある番組であった。ふだん夕方に放送されているニュースでは、出来事を断片的にしか見られないため、今回のシリーズのように大局的に物事を考える番組があってもよいのではと思った。ただ、食料難のテーマの中でフランスの経済学者のジャック・アタリさんが、日本は食糧自給率が低く、今後食糧危機に陥った際は解決するためにも昆虫食を進めれば、食べ物不足、農業生産者の所得、雇用の維持が一気に解決できると言っていた。一つ一つかみ砕いていけばそうかもしれないが、言い回しには違和感があった。また、番組の最後は河野解説委員が締めくくるのかと思っていたが、国連事務次長の中満泉さんが、日本も世界の危機と連動していて、自分たちが危機感を持たないといけないのに、日本は島国だから危機感が薄いという話もしていた。他人事のように物事を捉えた言い方で、個人的には残念であった。タイトルの「混迷の世紀」についても世紀の語源を調べたところ、２０世紀、２１世紀と 100 年単位で使うもので、番組内容を見ると、アメリカの問題などは 1980 年代から続く状態でもあり、この番組では世紀ということばをどのような認識で使われているのかと疑問を抱いた。

（ＮＨＫ側）

「混迷の世紀」は、知の巨人とも言うべき方々のインタビューをあえて１月１日に出すことに、公共メディアとしての覚悟を示した番組であると認識している。また、こういった番組は解説委員の発言で締めることが多いが、「身近にあるさまざまな課題の中について考え、議論する中にこそ答えがあり、それが混迷の世紀を生きるすべだ」という趣旨の国連事務次長のコメントは、番組を凝縮するものとなっていたため、締めのコメントとした。世紀ということばについては、この２１世紀がある程度、民主主義が落ち着きながら世界が平和に向かっていくのかと思いきや、ウクライナ侵攻に象徴されるように非常に強権的な国家が出てきて、民主主義が正しく機能しづらいという、まさに「混迷の世紀」に入ってきたということを象徴している。これが 100 年続くのか、１０年２０年で終わらせるのかという課題が私たちに突きつけられているという思いで、この世紀ということばを使っていると考えていただきたい。

○　１月５日(木)のＮＨＫ　ＭＵＳＩＣ　ＳＰＥＣＩＡＬ　坂本龍一　Ｐｌａｙｉｎｇ　ｔｈｅ　Ｐｉａｎｏ　ｉｎ　ＮＨＫ（総合 後 10:00～10:45)を見た。がんを患い闘病生活をしている坂本龍一さんが、人生をかけて番組に出演していた。テクノ

の音楽を世界的に広め新しい時代を築き、若者の音楽シーンの中で非常に傑出していた坂本さんを若いときから見続けてきた自分にとって、坂本さんが病気になったことはとても気になっていた。通常であれば大きなホールでピアノがステージの上にあるような壮大なショットを映し出すと思うが、この番組では狭いスタジオで本人と距離が近い撮り方をし、実際に演奏している姿は白黒にするなど音楽や映像が非常にセンセーショナルなものになっていた。坂本さんの声がかすれている雰囲気や音楽に取り組む姿勢の解説も含めて、４５分と非常に短い番組とはいえ貴重な番組となっていたのではないか。ＮＨＫが今回、坂本さんの音と映像を後世につなげる番組をつくったことに、非常に感謝している。

○　１月５日(木)のＮＨＫ　ＭＵＳＩＣ　ＳＰＥＣＩＡＬ　坂本龍一　Ｐｌａｙｎｇ　ｔｈｅ　Ｐｉａｎｏ　ｉｎ　ＮＨＫ（総合 後10:00～10:45)を見た。２０２２年にステージ４のがんであると公表し闘病中の坂本龍一さんが、体力的に長い時間演奏できないことから、一日２～３曲をゆっくりと時間をかけて演奏収録された番組は、コンサートのようであり、とてもひき込まれた。久しぶりに見る坂本さんは痩せて体力は衰えてはいたが、一曲一曲全身全霊を込めるようにピアノを弾く姿には心を揺さぶられた。クールなイメージの坂本さんがピアノを弾きながら時折静かな笑みを浮かべる顔、ピアノを弾く後ろ姿もとても印象的だった。番組では、インタビューや撮影裏側の様子と演奏が交互に編集され、演奏ではモノトーンへと切り替え、メリハリがあったのがよかった。また、音楽に引き込ませる効果もあったと思う。さまざまな角度から映し出されるカメラワークがとても素晴らしく、静かにゆっくり響く演奏とともに映像を通して坂本さんの息遣いも感じられた。パンデミックと自分の変化により人生観が変わり、枯れた世界にひかれるという今だから生まれる音楽も興味深かった。これからも生きているうちは音楽を作り続けるという坂本さんが日本の素晴らしい音楽家だと改めて感じる、保存版にしたい心に響く番組であった。

○　１月６日(金)・１３日(金)のねほりんぱほりん「Ｔｗｉｔｔｅｒで婚活する人　前編・後編」を見た。ＮＨＫとは思えないような攻めた内容であった。人間が一切出ずに人形だけが出演し、その人形たちも本当に話しているかのように錯覚する演出がとてもすばらしく、赤裸々な話もこの人形たちが話すことですんなりと入ってきた。なかなか掘り下げないけど知りたいところをついてくるテーマでありながら、スタジオやＶＴＲもすべて人形で成立させているＮＨＫの技術に感動した。ＮＨＫのイメージがどんどん変わっていくのではないかとわくわくさせられるような番組で、今後もディープなテーマを楽しみにしている。

○　１月７日(土)に再放送された「ロバート秋山Ｐｒｏｄｕｃｅ　緊急！町民オー

ディション」を見た。重たい話題の番組が年末年始に続く中、たまたま朝食を取りながらであったが、ＮＨＫにこのような番組があるのかと思いつつ、笑いながら見ることができる内容だった。「鶴瓶の家族に乾杯」のように地域を取り上げる番組の形式が定番化されてきたのに対して、この番組は町を紹介するために地元の人をオーディションしキャスティングするという、斬新で非常におもしろい発想であった。地元でしか登場しない人や風景、食や文化を紹介するのがローカルの番組のよさだと思っているが、その手法として新しい切り口の番組になったのではないか。シリーズ化して別の町でも展開してほしい。

１月１１日(水)の「おはよう九州沖縄」では、九州のＪリーグチームの中では一番後発となる宮崎のＪ３・テゲバジャーロ宮崎の会長インタビューが取り上げられていた。照明設備などＪ２の基準を満たすようなスタジアムにしていくと、意欲的に語る姿がリポートされていた。九州ではそのほか、長崎が長崎市内に新しいスタジアムをつくるといったニュースもある。引き続き、各放送局の視点や切り口をもって、Ｊリーグの試合の見どころや選手の紹介だけでなく、クラブ全体の取り組みを紹介してほしい。

（ＮＨＫ側）

「ロバート秋山Ｐｒｏｄｕｃｅ　緊急！町民オーディション」について、続編の制作を期待する声をいただいた。その方向で鋭意、検討していきたい。

○　１月７日(土)のＥＴＶ特集　沖縄の“眼”になった男　～写真家・平良孝七とその時代を見た。沖縄の本土復帰前後、琉球政府および沖縄県の広報カメラマンとして数々の写真を撮影してきた平良孝七さんの展覧会の紹介から始まり、さまざまな人の証言や視点から平良孝七像を浮かび上がらせるというのは手法としては定番だが安定感があった。平良さんの描き遺したものを読むナレーターが津嘉山正種さんというのも非常に良いキャスティングで、大げさな抑揚をつけずに番組全体の静かなトーンにあっていた。その一方で、ほかの３人の語りやナレーションがわかりづらく、画面に集中したくても耳からの情報が多く落ち着いて視聴することができなかった。せっかく良い映像が撮れているのに、ごちゃごちゃしていてもったいないように思えた。ただ、平良さんと同時代を生きた人のコメントは取材した動画の中に留め、現代を生きる表現者の視点から作品や平良さんを見つめ、自分のことばで解釈するという構成は共感しやすく、写真家ならではの着眼点でもあった。

○　１月９日(月)のドキュメント２０ｍｉｎ.「コーヒーの香りに誘われて」を見た。「まったく新しいドキュメンタリーに挑戦します」というテーマが掲げられている

が、そのテーマにふさわしい、２０分とは思えない充実したすばらしいドキュメンタリー番組であった。コーヒーショップが舞台だが、そのコーヒーショップ自体もおしゃれで、コーヒーを入れる音もリアルに響いてきた。６０歳前後の夫婦が営んでいるおしゃれなコーヒーショップの紹介なのかと思いきや、実はそのナレーションをやっていた息子さんは、事故でもう亡くなっていて、このお店に集まる人も子どもや大事な人を亡くした方々ということが途中で分かり、すべてがひっくり返るような衝撃を受けた。傷を抱えた人たちが集まってくる重いテーマだが、前向きに捉えられる一面もこの２０分という時間に凝縮されていて、今後も継続して見たいと思える番組であった。この番組や大河ドラマ「どうする家康」など、若者をターゲットにした作り方となっているように、若者を取り込んでいこうとする意図を感じるが、実際のところはどうなのか教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

今の１０代、２０代はテレビそのものを持たない人も多く、番組をつくっても本人まで届かないという事態の中、デジタルも使って発信しているが、ＮＨＫに来ても見たいと思う番組がないと長続きしない。そうすると、今後ＮＨＫを見る層は高齢層のみになってしまう。これは今のメディア全体の課題だと思っているが、ＮＨＫの場合は特に若者層が少ないため、どうやって新たな視聴者を獲得していくかが大きな課題である。コンテンツというのは、ＮＨＫが一方的につくって送り届けるというより、私自身が大切にしている「共創共育」のように地域や社会と一緒に創り上げ､ともに育っていくといった側面がないと誰の心も打てない。「ドキュメント２０ｍｉｎ.」は､ＮＨＫの若手自身を育成する意味合いも持つ番組であり､今後はさまざまな番組を組み合わせて、ともに育つということを、ＮＨＫの中と外につくっていくことが大事なのではと思っている。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫの地域放送局は、その地域の方々のためにあると思っている。現在、宮崎ではＷＢＣの強化合宿に注目しているが、良いこともある一方で課題や懸念事項もある。地域に楽しい話題を伝えたいが、楽しいことばかりではなく、そういったことにも目を向けながら伝えていきたいと思っている。

（ＮＨＫ側）

「ロバート秋山Ｐｒｏｄｕｃｅ　緊急！町民オーディション」は、大都市ばかり注目されている中、地域でもこんなにも魅力があるということを伝えていくだけでなく、そこに住んでいる人々の力も加えて伝えていくにはどういった番組がいいのかという視点で制作してきた番組である。「ザ・ライフ」は、鹿児島局と共同で制作してきたが、なぜ今、南西諸島の防衛がこれだけ強化されているのかについて、いわゆる本筋と言われる部分はほとんど描いていない。自分の目で見て、今、奄美や鹿屋で何が起きているかをそのまま伝えることが良いのではと担当記者には伝えている。また、「こころの時代」に出演していた渡辺京二さんは、市井の人々の日常に対するこだわりなどに価値があるということを考えていた方だと思っている。地域のことを地域で放送することも大事だが、九州・沖縄で制作した番組を全国に発信していくことも両輪で続けていきたい。

（ＮＨＫ側）

今日いただいたご意見は、九州・沖縄地方の話ではあるが、全国に届けていくための番組づくりに関わってくる貴重なご意見だと受け止めている。来年度は、衛星波のうち１波を削減する計画になっているほか、デジタルをどのように展開していくのかといった点で、ＮＨＫとしてもいよいよ正念場にさしかかっている。そうした中で、本当に心に届くコンテンツをつくり続ける部分が薄れコストの話ばかりになると、結果として視聴者が離れていってしまうのではないかと思っている。いただいたご意見はきちんと持ち帰り、番組づくりに関わっているメンバーたちと共有していく。

ＮＨＫ福岡放送局
番組審議会事務局

２０２２年１２月ＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会

１２月のＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会は、１５日（木）、ＮＨＫ福岡放送局（ウェブ開催）において、９人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、事前に視聴した小さな旅「曳山（やま）駆ける町～佐賀県　唐津くんち～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に１月の番組編成の説明、視聴者意向および放送番組モニターの報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	古荘　貴敏	（株式会社古荘本店代表取締役社長）
副委員長	西野　友季子	（株式会社ニュー西野ビル代表取締役）
委　　員	乾　眞寛	（福岡大学スポーツ科学部教授）
	いのうえちず	（雑誌モモト編集長）
	岡野　涼子	（一般社団法人ＮＩＮＡＵ代表理事）
	楠田　喜隆	（株式会社雲仙きのこ本舗常務取締役）
	久保田　正廣	（西日本新聞社論説委員長）
	吉島　夕莉子	（吉島伸一鍋島緞通株式会社５代目技術継承者　デザイナー）
	吉水　請子	（極東ファディ株式会社取締役商品経営本部本部長）

（主な発言）

＜小さな旅「曳山（やま）駆ける町～佐賀県　唐津くんち～」
（総合　１１月２７日（日）放送）について＞

○　番組冒頭、唐津の町並みや唐津城などの情景が美しく非常に印象的であった。旅番組として、ドキュメンタリーのような説明的要素は意図的に省略したと推測しながら見ていた。唐津くんちにまつわる祭りのルールやしきたりなど全体像の説明があれば、この祭りを知らない人にとっても分かりやすくなっていたのではないかと、番組を見た後に感じた。女性目線での唐津くんちということで、各家庭で料理が振る舞われていたことも知っているようで知らなかった。振る舞い方についてさまざまな作法があるようだが、唐津くんちを知らない人からすると、それがどういう意味を持つのかが分からないままとなっていた。曳山の上に立つことになった美麻昂輝さんがどのような流れで立つことになったのかも分かりにくく、簡単に上がれてしまったようにも思えるなど、疑問が残る内容であった。

○　虹の松原をドローンで撮影するシーンや町の様子を紹介する演出など、冒頭から見る人を引き込んでいく工夫がなされていた。ところどころに映り込むディテールもおもしろく、ディレクターが地に足をつけて取材している姿がしみじみと伝わってきて、好感が持てる番組であった。ジェンダーが問われる時代ではあるが、くんち料理が祖母から母親、お嫁さんと代々継承されていく姿には感動し、祭りの役割分担も文化だと自然に見ることができた。また、伝統文化の在り方は受け継ぎながら生まれ変わっていくものだと思った。その一方で、個人的な疑問であるが、女の子が曳山に上がりたいと言ったら上がらせてもらえるのだろうかと知りたい気持ちになった。

○　唐津くんちの祭りの守るという思いが伝わってくる番組であった。若者の成長を見守る姿や、地域の古きよき営みを守っている現状を伝えるという視点もとてもよかったが、同時に複雑な気持ちにもなった。大分県日田市にも日田祇園という約400年続く伝統的な祭りがあるが、今回の番組に出てきた美麻昂輝さんのように小さい頃からずっと祭りに携わり、花形の役割を担うためにその地域で暮らし、周りから認められた人でないとできないという風習が残っている。その一方で、若者の減少により祭りの担い手がなく、どのように祭りを存続させていくかといった課題や、女性は曳山を引けないというジェンダーの問題がある。祭りが、これからの未来がどうなっていくのかという、現代社会を見るための一つのフィルターになっているように思えることから、ほかの地域でも今回のような番組をもっと作っていただきたい。

○　きれいな映像や描写を捉えるカメラワークが祭りや人の動きと相まって、唐津くんちがにぎやかで伝統的な祭りだということが伝わってきた。オープニングで橋を渡っていく曳山がその橋の下の水面にも反射していたり、エンディングでは虹の松原で曳山が踊っているような風景が見えたりするなど、祭りのよい点が感動的に伝わる完成度の高い番組だった。一方で、この番組の中核となる美麻昂輝さんと大西謡子さんがどのようにキャスティングされていたのかが気になった。事前に出演者が決まって番組を作ることとなったのか、それとも番組を作っていくなかでこの２人が出演することになったのか。どのような経緯でこの内容になったのかと疑問に感じたので確認したい。

（ＮＨＫ側）

この番組は、まずはディレクターが唐津くんちを取り上げたいという思いから始まった。唐津くんちは華やかな男性たちの祭りというイメージが強いが、その一方で女性たちがくんち料理など

の伝統を守り、進化させてきたことや、子どもにとっては今もくんちが通過儀礼になっていることを知り、そこから各町内を巡って描ける人物がいるのかを手探りで探した。各町にさまざまな方がいるがその中でもより視聴者に伝わりやすく、番組にも協力していただける方に出会い、最終的にはこの２人に出演していただくことになった。

○　ディレクターの感性や人柄、個性のようなものが番組ににじみ出ていたことに好感が持てた。女性や子どもの成長物語として曳山を描くというコンセプトは、十分に伝わってくるものであった。しかし、いまひとつもの足りなさを感じたのも事実であり、重点を置く軸足、メリハリや緩急といったものがあるとよかった。外から嫁いできた大西謡子さんがお世話をする中で、メンバーとして認められて成長していくというこの枠組みは、九州の祭りに共通している構造であり、九州に住む人からするとやや驚きや意外性に欠けていた。普遍的な部分を取り上げているからなのかもしれないが、もっと唐津らしい要素があるとさらによかった。コロナ禍で３年ぶりに曳山が出るという、祭りにかけた人たちの情熱や感情の爆発、祭りが復活する喜びなどをもう少しストレートに描くと、今年ならではの番組になっていたような気がする。全体を洗練し取り上げていてよい番組であったが、取材のなかで少し遠慮があり、２人の登場人物のディテールなど、やや掘り下げが甘いと思えるところがあった。

○　４０年近く放送されている番組の冒頭の音楽に懐かしさを感じながらも、地域のことを知ることができる心に残る温かい番組であった。唐津くんちが祭りの表舞台だけではなく、家庭や地域の人たちがお互いに助け合いながら、伝統として受け継がれている様子が表れていた。核家族が増え家族が集まる習慣が少なくなってきている今の時代に、祭りを通じて伝統を受け継いでいく家族の在り方というのはとても貴重で、日本文化を伝承するためにも大事なことだと思った。地域によっては、伝統文化や祭りを継承できずになくなっていくものも増えていることから、地域の取り組みなどを伝えていくための番組は必要だと感じた。「小さな旅」の放送はこれからも、全国の祭りや風景などを紹介していくロングランの番組として続けてほしい。

○　唐津くんちにはいろいろな人の思いが詰まっていて、それぞれの目線から見たくんちを丁寧に取材した、とてもよい番組であった。しかし、ジェンター関連の番組が数多く放送されている１０月から１２月に視聴したこともあり、少し違和感も覚えた。男性は祭りで女性はおもてなしという形や、女性はお嫁に来て家代々のおもてなしを引き継いでいく様子が前面に出ていることに、きつさを感じた。これが現実

で、この祭りがこれからも成り立っていくことは理解する一方で、もう少し映像や演出に工夫があってもよかったのではないか。地域のしきたりや文化がこのまま守られていくのか、これから時代の流れでどう変わっていくのか。女性のくんちといった視点はよいと思うが、それが前面に出過ぎていてもったいなかった。リアルに状況を伝えてくれるのがテレビだと思うが、伝え過ぎてしまうことも危険でそのあんばいがとても難しいとも感じた。

○　冒頭のレトロな音楽によって、地方の祭りをゆっくりと細部まで見られそうだと展開を期待させる始まり方であった。基礎練習なしには吹けないであろう笛を練習する風景や品格のある曳山、くんち料理ともてなしの心といった城下町の商家の伝統が脈々と伝わっている様子を通して、伝統や祭りの持つ意味を静かに考えることができた。しかしながら、なんとすてきな祭りだろうと引き込まれた反面、家という概念の変化や男女の固定的役割意識の解消といったダイバーシティなどの対応が、現在進行系の課題であることに気づかされた。さまざまな事例に照らし合わせながら、変えていきたい自分と守っていきたい自分といった葛藤のような思いを起こさせる番組であった。また、具体的な強い課題提示があったわけではなく、ディレクターが向けたカメラによって見えてきたあるがままの光景を眺めて、自分がどう感じるのかと考えさせられる番組でもあった。

○　曳山が躍動している映像には迫力があり、非常に見応えのある番組であった。ただ、冒頭の音楽やタイトルは大変重要で、我々世代以上は懐かしさを感じて引き込まれる一方、若い世代にとってはなじみがなく若者向けの番組ではないと判断し見ないのではないかと感じた。また、番組がまとまりすぎていて、すっと流れたようにも感じた。祭りにはよい面と悪い面があり、悪い面があるから祭りが嫌いになり、担い手が減り、廃れていくと思っている。そういった課題の部分を描くと、もっと深みが増すのではないかと思った。男女の役割分担が伝統であるとはいえ、表舞台は男性で裏方は女性となっていることについて、小学校からジェンダー教育を進めている昨今、その子どもたちが祭りの担い手の世代になったときにこのままでは成立しないのではとも感じた。伝統を守りながらも変えるところは柔軟に変えていかないと、本当に大事な伝統が失われるという示唆にも富んだ番組であった。

○　冒頭の曳山がまちの中を巡る姿はとても迫力があり勇壮であった。父親の影響で小さい頃から祭りが好きだった美麻さんの伝統を支えていく姿や表情が、うまく撮影されていてとてもよかった。また、くんち料理を作る謡子さんのように裏で支えている人もいることで、祭りが成り立つと改めて感じた。300 人分の栗の渋皮煮を１か月かけて作る話は本当に手間がかかっていると思うが、出来上がった渋皮煮を食

べる男性の姿を見ると、これを楽しみにしていることもよく分かり愛情が込められている料理だと理解できた。この料理も地域を支える大きな力だと感じた。料理をおいしそうに食べた男性たちを見送る女性が「唐津の人になってました、私」とにこやかに話す姿が印象的であった。地域に伝わる祭りや伝統文化を継承することは、大変なことだといまさらながらに感じ、これらの困難を乗り越えて、地域をつなぐコミュニティーの大切さや伝統文化を伝えていく姿を捉えたすばらしい番組であった。

（ＮＨＫ側）

伝統を守りながら変えていくということばがあったが、祭りだけでなく、４０年近く続く「小さな旅」もそうだと思っている。伝統の中で踏み込んだ取材をするのは勇気が必要だが、女性が曳山を引きたいと言ったらどうなるのかなど、ある意味突き破った新たな形で提示できていれば、さらによい番組がつくれたのではないか。祭りが未来の在り方を見るフィルターであるということばも出たように、そういう目線で伝統文化を伝えていくと地域に役立つような番組が出せるのではないかと思っている。今後も継続して取材を続けていきたい。

（ＮＨＫ側）

取材の中で分かっていても踏み込めないところや、どこまで踏み込みこんでいくのかといった考えや判断、想像力が必要になってくると思う。人間同士の取材などそういった現場があっての番組や報道であることから､今後はその視点を大事にしていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　１１月１２日(土)のいちおし！九州沖縄　フカイロ！「おおいたピュア旅～水辺の希少種　大冒険～」を見た。１０月１４日(金)に大分県にて放送された番組が九州・沖縄地方向けに放送されたものだったが、大分の清らかな水やそこに暮らす生き物が好きなスーパーキッズたちが出てくる内容で、映像もきれいで気持ちのよい番組だった。また、１０月２０日(木)のいろどりＯＩＴＡで放送された日田の鵜飼いが、１１月９日(水)のＮＨＫニュース　おはよう日本で全国放送され、日田の人たちの間では話題になり、すごく喜ばれていた。日田の伝統的な鵜飼いの鵜匠さんの思いや課題が取り上げられていたが、地域の中で小さな営みをしている人たちを

全国放送で取り上げてくれるのは、ＮＨＫのよいところだと改めて思った。ディレクターが熱心に地域の中でいろいろな人や出来事、現象を探しているからこそ、こういったものが取り上げられるのだと改めて思った。これからも、日々の暮らしの中で光るものを見つけていただきたい。

○　１１月２２日(火)のクローズアップ現代「いよいよドイツ戦　日本代表ベスト８への“秘策”」を見た。ドイツ戦が行われる前日に、今大会の見どころをデータを用いて具体的に伝えていた。年配の方やサッカーをあまり知らない世代にも現代サッカーのトレンドを伝えるという意味では、大会の前番組として非常にすばらしい出来栄えであり、ドイツと互角に戦えるということを理路整然と伝えていた。また、元日本代表の中澤佑二さんが解説として出ていたが、直前で観察したドイツのキャンプ情報も伝えていて、大会に入る前の番組としてはすばらしかった。また、１２月１０日(土)のＮＨＫスペシャル「戦禍の国のキックオフ　～サッカーが映すウクライナのいま～」を見た。戦時下のなかで今も続くウクライナ国内のサッカーリーグと、ウクライナの人々がサッカーに対してどんな思いを持っているのかを伝える番組で、片や世界の祭典で湧き上がっているタイミングで、ウクライナの戦時下の状況をサッカーを通じて描いていた。９月から１１月までの３か月間の取材だと番組内で言っていたが、膨大な情報量と取材力で番組が制作されていてとても感心した。今もなお戦争は続いているため、何かまた別の形で取り上げてほしい。表のワールドカップと裏側にあるウクライナの現状を、サッカーという切り口で描いた番組であった。ところで、今回の「ＦＩＦＡ　ワールドカップカタール　２０２２」では、動画配信サイトで全試合が配信されたことによって、若者世代はスマートフォンなどを使って全試合無料で視聴でき、なおかつアーカイブでいつでも試合が見られるという便利で快適な環境となった。深夜に放送される試合もあった中で、自分たちの生活リズムを変えずに好きな時間帯に視聴できるという便利さは、オリンピックなどスポーツの大会を報道してきたＮＨＫにとって、まさに正念場だったと思える。さらに、元日本代表である本田圭佑さんが解説するという話題性も相まって、ワールドカップを地上波やＮＨＫ以外の形で見た人たちが一番多くなった大会になったのではないか。ただ、１１月２２日（火）から放送していた「ＦＩＦＡワールドカップ２０２２　デイリーハイライト」は全試合をカバーし、番組の仕立てもおしゃれで非常に分かりやすかった。朝のワイドショーで取り上げていた民放と比べてＮＨＫは帯で放送し、全試合を網羅していたというところでは、ＮＨＫらしくしっかりと報道していた。この番組は、今後の地上波やＮＨＫの世界大会、スポーツイベントの生きる道であるように感じた。

○　１１月２２日(火)のロクいち！福岡を見た。「子育てと仕事　両立の先に見えたも

の」という企画リポートに、歌手・ＭＩＳＩＡさんの母である伊藤瑞子さんが出演していた。自身も子育てで苦労をしながら小児科医として子どもたちと向き合い、“育児の共有”を学ぶために大学院に通うなど、今の時代のある意味トップランナーのような取り組みをされていることを初めて知った。さらに、ＮＨＫのホームページで掲載している「読むＮＨＫ福岡」では、番組の内容が写真と文章で紹介されていた。写真と活字でコンパクトにまとまっていてわかりやすくよい企画であった。

１２月２日(金)のザ・ライフ「ほたるの里のマツばあちゃん～長崎・石木ダム建設計画から６０年～」を見た。団結小屋・監視小屋に籠るおばあちゃんに密着取材をして、季節の移ろいとともに描いていく内容であったが、暗くなりがちなこの手の反対運動を、ある意味淡々と悲観的にも情緒的にあおることもなく、非常にうまい距離感で取材していると思った。続けて取材し、定期的に取り上げてもらいたいと思う番組であった。

１２月９日(金)の＃てれふく「氷川きよし　ふるさと福岡で語る“これまで”　そして　“これから”」を見た。福岡市の高宮中学校は、タモリさんや森口博子さん、博多華丸さんなど芸能人が多く輩出されている。最近では、活動を休止する氷川きよしさんも含めて、地元ではさらに注目度が高くなっている。氷川さんが活動をしばらく休むという大きな決断をしたなか、思い出の地を訪ねて過去を振り返り、歌手を目指した日や節目を振り返るという触れ込みだったからこそ、活動休止に至った深い理由や思いなどを番組で話すと思っていた。しかし、実際はその思いに触れることはなかった。報道とは違い、芸能人を取り上げる番組なので、そういった消化不良感もやむを得ないと思っていたところ、１２月１３日(火)のＫｉｉｎａパーティー～氷川きよしと最高な夜～(総合 後7:57～8:42)が放送された。ただ、この番組でもそういった話が出ることはなく、結局は紅白歌合戦を盛り上げるための一連の番組だったのかと思っている。氷川さんのように地元のトップクラスの歌い手が脚光を浴び、活動をしばらく休むというときに、いまどう考えているのかを語ってもらうような番組を期待している視聴者も多かったのではないか。

（ＮＨＫ側）

紅白を盛り上げるための番組という意見があったが、その点を意識したつもりはなく、今年で休養に入る氷川さんのふるさと福岡に対する思いというものを地元福岡の放送局として取り上げて伝えたいという気持ちが強かった。その上で、休養に至る氷川さん自身の気持ちの部分について、取材が足りないとか突っ込みが足りないとか言われればそうかもしれない。しかし、内面に関わる話でもあることから、こちらから突っ込んでいくというより、自ら語る日が来たときにお話しいただくことではないかと考えて

いて、氷川さんがまた気持ちの整理をしたタイミングで、そういうことをお伝えする番組ができればよいと思っている。

○　１１月２５日(金)のザ・ライフ「人工衛星　作るばい　～チーム福岡・町工場の挑戦～」を見た。福岡県が近年、宇宙ロケットや人工衛星の開発に力を入れていたことは、番組を見て知った。さまざまな人が関わり開発を進めていくことは分かったが、番組の冒頭で紹介されたベンチャー企業の社長・大西俊輔さんの思いや世界観が最後には薄れて見え、現場で回している人たちの苦労話になってしまっていた。しかし、イプシロン６号が打ち上がっていく光景はきれいで、実際のロケットが打ち上がっていく映像に引き込まれていく感じがして、すごくよかった。今回の打ち上げが失敗したことについて、失敗した理由の説明が足りていなかったようにも思えるが、番組の終わりが次回の発射に続く前向きな演出・表現となっていたのはよかった。

○　１２月２日(金)の＃ＢｅｙｏｎｄＧｅｎｄｅｒ九州・沖縄「ジェンダーをこえて九州で“わたし”として生きること」(総合 後7:55～8:40／九州沖縄ブロック)を見た。周囲の話も含めて、昔より家事や育児に参加している人たちは増えてきていると実感しているが、世代間や年代別で比べるとどこからどのように変わりつつあるのかなど、そういった視点でまた見てみたい。また、お笑い芸人の高田課長の生活を見た人が、自分は家事や育児に参加しなくても大丈夫だと安心されては困るため、変化が生じている側にフォーカスを当ててもよいのではないかと思った。家事や育児を積極的に分担している夫婦や、政治に参加している女性が多い議会を取り上げてみるなど、ポジティブな面や実際に行動に移していけるような具体例が出れば、もっとよかったのではないか。ただ、家事・育児、政治、男性の生きづらさという３つのテーマを詳しく扱うとなれば、４５分では時間が短いことから、番組を３回に分けてそれぞれのテーマをもっと掘り下げ、変わってきている面を打ち出していけば、みんながジェンダーについて考えていく番組になったのではないかと思う。

○　１２月２日(金)の＃ＢｅｙｏｎｄＧｅｎｄｅｒ九州・沖縄「ジェンダーをこえて九州で“わたし”として生きること」を見た。明るく親しみやすい番組でありながら、実は社会構造を変えていこうと明言する野心的で志のある番組であると感じた。番組のテーマが九州という風土の課題を想起させる内容であり、そこで生きている人たちの当事者意識を生んでいて効果的だと思った。さまざまな課題を畳みかけてくる展開に覚悟が伝わってきたと同時に、それにまつわる個別の課題もクローズアップされていて、ジェンダー問題の全体像をいろいろな場面を重ねて描き出す点

はとてもよかった。特に、高田課長と秋本ゆかりさん夫婦の家事負担の不平等を見える化する場面では本当に考えさせられた。ただ、高田課長が自分の親や祖父のことを触れたことによって、責められる側のありさまを勇敢に開示し、ある意味問題提起をしていたが、本当にそのような人なのかが疑問として残り、今回は彼が典型的なキャラクターを演じるところで留めてもよかったのではないかと思った。また、キャスティングについては、思いにあふれたコメントを発する親しみやすいゲストと、冷静な解説に加えて温かな対話による課題解決を示唆する専門家の組み合わせというのもよかった。ＨＫＴ４８・小田彩加さんの「選択肢を広げる世界」ということばが印象に残っていて、自分のことばにして語っていきたいと思った。細りゆく労働人口への女性の投入というマクロな国の戦略には触れず、テーマにある“わたし”の問題に集約させたところは、番組の目的にかなっていて、すっきりまとまった分かりやすい番組であった。

○　１２月２日(金)の＃ＢｅｙｏｎｄＧｅｎｄｅｒ九州・沖縄「ジェンダーをこえて九州で“わたし”として生きること」を見た。ジェンダーに関する番組はいろいろ見ていたが、これは九州という身近なエリアに限定することで深く考えさせられた番組であった。もともと九州というのは土地柄的に男性上位的な場所だと言われていたが、それをデータに基づいて説明したり、視聴者の赤裸々なことばで知らせたりして非常に勉強になった。高田課長と秋本ゆかりさん夫婦の１日を見ていて、自分自身も無意識にジェンダーバイアスがかかっているというのに改めて気づかされた。ジェンダーバイアスについては、長年積み重ねてきた根深いものがあり、これをどうやって変えていくのかと政治の世界でも言われているが、家庭や企業にとってもすごく重大な課題だと考えている。民間企業でも、いま行政で雇用における男女の均等な機会を確保しようとする取り組みが進む中で、女性のマネージャー率を上げるなどジェンダー課題を解決するような具体案を出すように言われている。無理やりにでもルール化しないと根深いジェンダーバイアスの形は変わらないことから、そこを変えていくために政治や経済の世界でも進めていかなくてはならないという示唆を与えてもらった番組であった。

○　１２月２日(金)のきんくる～沖縄金曜クルーズ～「シリーズ本土復帰５０年　最終回　これからの沖縄を語ろう」(総合 後 7:30～8:42／沖縄県域)を見た。沖縄本土復帰５０年の関連番組として、ローカル放送だけでなく全国放送でも取り組んできたが、その締めくくりを飾るにふさわしい番組だったと思う。沖縄に住んでいるといろいろな課題があるが、それを真っ向から取り上げている点で非常に好感を持った。番組のそれぞれの柱について、取材してきたＶＴＲが流れるが、それもこれまでの取材の蓄積がしっかり感じられる内容でよかった。しかし、これからの沖縄を語

ろうという前向きなタイトルであり、未来を語るのかと思って見ていたが、現状の問題について掘り下げていただけであったため、もう少し地元が描く沖縄の未来を感じさせる要素があってもよかったのではないかと感じた。さらに、番組の中では貧困やアメリカ軍の基地問題などの重いテーマの社会問題が続いていたにもかかわらず、エンディングではこれからの沖縄を担う若い世代ということでキラキラした若い子が次々と出てきて、内容とのギャップが大きいと感じた。深刻な問題と若者たちの間をつなぐ、県民自身が描く未来像みたいなものがあったら、もっとよかったのではないかと思った。

○　１２月５日(月)のエマージェンシーコール　～緊急通報指令室～「埼玉」(総合 後10:00～10:45)を見た。番組冒頭に出てくる指令室のオペレーターと、夜の街のきれいな風景から始まる演出に引き込まれた。ふだん見ることのない指令室の空気感や電話を受けるオペレーターの背景、仕事に対するそれぞれの思いなどが、簡潔ではあるが丁寧に映像とことばで伝えるすばらしい番組であった。興奮している通報者に対し、冷静に安心できるように声をかけ、時には寄り添うことを大切にしているオペレーターの姿に感動した。また、ナレーションを入れずにオペレーターの表情と通報者の声を字幕のみで伝えたり、緊迫感のあるやりとりのなかで穏やかな映像が流れたりするなどといった演出によって、人間の温かさを感じつつ、不思議と安らかな気持ちにもなれた。日本の現状やいろいろな人間模様が見えてくる、興味深い番組であった。

○　１２月１１日(日)の小さな旅「笑顔咲く南国の海～宮崎県　青島～」を見た。冒頭の空撮によって映し出された青島の全景が、とても印象的であった。１１月の撮影だったが、宮崎の温暖な気候もよく表されていた。地元中学校のサーフィン部の一員である少女が、青島神社の子どもという点もおもしろかった。サーフィンを始めるまでは、地元でありながら青島の海に対して興味がなかったが、どんどん海が好きになったということが伝わってきた。また、サーフィンで訪れたことがきっかけで、宮崎の女性と結婚した西オーストラリア出身の外国人男性のことばに青島らしさが表れていた。パイナップルを販売する男性の働く姿も、二人とも高齢ではあったが、生き生きと仕事をする姿は人間の豊かさを感じられた。以前の新婚旅行ブームのように訪れるだけの場所でなく、暮らしたい人々が集う場所に青島の海は変化し、宮崎在住の私としては青島の魅力を伝えてくれてとてもうれしく感じた。宮崎の大自然に囲まれて、心豊かに暮らす人々の生活が描かれており、ゆったりとした時間が流れ、優しい雰囲気も伝わるよい番組であった

（ＮＨＫ側）

佐賀局は若手の職員が多く、番組や取材の意見を交換したり雑談したりすることがあるが、皆様の話を聞いて本当に番組の受け止め方の幅が広いと感じた。いただいた視点やポイントをしっかり受け止め、若手職員との話を深めていきたい。

（ＮＨＫ側）

ジェンダーに関する番組は、全国的には多く取り上げているが、ローカルではあまり放送してこなかった。評価することばもいただいた一方で、もっと掘り下げてほしいという意見もいただいた。この問題が続く限りは、継続して放送していく必要があると思っている。視聴番組の「小さな旅」についても、祭りのしきたりとして男女の役割分担のようなものが根強く残っていることが印象的であった。今後、日本の祭りにおけるそうした在り方を問いかけるような番組が生まれるきっかけになるのではないかと感じている。なお、福岡局の番組だけではなく、大分や沖縄など各放送局の番組に対する意見については、それぞれの制作現場に必ず伝えていく。

ＮＨＫ福岡放送局
番組審議会事務局

２０２２年１１月ＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会

１１月のＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会は、１７日（木）、ＮＨＫ福岡放送局（ウェブ開催）において、９人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、事前に視聴したザ・ライフ「僕らが“ゴミ”を拾う理由～玄界灘・漁師たちの挑戦～」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に１２月の番組編成の説明、視聴者意向および放送番組モニターの報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	古荘　貴敏	（株式会社古荘本店代表取締役社長）
副委員長	西野　友季子	（株式会社ニュー西野ビル代表取締役）
委　　員	乾　眞寛	（福岡大学スポーツ科学部教授）
	いのうえちず	（雑誌モモト編集長）
	岡野　涼子	（一般社団法人ＮＩＮＡＵ代表理事）
	久保田　正廣	（西日本新聞社論説委員長）
	関西　剛康	（南九州大学副学長）
	吉島　夕莉子	（吉島伸一鍋島緞通株式会社５代目技術継承者　デザイナー）
	吉水　請子	（極東ファディ株式会社取締役商品経営本部本部長）

（主な発言）

＜ザ・ライフ「僕らが“ゴミ”を拾う理由～玄界灘・漁師たちの挑戦～」
（総合　１０月２１日（金）放送）について＞

○　今の漁業のために何を優先的に行えばよいのかといった問いに正解はなく、目の前のごみを回収せずにはいられず、持続可能な活動に結びつけていくといった、漁師・権田幸祐さんの日々の記録の番組として視聴した。なぜ、権田さんが漁業に従事するようになったのかという背景や、ビジネスモデルの仕組みがはっきりしていないこともあり、見ている側としてはつかみどころがなかった。制作者として、何か確固たるテーマを伝えたいのか、それとも見る側に委ねたいのか、どちらか分からない面もあったため、私にとっては社会起業家や社会課題の解決といったフレーズを番組内で明確に与えてもらったほうが分かりやすかった。また、この番組は権田さん個人の挑戦のように感じたことから、タイトルにある「僕ら」や「漁師たちの挑

戦」という表現には疑問を抱いた。

○　環境問題を事業に結びつけ、漁業の課題に向き合っている姿を丁寧に取材している点に感銘を受けた。このような活動や応援する人が増えるだけでなく、視聴した人が自分にもできることを意識しながら生活するきっかけを与える番組であった。このような取り組みをする人たちの思いをこれからも発信し、そこから学んだことを自分事に置き換えて行動に移せるような番組をつくってほしい。また、ホームページで公開されている取材ノートも見てみたいと思わせる内容であった。今後も取材を続け、活動の様子を見せてほしい。

○　漁業者の課題や環境問題、漁業の未来などさまざまな要素が含まれた番組で、全体が見やすくまとまっていた。漁業に限らず、海に関する活動を今後どのように展開するのか、応援したくなるような番組づくりになっていた。また、地域の歴史に関して、100 隻が集まる祭りの映像が壮観であり、この点に踏み込んで紹介されていてよかった。ただ、タイトルの「僕らが“ゴミ”を拾う理由」については引き込まれるものではあったが、権田さんが中心となって始めたもので「漁師たち」というわけではなかったため、疑問であった。漁業の事業継承や環境問題など、さまざまな課題があることから、今後もいろいろな人々の姿を伝えていってほしい。また、権田さんの活動も今後どのように進んでいくのか興味深いことから、引き続き進展・進捗を見せてほしい。

○　海のごみ問題を取り上げた番組は以前にもあったが、それとは違う内容で、漁業をしながらごみを拾っていくという物理的で地道な活動の大変さを訴えていて、非常に感銘を受ける番組であった。1980 年代半ばをピークに漁業がだんだん衰退していく状況や年収 200 万円といった実態の中で、このような活動をしている権田さんの熱い思いがよく伝わってきた。また、漁師仲間の率直な意見交換の様子も取り上げられていてよかった。活動資金をクラウドファンディングやイベント・執筆活動などで捻出し、日当を出し続ける状況について、海外では企業が環境保全の寄付や援助をすることもあり、そういった取り組みをＮＨＫが取り上げてもよいのではないかと思った。最後に、子どもたちへのレクチャーや長男の漁師になりたいといった姿を見ると、なかなか難しいテーマだったとはいえ未来に向けての明るいイメージが持てた番組であった。

○　まず、権田さんという素材がよかった。まるで脚本家が書いた脚本ではないかと思うぐらい、見出しになるような言葉を的確に述べていた。環境やコロナ禍での漁業など時折沈うつなテーマでもあるなか、見ている人を前向きな気持ちにする表情

と声、そして語り口調がすばらしい人物であった。取材する側との信頼関係がなければ、家族や友人すべてをさらけ出すのは難しいことから、制作者の取材・制作の手法もよかったのではないかと思う。また、番組の放送尺にもあわせて見やすい形にまとめられていた。今後、環境や漁業、社会起業などがどう変わっていくのか、この権田さんの動きを一つの座標軸にして追っていくキャンペーン展開をやっていただきたい。福岡局が１年かけて取り組んできた「追跡！バリサーチ」のエスカレーターの問題が、ついに福岡の街でも変化が生まれているというのを１１月１６日（水）放送の「ニュースウオッチ９」で見て、ＮＨＫはキャンペーンを通して実社会に影響を与えていることを気づかされた。同じような問題を抱えているところにも良い影響を与えるという成功例をちょうど見たこともあるが、今回の番組テーマについても継続的な定点観測という形で今後もぜひ取り上げてほしい。

○　権田さんのまるでドラマのような一つ一つのコメントに心を打たれ、シンプルだが短い中に思いが詰まっていた。一番印象的だったのが「拾った者負け」という言葉で、今の日本社会を表していた。自分でやりますと言った人が責任を負わされたり、罰を見たりといった風潮がある中で、権田さんがその状況を切り開こうとする非常に象徴的な言葉であった。社会課題が山積している中で、そういったものを打破していこうとする流れが見えて、希望を与えてもらえるよい番組であった。個人のボランティアではなく法人としてやっている姿や、周りの漁師が賛成しているわけではない中でも取り組んでいる姿に焦点を当てていて、非常によかった。九州各地で若い世代の人々が課題解決に向けて取り組んでいる姿を今後も掘り起こし続けてほしい。

○　この番組を通してよかった点が二つある。一つ目は、番組のテンポがよく、テロップの使い方も上手であった。権田さんが話す言葉をうまく切り取り、それにあわせてテンポよく印象的なテロップを入れていた。また、みあれ祭の様子を基本的にナレーションなしで伝えたことで、歴史的な奥行きや３年ぶりに祭りができたという地元の方々の思いがうまく表現できていたのではないか。二つ目は、問題提起をさりげなく権田さんの言葉で入れているのがすばらしかった。漂着ごみは市が処理費用を負担する一方で漂流ごみは自己負担といった問題点がある。行政の制度も時代やニーズの変化によって変わっていくべきであり、まず市民が声を上げ、それを後押ししていくのがメディアであってほしいと思っているが、今回の番組では、権田さんの言葉で淡々と見せていて、好感を持った。また、環境問題に関連した社会貢献をしたいと思っている若い世代に、権田さんが感じている危機感を通してリアリティーを持って伝わるというのは非常によかった。２５分の番組の中で、多くのことを考えさせられるよい番組であった。

○　権田さんの存在自体が非常に引きつけられる番組であった。また、問題提起となるキーワードがナレーションではなくテロップを短く入れる演出となっていて、逆にすっきりしていて新鮮な気持ちで見ることができた。番組を見終わった後に権田さんの発言が気になり検索したところ、所属する団体のホームページがとても充実していた。今後の見通しを細かくまとめ、クラウドファンディングについても一過性のものではなく、今後の行動計画まで的確に示されていた。１回限りのボランティアが多い中、新たな仕組みを作ろうとしているこの活動を引き続き取材し全国に発信してほしい。最後に、ホームページを見て、法人名にも意味が込められていることを理解したが、番組では法人名が一切出てこなかった。ＮＨＫの放送では、やはり出さないようにしているのか。メッセージ性が強かったことから番組で拾えなかったのか、何か制限があるのかと気になった。

○　タイトルについては、ネーミングと打ち出し方で視聴者層が変わったのではないかいう印象がある。また、権田さんは社会課題をビジネスとして成立させるための重要なキーワードをいくつも出していた。ファッション業界には、まさに海洋ごみ・漂流ごみを素材にしたブランドがあるが、このような番組をきっかけに、ＳＤＧｓに取り組もうとする大手企業とうまくマッチングできないかと思った。リサイクル素材を使ったキーホルダーなどの紹介もあったが、継続させるためにもデザイナーを行政の仕事によりマッチングさせることで、デザインをより価値が高いものにして、お金が回る仕組みに持っていけるのではないか。この活動がどのように社会起業家として成功につながるかどうか、引き続き見ていきたいと感じた番組であった。

○　以前、海や砂浜に流れついたマイクロプラスチックごみの問題や海ごみを拾う漁師たちの活動に関する番組を視聴したことから、今回も同様かと勝手に予想し視聴した。しかし、良い意味で予想を超えた内容であった。漁師にとって海ごみを拾うことが魚を捕るよりも難しいことだと初めて認識した。そんな中、権田さんはごみを拾う活動を事業化し、海と砂浜のごみを減らす活動の輪を広げていたため、一漁師というよりも事業家としての志の高さに刺激を受けた。漁に出られないときでも高い志を持って海ごみ拾いの仕事に注力している姿は心配にも思えたが、さらに衝撃だったのが海で漂流しているごみを拾った場合、処分の引き取り手が決まってなく海ごみを拾った漁師さんの実費負担になることである。権田さんの「拾ったもん負け」と心のはけ口の言葉を聞いて、どうにか解決する手立てはないのかと深く考えさせられた。砂浜ごみと違い、市役所が負担しない問題がなぜいままで解決できないでいるのか。ＮＨＫにはより一層追求してほしい。権田さんが言うように、ごみを拾うのは漁師にしかできない役割であり、世の中から漁師が必要だともっと求められるようにならないといけない、漁師が自分の仕事に誇りをもてる環境整備を社会

全体で応援していかなくてはいけない、そうやって環境破壊やごみ問題を全体で減らしていかなくていけないと思った。今後は、私自身も海ごみの原因となる食品容器の使用を減らす、過剰な包装を減らすことを強く意識して取り組んでいきたい。

（ＮＨＫ側）

人々の活動を通して、環境問題や漁業が置かれた状況をドキュメンタリーのような形で伝えたいと思い、この番組の取材を始めた。人を通して伝えるというスタイルを取ったがゆえに、そのあたりの大きなテーマがやや曖昧になってしまった部分もある。タイトルのことも含め、もう少し踏み込んでもよかったのではという意見は今後の参考としていきたい。団体名については、基本的に企業の宣伝や売名行為にならないようにという基準をもとに、番組ごとで判断している。今回も団体名に込められた意味をどこまで深く伝えるか検討したが、権田さん本人に寄り添う形で伝えたいという思いから団体名を使わない形を取った。権田さんの取り組みはまだ完成形ではないため、今後も取材を継続していきたい。

＜放送番組一般について＞

○　１０月８日(土)の有吉のお金発見　突撃！カネオくん「どデカすぎる！“巨大橋”のお金の秘密」を見た。学校現場で仕事をする中、金融リテラシーのニーズが高まってきていることから、投資や株式などお金の教育で先生方から質問されることがある。また、岸田総理も貯蓄から投資へという話もしていて、流れが変わってきている。この番組は、お金という観点からさまざまなことを分かりやすく説明している。日本人は投資などについてあまり前向きな風潮はないがとても重要なことであり、「突撃！カネオくん」で勉強できるのは非常によいことだと改めて思った。これからもいろいろな観点で、大きなお金や小さなお金の動きを取り上げていくようなそういった番組づくりを期待している。

○　１０月２４日(月)のクローズアップ現代「それ本当にエコですか？徹底検証！暮らしの中の環境効果」(総合 後 7:33～8:00)を見た。番組内で、ストローに関するごみ問題が取り上げられたとき、海洋ごみという言葉が出ていたが、そのタイミングでの発言に少し違和感を覚えた。出演していた東京大学講師の中谷隼さんのそもそもポイ捨てが問題という意見が番組の中でさらっと流れてしまい、もったいないと

感じた。ポイ捨ては多くの人が意識して取り組むべき課題でもあり、もっと大々的に取り上げてもよかったのではないか。この番組は、そもそも消費することを前提に話が進んでいたため、その時点で本当にエコなのだろうかという疑問を感じた。いかに使わなくて済むか、いかにつくる量を減らせるか、今ある物をどれだけ有効活用できるかという目線もあると思うので、使うことを前提にエコを進めるという点はもう少し考えてほしかった。

○　１０月３１日(月)の映像の世紀バタフライエフェクト「ソ連崩壊　ゴルバチョフとロックシンガー」を見た。この番組は、番組構成が巧みで話題？を広げたうえで終盤に向けて一つずつ回収していく。どこに仕掛けがあるのだろうと、いつも集中しながら見ている。リサーチが丁寧で、どこでリサーチしたのかとエンディングロールを見るのがいつも楽しみである。また、アーカイブ映像でも、構成を練れば現在に生きる我々の心にも訴えかけるものがあるのだと非常に感心している。この番組のように、素材が過去のものであっても未来志向の発想や企画力があれば、沖縄戦を含む近現代史を伝える番組でも活用できるのではないかと感じた。

また、１１月３日(木・祝)の「美ら島おきなわ文化祭２０２２　開会式」(総合 後2:15～2:59)を見た。時間の制約があるため仕方がないとは思うが、県内の文化を表現したシーンの数々が編集でカットされていて、残念であった。また、技術的な問題だと思うが、音楽のミキシングの難しさを感じた。開会セレモニーのアトラクションで、琉球古典芸能の歌や三線（さんしん）の演奏、西洋のオーケストラが一緒に奏でるような場面があったが、音がすごくバラバラに聞こえて残念だった。

○　１１月１日(火)のイッピン　選「歴史がはぐくむ島の宝～熊本　天草陶磁器～」を見た。このイッピンシリーズは地方創生を実現するための素晴らしい番組だと思っている。地方創生とは、地元でつくられたものをしっかりブランディングして、域外に販売することや地元をより良くするために投資することだと考えているが、そういった意味でこの番組はお手本のようだと感じている。デジタルが行き過ぎた反動でアナログの魅力やものの背景、それに価値を感じるようになってきたいま、もっと地方創生を進めようといった取り組みが各地で出てくると思う。その時には、このイッピンシリーズをぜひ教科書のようにお手本にすると、地方の成果につながるのではないか。そういった意味で、すごく価値のある番組だと思った。

○　１１月４日(金)のザ・ライフ「日常が溶ける」を見た。福岡で起きた３歳児児童虐待死事件について、背景や因果関係などを詳細に再現したドラマであった。夫の態度がどんどん悪化していく場面は、できれば見たくないというくらい残酷に描かれ

ていた。立命館大学・中村教授の説明のとおり、夫婦が子育ての知識がないことや相談できる環境が整ってないこと、社会的支援が不足していることが問題だと思った。この番組は、夫婦間の暴力や児童虐待死、社会的支援の不足等の問題が結婚や子育て、家庭の闇の部分に重なっていることを気づかせてくれる番組であった。県行政の児童家庭担当者が「市・県に相談関与がなく、十分な情報がなく検証が難しい」と発言していたが、この問題についてもっと行政へ追究する姿勢があってもよかったと思う。最後に、虐待・ＤＶの相談窓口の二次元コードが読み取れなかったため、その点は改善してほしい。

○　１１月６日(日)のＮＨＫスペシャル　超・進化論　（１）「植物からのメッセージ　～地球を彩る驚異の世界～」を見た。植物の生態の偉大さを伝えるために、最新の研究データをＶＦＸやＣＧを駆使していて、大変分かりやすくおもしろかった。堺雅人さん、西田敏行さん、東京０３の角田晃広さんなどが、学芸会のような格好で説明していたところにも親近感を覚えた。番組の最後には、植物同士や生態系の中でそれぞれがともに進化していく共進化という言葉があったが、人間社会でも今いろいろな問題があることから、よい意味で共進化できればと思う。楽しませてもらいながら、とても参考になる興味深い番組だった。

○　１１月７日(月)～１１日(金)の「関門ＷＥＥＫ」(総合 後6:10～7:00／北九州単)を見た。北九州局と山口局が合同で制作し力のこもった関門地区特集番組となっていた。一番よかったのは、自分が番組をつくる側の視点になり、地域の魅力を主体的に探し調べて編集していくと地域での暮らしが劇的に楽しくなるのではないかと感じた点である。夜の生放送でドローンの映像を映し出していた部分では、ふだん自分の力では見ることのできない景色であるがゆえに、幻想的な美しさがあり、地域に対する新たな誇らしい思いが湧き上がってきた。毎日紹介されていた地域活動に参加するさまざまな人々の情報も、自分の居場所やコミュニティーを持つことの豊かさが伝わり、将来的にも期待を持つことができた。また、合間に歴史やミニ知識のライブラリー映像を見せることで、退屈しない演出になっていた。１週間見続けることで、出演しているアナウンサーや気象予報士に対する親しみがどんどん湧いてきて、気づけば仲間と思って応援をしていた。

○　１１月１１日(金)の＃てれふく「俺たちは、まだ立ち直れるか　～元受刑者・更生支援の現場～」を見た。いろいろな罪を犯して刑務所に入った元受刑者が社会でどう更生していくかという現場を追った番組で、非常に興味深く見た。このような大きな社会問題をＮＨＫでは継続的に取り上げ、ぜひキャンペーンとして展開してほしい。

また、１１月４日(金)のザ・ライフ「日常が溶ける」を見た。福岡児童虐待死事件を起こして刑務所の中にいる二人に、繰り返し面接や手紙などを送り、考えられる上では最高のアプローチをして、再現ドラマをつくったという狙いと努力には敬意を表したい。１１月１６日(水)のハートネットＴＶでも同じ内容に少しアレンジを加えて放送していたが、この手の内容をドラマにして視聴者に見せていくというのは、報道特番やニュース解説では届かない人たちに届けるという意味では、有意義な企画だと思う。事件や社会問題を扱う時に、根っこの部分である構造要因を掘り起こしていくことは大事だが、同時にその当事者たちの特異性もある。この事件の場合、想像を絶することを当事者の二人はやっていたが、ドラマだと結果を伝えるのみで終わっていた。ドラマにする上では必要ないという判断だったのかもしれないが、やや全体がマイルドになっていて、裁判までの経過を知っている側からすると違和感のあるまとめ方になっていた。その結果、あの事件が持っている固有の残虐性、病的・特徴的なものが抜け落ちてしまったのではないか。実際の事件を題材にして、家族の中でやりとりしていたメッセージアプリや当事者の２人と交わした手紙や面接などでリアルに再現したことをうたい文句にしている番組であれば、実際の特異性や残忍性、裁判の展開といったものをもう少し出したほうが、事件を知っている人にはよりリアリティーがあるような気がした。

（ＮＨＫ側）

最近、ＮＨＫではこうした問題をドラマの構成にして伝えることが多いが、ドラマの構成にすることで分かりやすくなる一方、事実関係を正確に伝えることに注意を払う必要があると感じている。今回のドラマでも注意を払っているという認識であるが、ご指摘の点は十分に気を付けていきたい。

○　１１月１１日(金)のかごスピ「“動機善なりや　私心なかりしか”　～稲盛和夫が残したことば～」を見た。今年８月に亡くなった鹿児島市出身の稲盛和夫さんの生き方や言葉をまとめた番組で、２５分という限られた時間ではあったがとてもよい番組だった。2014 年に放送した「１００年インタビュー」の映像の中には、本人が穏やかに語った言葉など心に響くものがあり、その言葉を踏襲する人々のコメントを織り交ぜながら伝えている番組構成がとてもよかった。また、経営者としての視点だけではなく、稲盛さんのプライベートの部分を加えたことで、番組に広がりを持たせていた。経営者の一人としてこれまでのあり方を思い起こしながら見たり、改めていろいろな言葉を耳にしたりして、気持ちを高めさせてくれる番組であった。番組の最後は、稲盛さんが 2014 年の番組で残した今に生きる人たちへのメッセージで締めくくっていたが、社会情勢が不安定になっている今だからこそ、すごく感じ

られるものもあった。

○　１１月１２日(土)のＮＨＫスペシャル「メジャーリーガー大谷翔平　２０２２　アメリカの新たな伝説へ」を見た。大谷翔平選手が単独インタビューですべてを答え、民放が拾えてない一面をＮＨＫは拾っている点に改めてすごさを感じた。小栗旬さんを起用した豪華なナレーションは、低く落ち着いたトーンで非常によかった。活躍をただ持ち上げるような報道の仕方ではなく、きちんと内容の重みもあった。また、大谷選手が活躍することによってメジャーリーグのルールがどんどん変わっていったという点をきちんと説明していたほか、メジャーリーグではＡＩを導入し、大谷選手の球筋をピッチングマシンも学習させているという取材がされていた。ＮＨＫが持つ豊富な情報量や取材量は、他のスポーツ取材とまったく次元が異なるものであった。「ＦＩＦＡ　ワールドカップカタール　２０２２」がまもなく開幕するが、スポーツ番組の中継やデジタルがどのようにシフトしてどのような見せ方になるのか。大会までに時間がない中で、民放もさまざまな特別企画を予定しているが、ＮＨＫではどのように展開していくのかを楽しみにしている。さらに、大会終了後はＮＨＫらしくまとめたスペシャルもぜひ放送してほしい。

（ＮＨＫ側）

下関に住む人の多くが北九州方向にアンテナを向け、福岡や北九州の放送を見ているという情報もあったことから、同じ地域の仲間として情報を通じて役に立ちたいと思い、今回の「関門ＷＥＥＫ」を企画した。ドローンで撮影した関門橋の映像では、北九州市門司区と下関市が近く同じ生活圏であることが一目瞭然であり、かつ、すばらしい光景に私自身も感銘を受けた。そういった非日常性も含めて、今後もＮＨＫならではの映像や情報を地域に提供していきたいと思っている。

（ＮＨＫ側）

「関門ＷＥＥＫ」は北九州局と山口局が共同で制作したが、このような取り組みを九州沖縄のほかの局でも実施できないかと検討している。また、それぞれで取り上げる地域を決めてそこから平日夕方６時台で放送するなど、地域に根差した発信などの取り組みも考えている。「ニュースウオッチ９」のエスカレーターの話のように、地域の課題を掘り下げて全国に展開していくだけでなく、ＮＨＫでしか伝えられないようなＮＨＫなりの視点を大事にして、これからも地域に発信する番組を作り続けていきたい。

ＮＨＫ福岡放送局
番組審議会事務局

２０２２年１０月ＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会

１０月のＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会は、２０日（木）、ＮＨＫ福岡放送局（ウェブ開催）において、７人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、事前に視聴したいちおし！九州沖縄「開業！西九州新幹線　長崎発―課題経由―未来行」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に１１月の番組編成の説明、視聴者意向および放送番組モニターの報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

副委員長　西野　友季子　（株式会社 ニュー西野ビル 代表取締役）
委　　員　いのうえちず　（雑誌モモト 編集長）
　　岡野　涼子　　（一般社団法人ＮＩＮＡＵ代表理事）
　　楠田　喜隆　　（株式会社雲仙きのこ本舗常務取締役）
　　久保田　正廣　（西日本新聞社　論説委員長）
　　吉島　夕莉子　（吉島伸一鍋島緞通株式会社 ５代目技術継承者 デザイナー）
　　吉水　請子　　（極東ファディ株式会社取締役商品経営本部本部長）

（主な発言）

＜いちおし！九州沖縄「開業！西九州新幹線　長崎発―課題経由―未来行」
（総合　１０月１日（土）放送）について＞

○　ゲストの髙田明さんが考えた旅行プランのプレゼンテーションはおもしろかった。ただ、番組前半の祝賀ムードの中継や車両基地の企画部分と、後半の課題の解説部分が３０分と短い放送時間だったため、中途半端な感じになっていた。特に後半の課題の部分は、もう少し突っ込んだ内容を見たかった。地元の視聴者でなかったためだと思われるが、フル規格の新幹線を整備する際に、佐賀県が６６０億円を負担するのが高額なのかといった予算感がつかめず、違和感があった。番組を見た後にインターネットで調べた結果、ようやく計画や課題の背景などが理解できた。

○　番組のタイトルがとてもよかった。開業自体がお祭りではなく、課題も抱えているという視点もしっかり盛り込まれていた。新幹線が通らず在来線の本数が減る佐賀県鹿島市の人々から、「新幹線が通らなかった地域の人々が、新幹線開業に関して

どのように思い、これから発展していくためにどのように頑張っているのかを取り上げてほしい」といった声を聞いたことがある。新幹線が開業して終わりということではなく、佐賀や長崎のさまざまな地域の課題を継続して取り上げてほしい。

○　長崎県民としては、これから西九州新幹線の繁栄と長崎・佐賀・九州を含めた発展を祈念するものとして、テレビ番組で紹介されてよかった。長崎駅や嬉野温泉駅での開業イベントの情報や、大村の車両基地の説明に加え、長崎と佐賀のフル規格整備の課題についての説明もあり、とても分かりやすかった。ただ、実際に生活している地元の人々の声をもう少し取り上げてほしかった。また、髙田明さんのプレゼンテーションは長崎と佐賀、両方の魅力をあわせたツアープランの企画となっていて、経営者としての思考力を学ぶことができた。

○　西九州新幹線開業の話は非常に難しいテーマで、長崎や佐賀、福岡や全国などどこに軸足を置いてみるかで、この番組は見え方や問題点が変わってくる。長崎局が長崎県に向けて制作していることを前提とすれば、「長崎発―課題経由―未来行」というタイトルは分かりやすくてよかった。その一方で、３０分という放送時間の中に非常に大きなテーマを盛り込み過ぎで窮屈になり、やや中途半端な感じであった。オープン記念で車両や駅舎などを紹介していたが、開業前に取材されたもので、ほかのメディアですでに紹介されていたものがかなりあったのではないかと思う。「課題経由―未来行」ということであれば、これからこの新幹線がどうなっていくのかという点に軸足を置いたほうがよかったのではないか。新幹線が昔のようにすべての人が歓迎して受け入れるものではないという切り口で課題を捉える必要があり、過去の難しい経緯やフル規格の見通しが立たずに大変だという表面上の課題の紹介で終わっていたため、やや食い足りない印象であった。佐賀県知事が今後心変わりしたとしても、向こう１０年以上は今の部分開業の状態が続くというシビアな現実を前提として、この新幹線をどう生かしていくか、長崎だけでなく在来線の減少などの影響が生じている佐賀の視点も含めて取り上げたほうが、説得力のある番組になったのではないか。また、佐賀が６６０億円を負担することについても、整備新幹線の法律の仕組みなどに関する説明があれば、長崎県外の方や新幹線が走ってない地域の方の理解が得られたのではないかと思う。

○　３０分という短い時間ということもあってだと思うが、さっと流れてあまり見入ることができなかった。中継も盛り込みながら祝賀ムードを伝えたいというのは理解できたが、天気が悪く伝わらなかったのが残念だった。長崎局が長崎県向けにつくった番組ということもあるが、佐賀の人間として見た私にとっては新幹線開業の盛り上がりを感じられず、乗ってどこかに旅行に行きたいという気持ちにもならな

かった。佐賀でも、新幹線の問題は長い間議論されて、まだ解決してない部分が多くある。今回は、長崎局の制作ということだったが、長崎と佐賀の両方からの目線での内容だともっと違う内容になっていたのではないか。新幹線の活用方法や新幹線が開業したことでどう地域の活性化につながるのかといった課題の掘り下げがあれば、もう少しおもしろい番組になったのではないかと思う。

○　西九州新幹線の問題を、一度自分なりに整理しておきたいと思っていたため、期待感を持って視聴した。前半の鉄道好きの人の熱狂を通して、何かが始まるというわくわく感が伝わってきた。車両の外装・内装のこだわりポイントの説明も分かりやすく、乗車体験をしていなくてもこの内容を誰かに話して聞かせたいと思った。ただ、お祝いムードに湧いている長崎駅に対して、開業日にもかかわらず閑散とした武雄温泉駅のホームは何となく不自然で、「長崎発―課題経由」という番組タイトルは、やっぱり映像に映り込んでしまうものだなと思った。フリーゲージトレインやフル規格整備といったキーワードを理解しやすくまとめていて、佐賀県側のスタンスを、客観的に淡々と伝える長崎局のバランス感覚はすばらしく、課題を冷静に理解することができた。また、こういった対立構造を含んだ内容の生放送となると、コメンテーターに求められるインテリジェンスや好感度というのは並みでは務まらないため、その点でもこれ以上ない人選だと思っている。特に、髙田明さんのコメントから伝わってくる実業家としての才能・コメント力には憧れを覚え、エンディングでは他人を説得する熱い思いにあふれた地域活性化プレゼンテーションを聞くことができて、とても楽しく視聴できた。

○　３０分という限られた時間の中で、確かになかなか掘り下げられていない部分があり少し物足りなく感じたが、新幹線の魅力と課題が入っていたことでバランスよくまとまっていた。佐賀県民の意見があれば、課題に対してもう少し知ることができたと思う。髙田明さんの「新幹線は人の動きをつくる」という言葉に納得した一方で、途中の駅では人の数が減るという課題もある。新幹線があることで、九州全体に可能性が広がるということはすごく伝わるものだった。キャスティングも、鉄道好きという松井玲奈さんの柔らかいコメントと、実業家でよい点、悪い点を的確に提示していた髙田さんの意見とでバランスが取れていてよかった。髙田さんの後半のプレゼンテーションも新幹線がつながることで魅力が広がるというのがとても分かりやすく、引きつける内容で楽しんで見ることができた。国内の需要も増えてきているいま、インバウンドの広がりも含めて観光面ではより一層新幹線が重要になると思っているので、期待している。

○　西九州新幹線開業のわくわく感と課題・問題点を同時に伝えるというテーマの番

組としては、中途半端な印象だった。わくわく感の伝わり方として、魅力発信が弱く、佐藤誠太アナウンサーの表情も硬かったため楽しさが伝わりにくかった。自らが鉄道ファンと言いながら興奮度のテンションが低く感じた。松井玲奈さんと髙田明さんとの会話や雰囲気も盛り上がりに欠けた退屈な印象だった。後半紹介された構想も具体性や各地・見どころ紹介も中途半端で期待していた内容とは違っており、対話の盛り上がり感が無く、ＭＣとゲストの絡みも少なく、トーンが低くて重く感じた。

○　長崎発の西九州新幹線の魅力と課題が短い時間で提示された良い番組であった。前半に車両などの詳しい説明があり、新たな魅力がよく理解できて利用客や鉄道ファンにはとても良い情報だと思った。ただ、ゲストの松井玲奈さんは新幹線好きということであったが、今一つその効果が発揮されていなかった。鉄道が好きな人にとっては有効な意見もあったが、そこまで西九州新幹線に詳しいといった印象もなく、地元出身でもないため少し中途半端であった。逆に印象に残ったのは、髙田明さんのコメントやプレゼンテーションである。福岡からの交通手段だけではなく、島原鉄道やフェリーを使って熊本で九州新幹線につなぎ、宮崎までの観光構想の提示は、九州が一体になって盛り上げていこうという心意気を感じられて良かった。西九州新幹線の良い点・悪い点だけでなく、乗り換え時間の短さ、高齢者や家族連れの乗り換えの手間など顧客目線の意見などがさすが実業家と思わせる内容であった。この番組で初めてフリーゲージが中止になったことを知った。長崎への新幹線をつくるにあたって、フリーゲージの車両を開発して在来線の線路を使って整備されていることは以前、ニュースで聞いたことがあった。それが最近の２０１９年に断念して、フル規格で実施されることで課題が発生して、佐賀県が事業に乗り気にならなかったことを知った。このような基本方針の変更によって課題が発生することにより、佐賀の事業が中断することは当初から簡単に予想できたと考える。このあたりの計画の甘さが、今回も発生していることに驚きであった。やはり、もっと基本的な計画のあり方を最初から明確にして対処しないといけないと、再び考えるきっかけにもなった良い番組であった。

○　１０月１日（土）Ｂリーグが開幕し、初戦は熊本ヴォルターズのホームに長崎ヴェルカを招いて試合が開催された。現地で観戦したが、長崎からも多くのサポーターに来場し、さっそく西九州新幹線を利用して応援に来ているということだった。今期は同じカテゴリーに九州から４チームが参戦しているので、九州ダービーが頻繁に開催され、その都度、県をまたいで応援に行き、その前後に現地で観光するという効果が見込まれる。そのため、番組でも紹介されていたようにこのインフラを活用して、九州全体で盛り上がればいいと思う。この番組を見るまで、なぜ新鳥栖駅から

長崎駅までフル規格で新幹線を通さなかったのか疑問に感じていたが、長崎と佐賀との立場の違いが分かりやすい表にまとめられていてよく理解できた。また、佐賀県が拠出しなければならない６６０億円という金額も明示されていたが、費用対効果どころか在来線の本数が減らされるというデメリットもあるため、佐賀の主張も当然だと感じた。在来線の話にはなるが、熊本でもＪＲを開通させるにあたっての議論が起きている。県の負担が最小限度になる方法が選択されようとしているが、県単位の視点ではなく、国家としての高い視点で検討し、必要な投資であれば制度を改善するなどして、国が率先して投資をして実現すべきではないのだろうか。西九州新幹線の車両について詳しく紹介されていたが、車両ごとに座席の色が違うなど、こだわりがちりばめられているのを知り、是非乗ってみたいと思った。ただ、ＮＨＫのレポーターの紹介の方法だと車窓からの風景も素晴らしいと捉えられがちなので、誇大広告にならないよう注意が必要だと感じた。長崎局のスタジオにおいてＡＲ技術がさりげなく使用されている点もよかった。

（ＮＨＫ側）

貴重な意見をいただき、ありがとうございました。髙田明さんは新幹線を生かしたプランを具体的に考え、九州全体を通した旅のプランというのも日々口にされている方でもあることから、ぜひ番組でも生かしたいと考えていた。３０分という枠は制作の過程でもジレンマに思っていた。今回、委員の皆様からは情報が古いのではないかということや、佐賀の視点がないこと、地元の視点が欠けているといった点などの指摘をいただいた。これからも西九州新幹線の課題を検証したり、長崎や九州全体の活性化にどのようにつながっていくのかを見つめたりする番組を制作していきたい。

（ＮＨＫ側）

好意的な意見をいただいた一方で、物足りない・中途半端・掘り下げが足りないといった意見もあり、続報を期待するという励ましの言葉までいただいた。今後の番組に生かさなければならないと素直に受け止めた。高齢化が全国平均より１０年早く進んでいたり、人口の流出が全国最悪のレベルにあったりする長崎は、新幹線が開業しても手放しで喜べないような状況にあることは、指摘のとおりである。これから長崎が未来に向けて新幹線をどう生かしていくのかについては、1か月や3か月、半年や1年といった節目でしっかりとニュースや番組で伝えていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　９月１６日(金)のザ・ライフ「言葉はめぐる」を見た。「言葉はめぐる」というタイトルに興味を引かれて見たが、小学生とは思えない子どもたちから出る言葉が本当にすばらしいと感じた。これまで、「ザ・ライフ」は、社会的な課題をテーマにした内容が多かったのに対して、今回は、子どもの目線と言葉でとても静かに丁寧につくられていて、今までと異なる番組であった。いつ再発するか分からないという海音ちゃんが、どうして自分が病気になったのかという理由を探して「病気になるのは一種のくじ引きのようなもの。神様が選んでいるようなもの」と絞り出しながら出てくる言葉もとても印象的で、小さな体ながら力強くも感じた。話の流れに合わせて映される絵本の挿絵とナレーションによって、まるで絵本を読んでいるようにも感じた。部分的に入っている音楽もよく、映像だけのカメラワークでは海音さんをクローズアップするなど、静かにずっと追っているディレクターとの距離感や信頼感が伝わってきた。

○　９月１６日(金)の新日本風土記「沖縄の家」を見た。選曲のセンスがよく、テンポ感も私の好みであった。建物の魅力がきちんと伝わる映像と盛り込むエピソードが丁寧に取材されていた。沖縄にいても巡り合うことができない、沖縄の大きなお墓の中に入ってグスージのお祝いの音楽を演奏しながら、三線を弾いて歌も歌ってという場面もきちんと取り上げられていた。沖縄本島の本部町に多い戦後の復興瓦であるセメント瓦についても紹介され、その経緯についてもきちんと触れているところに非常に好感が持てた。沖縄では１０月末から１１月初旬にかけて、５年に１回行われる「世界のウチナーンチュ大会」が開催され、世界中に移民で行った子孫たち２世・３世・４世が沖縄に帰ってきて、世界中から沖縄系の人々が集まってきている。彼らはふだんから沖縄文化に対してすごく思い入れがあることから、ＮＨＫワールドＪＡＰＡＮでこういった番組を放送すると世界中の方々が喜ぶと思う。

○　９月の台風１４号の特設ニュースを見た。あれだけの９月の台風１４号の特設ニュースを見た。あれだけの量の番組と情報を３日間放送し続けるというのは、まさにＮＨＫでないとできないことだと思っている。ただ、１９日(月・祝)の「ＮＨＫニュース７」でエリザベス女王の国葬を生中継するということになり、どのような編成をするのかと関心を持って見ていたところ、朝から台風情報をくまなく流していたにもかかわらず、夜７時からの「ニュース７」では国葬の中継が中心となっていた。国民的関心事の視点では、エリザベス女王の葬儀を生中継したほうがふさわしいかもしれないが、九州に住んでいる我々からすると、１日のまとめのニュースで

台風の今後の見通しをどう報じるだろうかと期待していた。多数意見ではないかもしれないが、台風１４号について伝えてほしかった。また、９月３０日(金)のザ・ライフ「検証　増える山岳避難」を見た。九州でも山岳遭難する人が１０年前と比べて約２倍になっている話を見聞きしていたことから、統計および解説的な番組だと思って視聴した。８月に国見岳で７日間水だけで生き抜いた人の話をドラマ風に展開していきながら、実際に取材・解説した要素をうまく間断なくつないだ強い説得力のある番組であった。中高年の登山ブームでもあり、そこに届く番組だったのではないか。また、救出された８月１６日(火)まで１週間飲まず食わずであった人を取材し、短時間で要領よく制作された点にも感服した。

○　９月２５日(日)のＮＨＫスペシャル　“中流危機”を越えて「第２回　賃金アップの処方せん」を見た。複雑な内容がすっきりとまとめられていて、自分が勤める企業のイノベーションやこれからの時代にどのように適合していくべきかと、放送後も考えさせられるとても力のある番組であった。特に、最近よく聞く「リスキリング」という言葉は、学び直しというような自己啓発の延長のように捉えていたがそうではなく、背景には国としての産業構造の転換と労働移動を前提としていることを今回知ることができた。高い視点で物事を捉えるために番組を視聴し、そのためにＮＨＫを活用するという価値を改めて感じさせられた。今回番組を見るきっかけとなったのはタイトルを見て、中間層マーケティングや中間層理解を把握するためであり、この番組のテーマである経営者や労働戦略を巻き込んだ国家戦略を知るためではなかった。そのため、番組の冒頭から疑問を抱くような気持ちになった。若い人々の視聴傾向である自分の見たいものだけを選んで見るという行動スタイルに、どう対応していくかは課題の一つだと思うが、今回のように目的を持って視聴した場合を踏まえると、タイトルは魅力的で引き付けることだけではなく、番組内容の要約を誤解なく示すといった点も重要ではないかと感じた。

○　１０月４日(火)の１００カメ「赤ちゃん誕生」を見た。コロナ禍で出産に立ち会えなかった夫婦もいる中、このテーマで１００カメが再開されたことがとても良かった。多数の夫婦が出産を待つ様子と、それに寄り添う助産婦の姿がとても印象的で、ＭＣの若林が自分の時の経験を春日に話す姿が良かった。特にコロナ禍で立ち会えなかったと話す春日にとっては、少しでも様子が伝わったと思われる。未公開トークでは、「涙が溢れそうでちゃんと返事ができなかった」と話すところもとてもよかった。番組に収まり切れないエピソードをネットで伝えてくれるのはありがたい。出産は家族の大切な出来事で、そこに同席できないというのは痛手だと感じる。この番組を通じて同席できなかったパートナーも、出産の大変さを感じて子育てに協力的になると良い。子育て中の人だけでなく子育てが終わった人も、自分の子ども

が産まれたときのことを思い出して、温かな気持ちになるのではないだろうか。私自身も２０年も前のことであるが、妻の出産に立ち会った助産院と自宅での出産の感動がまた蘇ってきた。裏方である助産師・看護師・医師の姿、スタッフの様子もたくさんのカメラで撮影することで良く理解できた。産婦に寄りそう助産師は大変な仕事であるが、丁寧に出産に関わってくれることはとても頼もしい。助産師が産婦からの手紙を読んで泣いている姿、それを励ます先輩助産師の姿もとても良かった。最近の子どもをめぐるニュースで悲しいものも多いが、このような温かい気持ちになるような番組を放送されることで、多くの子供を育んでいける社会になると良い。性教育と生の教育の原点になるとも感じた。この１００カメシリーズは、たくさんのカメラを通じ多様な状況がつぶさに理解できておもしろい。制作はとても骨の折れるものと想像できるが、ＮＨＫならではのなせる業だと思う。このシリーズをまた視聴したい。最後に生まれたての赤ちゃんはとても可愛いらしく見ていてこちらが笑顔になった。

○　１０月７日(金)のザ・ライフ「ぶっつけ本番の旅　熊本・球磨川１１５ｋｍ」を見た。キャスター自らが行き当たりばったりで旅をするという企画は斬新でおもしろかった。結果的に、そこまでメジャーではない、知る人ぞ知る地域の魅力的な場所を知ることができた。特に、八竜天文台にある展望台からの眺めが素晴らしかったので、是非行ってみたい。水害から２年以上経過しているが、いまだに通行止め区間が多く存在するのに驚いた。道の駅「坂本」の駅長が、通行止め区間に拠点があるため来店客が少なくなり、地元の農家を支援するために野菜類を遠方まで売り込みに行っているというその努力は素晴らしいと思う一方、水害後大幅に人数が減った集落を補助金なしで維持していくためには、抜本的な手段を考えなければならないのではないかと感じた。水害からの創造的復興の象徴である「鶴の湯旅館」は風情があるし、被災した坂本町の家から譲ってもらった建具を使用しているところなど、地域へのこだわりがブランド価値の向上につながっている事例だと思う。しかし、通行止めの標識によって利用客が旅館までたどり着けないという問題も発生しているため、こういうところにこそ、行政は手助けをするべきではないか。水害によって蔵付き酵母は失われたが、新しく球磨川からもたらされた酵母で新しい焼酎「球磨川」を造ることを決めた「大和一酒造元」三代目、球磨川の水源がある水上村の山奥にある民宿「遊庵」のオーナー。キャスターが旅先で出会った人々に共通しているのは球磨川への「愛」。水害をもたらした球磨川への恨み節がまったくないところが、名実ともに川と共に生きているんだと感じた。このスタイルの紀行番組は、最後まできちんと成立するか分からないリスクもあるが、その地域のリアルを感じることができて、大変面白かった。続編に期待したい。

○　１０月１１日(火)の「ニュースただいま佐賀」を見た。「おとなりモノがたり」というコーナーで、鍋島緞通が取り上げられていた。ニュースで伝統工芸を取り上げてもらえることは大変うれしく思っている。しかし、今回は親しみやすさを出したかったのではないかと思うが、伝統工芸を守っていく側の立場からすると軽い内容で、歴史や流れを調べた上での選定や構成とは思えなかった。伝統を守る苦悩を知らない人たちが平然と語るのではなく、歴史を紡いできた本人たちが語るような重みや説得力がある番組の制作をお願いしたい。

○　１０月１２日(水)のクローズアップ「五輪汚職　疑惑の深層～スポンサー選定の闇に迫る～」を見た。現代最近話題の問題に対して鋭く真相に迫る良い番組だった。民放ワイドショーとは異なり、１００人を超える関係者への丁寧な取材に基づく話の構成で、事件の概要・問題の根源・組織体制の慣習化・監視体制の弱さ・五輪組織委員会の体制・責任の曖昧さや無責任な仕事の在り方を鋭く突いて、明確に解説した点において秀逸のレベルだった。時間も長過ぎず、集中力を持って最後まで視聴できた。

○　１０月１４日(金)の長崎スペシャル　舞いあがれ！放送開始ＳＰ「“五島”で発見！ラストファミリー」(総合 後 7:30～8:30／長崎県域)を見た。出演者の長濱ねるさんが、小さい頃泊りがけで野崎島へ遊びに行ったエピソードなど、五島出身ならではの情報があったのはよかった。また、野崎島、葛島の雄大な海と山の景色の映像がすばらしかったほか、隠れキリシタンの文化や歴史と暮らしについても深く知ることができた。６０分の番組を前半と後半に分けていただけではなく、前半の部分はパートごとに編集されＤＶＤのチャプターを選んで見ているようでもあり、とても体に優しい番組であった。

○　１０月１５日(土)・１６日(日)のこころの時代～宗教・人生～　シリーズ「問われる宗教と“カルト”」前編・後編を見た。現在、民放を含めていろいろな番組が統一教会・宗教・カルトの問題を取り上げているが、この番組はオーソドックスであるが非常に勉強になった。最近のニュースや情報番組では、非常に刺激的な強い言葉で統一教会の問題を語られていて、何となく分かったような気になっているが、この番組では実際統一教会だけではなくて、カルトや宗教の問題がどういう仕組みでどう考えればよいのかというなかなか取り上げないテーマを、よいタイミングで放送していた。

また、先月の番組審議会でもお尋ねしたが、岩田明子解説委員がＮＨＫの記者時代に見聞きした安倍晋三さんの話を、フリーのジャーナリストという立場で雑誌等

に公表するのはいかがなものか。ＮＨＫの解説委員という肩書きで雑誌等を書かれているということであれば、通常のメディア人の課外活動ということで違和感はない。逆に、岩田さんが早期退職し、業務委託契約を結んでいる立場であれば、ＮＨＫでもフリーのジャーナリストとして出演するべきではないか。新しい情報があれば教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

改めて確認したところ、「岩田明子記者は２０２２年７月３１日付でＮＨＫを早期退職し、その後は業務委託契約を締結し、解説委員としてＮＨＫの番組に出演している」ということである。今回のケースに限らず、退職したフリーのジャーナリストの言論活動にどこまでこちらから意見を言えるのかどうかということについては、さまざまな議論があると思っている。

○　１０月１６日(日)の鎌倉殿の１３人「穏やかな一日」を見た。前回の放送番組審議会で、どうしたら若い世代の人々にもっと見てもらえるのか、若い世代の人々に見てもらえるように力を入れていきたいという話を聞いたとき、自分が中学生や高校生のときに大河ドラマだけはずっと見ていたのを思い出した。日曜の夜８時という時間も変わらず全４８話を１年間放送しているが、人の感情の流れや関係性などを１話ずつ味わえるからこそ大河ドラマはおもしろいのであって、それがダイジェストになると魅力が伝わってこなかった記憶がある。早くて、簡単で安いといった世の中になっているからこそ、丁寧に時間をかけてつくる上質なドラマ番組を、これからも大切にしてもらいたい。

（ＮＨＫ側）

「鎌倉殿の１３人」について、ＮＨＫならではの上質な番組をゆっくり丁寧に制作してほしいという意見があったが、これは「こころの時代」にもつながるところがあると思っている。こうした番組のように、地域放送サービスも含め、放送内容の充実強化をこれからより一層目指していきたい。

ＮＨＫ福岡放送局
番組審議会事務局

２０２２年９月ＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会

９月のＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会は、１５日（木）、ＮＨＫ福岡放送局（ウェブ開催）において、７人の委員が出席して開かれた。

議事に先立ち、２０２１年１２月２６日（日）に放送したＢＳ１スペシャル「河瀬直美が見つめた東京五輪」へのＢＰＯ意見について報告があり、議事に入った。

会議では、まず、「２０２２年度後半期の国内放送番組の編成」および「２０２２年度後半期の九州沖縄地方の番組」について説明があり、「番組改定について」や放送番組一般とあわせて活発に意見の交換を行った。

最後に、１０月の番組編成の説明、視聴者意向および放送番組モニターの報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

副委員長　西野　友季子　（株式会社 ニュー西野ビル 代表取締役）
委　　員　乾　　眞寛　　（福岡大学 スポーツ科学部 教授）
　　いのうえちず　（雑誌モモト 編集長）
　　岡野　涼子　　（一般社団法人ＮＩＮＡＵ代表理事）
　　久保田　正廣　（西日本新聞社　論説委員長）
　　吉島　夕莉子　（吉島伸一鍋島緞通株式会社 5代目技術継承者 デザイナー）
　　吉水　請子　　（極東ファディ株式会社 取締役 商品経営本部 本部長）

（主な発言）

＜「２０２２年度後半期の国内放送番組の編成」
　　および「２０２３年度の番組改定について」について＞

○　夕方６時台の地域放送番組は、会社勤めの人間にとっては、実際の時間帯に視聴するのは難しい。ただ、会社とは異なる新たなコミュニティーをどう発展させていくかが課題になる中で、番組で取り上げている地域の情報の重要性は増していくと思う。可能であれば、ダイジェストにして、視聴しやすい夜の時間帯に放送することで、地域の新たなコミュニティーを見つけることもできるのではないか。

○　若者に見てもらえるＮＨＫであってほしい。後半期の編成について、若者がおもしろそうだと思うコンテンツや見る時間帯などが工夫されていることが印象に残った。テレビ離れが進み、すべてスマートフォンで済ませてしまうという若者が多い

中で、どのようにして番組を見てもらうかがとても大事になってくる。まずはその第一歩として、ＳＮＳでＮＨＫの番組に関する情報を見て、そこから番組を見る流れが増えていくと、視聴者の幅が広がったり、いろいろな意見が出てきたりと活性化につながるのではないかと思う。

○　最近では、「レギュラー番組への道」のようなレギュラー番組を目指すテストケースのような番組が増えているが、そういった番組を案内するコーナーや番組があってもよいのではないか。自分の好きな番組を探す形で新しい視聴者にアプローチができ、リーチを増やしていくという意味でも、新しい試みとして有効ではないかと思う。また、衛星波で好評だった番組を地上波でリメイクする場合にも、その情報をガイダンスするとよいのではないか。さらに、地域放送番組で言うと、８月１２日(金)に放送したザ・ライフ「１５歳の殺人　問われる更生」は、福岡の商業施設で起きた事件の被告である少年とその周辺を丹念に追ったとてもよい番組だったが、２５分では尺が短いと感じた。おそらく放送時間の何倍もの使用可能な映像があるのではないかと想像している。それらの素材を活用するためにも、例えば初回の放送ではエッセンスが分かるようにして、再放送のときには拡大版にするとよいのではないか。初回の放送を見て興味を持った人は拡大版も見るだろうし、見ていなかった人も見るかもしれないので、特に報道系の番組の場合はよりよくなると思う。

○　番組編成に関して、同じ時間帯で生活している人ばかりではないため、いろいろな時間帯に再放送することで、上質な番組がより多くの人たちに見てもらえるのではないか。また、Ｚ世代と呼ばれる１０代、２０代の子どもたちは、利用するメディアを自分で選択するようになっている。若者を追いかけるのではなく、自分たちがよいと信じるものを発信していく中で、それがどこかの情報の中で選ばれる時代になってきている気がする。発信ももちろん大切だが、編成も含めてより多くの人に見てもらえるための上質な番組づくりに、原点回帰という意味で改めて目を向けることが必要ではないかと感じている。

○　テレビ離れが進み、つけっ放しになかなかしないという中では、どの時間帯に何の番組をやっているのかがよく分からない。気になる情報だけをチェックして見ていたり、万人がそれぞれ違う興味の方向を向いていたりするため、こういう番組を放送するというのが届くように情報をいかに発信するのかが課題だと思う。ＮＨＫのネット上での取り組みも進んできているが、もう一声、何かＳＮＳ上での発信などがあるとよいのではないか。テレビ離れは若者だけではなく、周辺のアラフィフ世代でもすでにそういう時代に入っている印象もあることから、その点を考慮した

らさらによくなると思う。

○　デジタルシフトの説明資料に「放送・デジタル・リアルイベント」と書かれていたが、ＮＨＫのスポーツ中継、あるいはスポーツ報道がどう変化していくのかが気になる。「ＦＩＦＡ　ワールドカップカタール　２０２２」がまもなく開幕するが、放送において民放とは違うＮＨＫとしてのデジタルシフトを生かしたスポーツ中継を、オリンピックもしくは世界選手権と同じクラスの大会でどのように伝えていけるのか非常に興味深い。デジタルの部分でいうと、サッカーの試合の模様をすべて見るというより、よい場面を編集してＳＮＳ上で見るというのも、若年層には興味があるところだと思う。さらには選手の人となり、背景にあるストーリーも非常に興味深いところなので、それらをうまくデジタルで伝えるなど、いろいろな角度から報道してほしい。また、ドキュメンタリー番組などＮＨＫの番組を教育現場で見せたいと思うことがある。若年層はあまりＮＨＫを見ていないという状況も踏まえ、ＮＨＫプラス以外でも教育現場でＮＨＫのコンテンツを活用できるような方策を考えてほしい。

○　７月２４日(日)の桜島噴火のニュースについて、安心・安全という意味で必要だったとは思うが、地元の鹿児島の人たちにとってはすごく大げさなニュースだと私のまわりでは話題になっていた。実際、一報はＮＨＫが一番早かったと思うが、民放も含め全局が緊急速報で桜島大爆発として映像とともに報道していた。噴火の映像を流すことも大事だが、速報は逆に恐怖心をあおることもある。今回、レベル５になった段階ではすごくにぎやかに報道されていたが、レベル３に下がったときはそこまで大きく取り上げられなかった。特に桜島では、風評被害によりホテルのキャンセルが増えただけでなく、しばらく予約が入らなかったという話を聞いている。気象庁からの情報は、地元にとっても大事ではあるが、地域との温度差も認識しながら、発生時だけではなくその後の情報も発信してほしいと感じた。また、「ＮＨＫニュース・防災」アプリも最近はよくテレビで紹介されているが、まだ認識が進んでいないことから、引き続き周知してほしい。テレビ離れは本当に実感していて、ホテルでも最近はテレビではなくネットフリックスなどが見られている。受け手の変化もあるため、デジタルシフトへの取り組みをどのようにテレビ離れとつなげていくのかが、これからの大事な課題であると思う。さらに、鹿児島局で「わけもんラボ」という、２９歳以下で何かしたい、鹿児島をよくしたいという思いを持った若い人たちが新しいつながりをつくって、チームで鹿児島の課題を研究して、それを企画、実行していくプロジェクトがあると最近知った。放送局と地域が一緒になった企画が、どういう形になるのかが楽しみであり期待している。次年度も正確な情報と、ＮＨＫだからできる取材力と制作力と映像など、そういった部分がしっかりと伝わる番組づ

くりを進めてほしい。

○　ここ最近、ＮＨＫの制作する番組は「攻めた」内容になっており、視聴してみると面白いし、考えさせられる。従来のスタイルにとらわれず、時代の変化に合わせて新しいことにチャレンジし続けるという姿勢をこれからも続けてほしい。また、生まれた時から身近にスマホがあるデジタル世代(今の３５歳以下)の割合が増えていくにつれて、テレビではなく、タブレットやスマートフォンで番組を視聴する傾向がますます加速することが予測されるので「ＮＨＫ＋」や「ＮＨＫニュース・防災」といったアプリを更に充実させていく必要があると考える。特に力を入れていると感じるのが、ＳＤＧｓ、ＬＧＢＴＱ＋、地域の魅力発見、防災への取り組み。さまざまな番組を通して、間違いなくこれらの項目に対する視聴者の認知度は向上している。ただ、せっかく良い番組が制作されているのに、その存在が知られていないともったいないので、ＳＮＳを効果的に活用するなどして、視聴率を上げる努力をすべきである。

○　近年、災害の頻度の増加や規模の甚大化などが問題となり、ＮＨＫでも災害放送に力を入れているところと考えている。さらに災害時には放送番組内で情報を流すことに加えて、そこからインターネット上に、より地域や地区ごとの詳細な災害情報が時間差なくもっと得られるようになれば、さらなる災害対策につながるのではと考える。また、国際化が進捗する昨今、世界に向けた日本の情報発信にも、もっと力を入れていただきたい。日本のメディアとしてＮＨＫの役割は大切であると考えるため、さらなる日本側からの世界に向けた情報発信の強化をお願いしたい。

○　テレビを見る時間が減ってきたように感じる。そんな時でも、時事ニュース、気象災害などの報道についてはＮＨＫを見るようにしている。今後も引き続き、安心・安定なニュースをお願いしたい。

（ＮＨＫ側）

委員の皆さんからいただいた若年層に届くようにといった点や、テレビ離れに対してデジタルシフト含めてどのように対応していくのかという点は、まさにいろいろトライアルをしながら取り組んでいる。ＳＮＳ活用など進めていく部分もありながら、指摘いただいたように受け取る側の変化に対応すべきところもある。ＮＨＫとしては、届けるべきものをしっかりつくるという原点を踏まえながら、取り組んでいきたい。スポーツについても、ワールドカップサッカーはまさにどういう伝え方をしていこうかと検討

している。デジタルでの伝え方という部分もあるが権利関係もあり、どこまでできるのかも含めて公共メディアの役割を踏まえながら進めていきたい。教育現場の話については、ＮＨＫオンデマンドを紹介していただいている学校もあるようだ。世の中の人に見ていただく場をどのようにつくっていくのかというのは、まさに教育現場の意見もいただきながら考えなければならないテーマだと思う。後半期は、デジタルシフトなど大きく取り組まなければならない点もあり、我々としても若い人だけでなく今まで見ていただいている方も含めて、どのようなサービスを提供できるか、また向き合っていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　８月２０日(土)のブラタモリ「桜島～世界有数の活火山になぜ暮らす？～」を見た。噴火のニュースの後だったこともあり、地元でももっと桜島を知ってもらいたいという思いから、ＳＮＳでシェアしたりホームページで告知している人が多いように感じた。火山活動や噴火の歴史、麓での人々の暮らしや火山灰や避難壕などを、映像や地図などを使って分かりやすく伝えていた。さらに、地元にいる私でも知らない情報が取り上げられ、地元の者にとっても意味があるとてもおもしろい番組だと改めて思った。桜島が活火山からの恵みを受ける一方で、災害と常に隣り合わせであることが幅広く取り上げられていてとてもよかった。タモリさんの知識とともに、軽快なトークがすばらしい番組であり、地域学習にも生かされるのではないかと思った。また、これまで蓄積された情報をホームページやアーカイブスでも展開するなど番組で紹介した地域を巡りたくなる仕掛けがあるとより生かされていくのではと思う。

（ＮＨＫ側）

ブラタモリは鹿児島発地域ドラマ「この花咲くや」と同じディレクターが制作した。災害があって大変なところではあるが、これだけ魅力もあるということを、鹿児島の皆さん、そして全国の皆さんに伝えたいという思いから、二つの手法を使って描いた作品である。そういう視点で見ていただいたことをありがたく思っている。

○　８月２６日(金)の「やりおる！行動経済学～かまいたちとちまたのアカンたち～」(総合 後 10:00～10:44)を見た。行動経済学の話題は以前少し聞いたことがあり、

暮らしの問題点を行動経済学の観点から解決していく番組に興味を持って視聴した。最初の会社内でのゴミの分別を行動経済学で解決する内容は、日常に関係しており、私の住んでいる地域のごみ収集場所でも使えるような汎用性のある内容と感じた。また、専門家の意見だけでなく、その場にいたレポーターの意見を取り入れたところもよかった。家の片づけや商店街の自転車乗り入れ問題など話題が身近なものである点もよかったと思う。行動経済学と聞くと硬いイメージであるが、芸人のかまいたちをＭＣに、レポーターにも高岸（ティモンディ）、キャラクターの声に中野（蛙亭）を起用するなど、楽しそうな感じとなり、視聴へのモチベーションが増したと感じた。また、イラストキャラクターを使用したところや出演者の表示のされ方なども工夫が感じられた。番組全体として、専門家の意見とともに見やすく作られており、楽しく視聴でき、かつ新しい知識も得られたつくりであった。この「行動経済学」というワードを頭に入れて、見識を深め、自分の専門分野にも活用していきたいと感じた番組であった。

○　８月２６日(金)の「辺境のプレイリスト」(総合 後 10:45～11:28／九州沖縄ブロック)を見た。福岡に住む外国人や日本人の若者がどんな音楽を聴いて自分を励まし、生活の節目で気分を立て直しているのかをうまく描くなど、コンセプトがしっかりしたよい番組であった。企画として優れているので、ぜひシリーズ化してほしい。続編をつくる際は、福岡のネイティブな視点で、「こんな深みのある人間が福岡にいるのか」「こんな音楽を聴いている人がいるのか」と地元に深く根づき、土着性に富んだリストにするとさらなる視聴につながると思う。

また、旧統一教会をめぐる報道については、事件直後、ＮＨＫはやや抑えめという印象であったが、霊感商法や献金によって相当な数の人たちが苦しんでいることが分かり局面が変わってきた段階で、深く取材した内容を伝えるようになったと感じている。特に、９月２日(金)の「おはよう日本」では、富山県議会・市議会の議員が旧統一教会と交流し、県知事と富山市長が関連団体の支援を受けていたといった現状が、富山局の記者の取材で明らかになっていた。この企画は８月２９日（月）の「クローズアップ現代」でも触れられていたことがわかり、さらにこの番組では国際勝共連合の会長にもインタビューするなど、ＮＨＫの総合力が発揮されていると感じた。さらに、「国際報道２０２２」に出演している岩田明子さんの役割・肩書きについて確認したい。解説委員ということで解説をされているが、今月の「文芸春秋」で岩田さんは政治外交ジャーナリストという肩書きで安倍元首相の特集を始めている。岩田さんはＮＨＫを辞めたと思っていたが、再雇用で解説委員として働いているという記事もあり視聴者からすると分かりにくい。業界人の立場で見るとルール違反ではないかと思う部分もある。ＮＨＫの解説委員として霞が関の省庁や政府等で取材した結果を、フリーのジャーナリストという形で、別のところで発表

するのはおかしなことではないか。外形的に見る限りでは理解しがたい部分もあるため、分かる範囲で教えていただきたい。

（ＮＨＫ側）

コンセプトとしては、アジアの交流が減っている中で、そういう人たちが暮らす福岡を「プレイリスト」という切り口で迫っていった番組であった。いただいた意見を受け止めながらよい番組に発展させていきたい。

（ＮＨＫ側）

岩田明子さんについて、私の想像や個人的な意見を述べるわけにはいかないので、きちんと確認したうえで、話ができればと思っている。

○　９月３日(土)のキミだけ応援団「日本一のパティシエになりたい！～飯塚高校・製菓部～」(総合 前7:35～8:00／九州沖縄ブロック)を見た。今回の製菓部の取り組みを見ると、これからの学校選びの在り方にも随分と影響があるのではないかと感じた。志を持って菓子づくりに取り組んでいる生徒たちの姿は本当に輝いていて、見ている側が応援されているような番組であった。前半の練習風景の中に織り込まれた工夫が、最後のスイーツ甲子園の予選会の伏線になっていて、見どころが分かるように構成されていた。ただ、たくさんの生徒たちの声を拾い上げていたが、なぜ菓子がそんなにも重要なのかといった、もう一歩踏み込んだ問いかけというものがなかった。また、菓子を作る場面だが、髪をひとつに結び、白い帽子にマスク姿であるためか、誰が誰だか分かりづらく、生徒たちの表情をしっかり見ることができなかったところが少し残念だった。

（ＮＨＫ側）

「キミだけ応援団」は、メジャーな部活動だけでなく、本当に高校生たちが一生懸命取り組んでいる姿を描いていければという思いを込めた番組だと感じている。また、なぜ菓子が重要なのかという点をもっと深めるといった意見などは今後の参考にしていきたい。

○　９月３日(土)のＮＨＫスペシャル「玉鋼（たまはがね）に挑む　日本刀を生み出す奇跡の鉄」を見た。非常に重厚感があり、定点カメラで長時間追うことによる迫力、あるいは人の表情の変化というものを実に細かく捉えていた。日本的なものづくり

の神髄で、圧倒的な伝統に支えられる手作業の工程や職人たちの経験が、職人たちによって引き継がれていることがよく理解できた。また、神聖な刀作りにぴったりと合うような音楽を選択していて、ＮＨＫらしく引き込まれるドキュメンタリー番組であった。ただ、この日本伝統のものづくりがどのように次の時代に受け継がれていくのかという人材の問題や、会社経営の存続に関する問題について知りたいとも感じた。

（ＮＨＫ側）

日本的なものづくりの伝統を、職人が引き継いでいくことの大切さについて伝えているということで評価いただいた一方で、人材・会社の経営の問題などについても、きちんと押さえる必要があると思っている。

○　９月７日(水)の クローズアップ現代「揺らぐ“中絶の権利”日本の現実は」を見た。民放では見ることができない踏み込んだテーマで、皆が考えるべき社会問題を取り上げていた。放送後、日本と世界でどのような実態の違いがあるのかと気になり、「クローズアップ現代」のツイッターを見たところ、分かりやすくまとめられていてよかった。番組を視聴していない人に向けて分かりやすく解説したり、これまでのＮＨＫの取材の記事を掲載したり、さらに支援内容の連絡先といった細かいところまで、皆が考えるきっかけや助けを求める人への支援なども分かりやすく情報提供されていた。ＳＮＳでの発信はこれからも取り組んでほしい。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫは､放送で伝え切れなかった内容をウェブ特集にしたり、ツイッターなどに映像を展開したりしていく仕掛けに力を入れている。これからもご覧いただきたい。

○　９月７日(水)のプロフェッショナル　仕事の流儀「半分の自信　～俳優・藤原竜也～」を見た。藤原竜也さんは、出演する映画をほとんど見てきた、昔から好きな俳優である。もともと裏表があまりない人じゃないかと思っていたが、密着映像から、想像を超えた気さくな人柄が伝わってきて、話が面白く、ゲラゲラ笑いながら視聴していた。藤原さんの本音を引き出したＮＨＫの奥ディレクターも素晴らしかった。新たに挑戦する舞台「ハリー・ポッター」において、難しい関係性である師ダンブルドアとのやり取りのシーンをどう演じるかを悩んでいたときに、俳優としての師匠、故蜷川幸雄さんとの関係に置きかえることで、しっくりした演技ができるようになっていく様子を見て、改めて、人間の人生において師匠に出会えるかどうかが本

当に大切であると感じた。ご存命の時には、蜷川さんの評価を気にしてある意味窮屈に演技をしていたが、亡くなられてからは自由に演技をする喜びを味わえるようになったとのこと。ただ、楽にはなったものの、演技に対して安易に妥協しようとしてしまう自分を戒め、更なる高みを目指そうとするところが、本物のプロフェッショナルだと思った。藤原さんが「プロフェッショナルとは」と問われて答えた「破壊と創造」という言葉がとても響いた。私もアパレル業に携わり、自社ブランドの制作というクリエイティブな仕事にも携わっているため、「もっといいものができるはず」と、現状に甘んじることなくチャレンジし続けるということが絶対的に必要であると気づかされた。藤原竜也さんをますます好きになるとともに、「良いものを創る」ための大きな気付きを与えてくれた、素晴らしい番組だった

○　９月９日(金)の長崎スペシャル「“ナガサキ”の痕跡と生きて～１８８枚の“令和原爆の絵”～」(総合 後 7:30～8:29／長崎単)を見た。今回の“令和 原爆の絵”には、被爆の経験したことがない私たちがこれからも日本人として正しい歴史感を育んで守っていくために、とても重要なことだと感じた。当番組では被爆者が数名出演されていたが、どの出演者の皆さんも７０歳～９０歳前後の高年齢であった。今後、ますます被爆者の減少していく危機感と、原爆の恐ろしさを受け継いでいけるのかという未来の不安を感じた。番組の冒頭で原爆の絵の紹介に入る前に、時代背景の説明をもっと丁寧にしてほしい。なぜ、戦争が起きて長崎県と広島県に原爆が落とされたのか。過去の出来事に対して、できるだけ正確に情報を付け加えていくことで、若い世代の視聴者にとっても過去の歴史の学びにもなり、われわれにとって祖父世代から現代世代までの家計のつながりと、戦争との関係性を再認識できるきっかけにもなるはずである。

○　９月１２日(月) の朝ごはんＬａｂ.「サルシッチャのスープ」を見た。久しぶりに夜ゆっくりとよいものを見たという感覚になる番組だった。食に関わる社会問題を肩肘張らずに解決し、食というテーマでここまで考えさせられるのは、テレビならではだと思いながら見ていた。ほかにも「ふるカフェ系　ハルさんの休日」や「美の壺」のようなドラマ仕立ての教養番組は、本当に見やすくてよい。迎合したり、追いかけたりするのではなく、独自のスピード感、ゆったり感をしっかり持った番組づくりをされている点に共感を持っている。これからも地域の課題や社会的問題などを、朝御飯という視点でさらりと、気持ちよく、楽しく、すてきに紹介してくれる番組になるのではないかと期待している。

（ＮＨＫ側）

地域の課題など難しい問題をさらりと取り上げるという意図が

伝わり、制作した者にとってこれほどうれしいことはない。これからも、皆さんに分かりやすく受け入れやすい形で、なおかつ、伝えることはきちんと伝えていければと思う。

○　連続テレビ小説「ちむどんどん」について、モニター報告などを見ると高評価とそうでもないのが拮抗しているが、過去の例から言うとどういう状況なのかを確認したい。今、インターネットの世界では「ちむどんどん」はドラマとしていかがなものか、出演している人や脚本が悪いといった話になっている。連続テレビ小説がインターネット上で批判される対象になり、放送番組審議会委員の立場からすると、気の毒な展開になっている。ＮＨＫとして、特に九州沖縄地方では地元ということで力も入れていたため、「ちむどんどん」についてどう見ているのかを問いたい。

○　沖縄県民の中でも賛否両論あるが、否定的な方でも結局見ているため、そういう意味では話題になるのはよいことかなと思う。方言など突っ込みどころは満載だが、やんばるの市町村や観光協会の皆さんは盛り上がり、喜んでいる人もたくさんいる。飲食の場では、賛否の話で盛り上がることもある。そういう意味で、全部ひっくるめて盛り上がっている。

（ＮＨＫ側）

朝は明るい気持ちになるような、予定調和の展開でもよいのではないかと思うところもある。しかしながら、放送だけではなくインターネットでもいろいろな情報が出る時代になり、指摘のようなことを感じる人もいる。そこは真摯に受け止めながら、今後の番組づくりに生かさなくてはならないと考えている。

○　８月２８日(日)の「沖縄・戦火の放送局～手記に刻まれたメディアの実相～」（ＢＳ１　後 11:00～11:49)を見た。余計なＢＧＭやテロップを入れず淡々と伝えられていたが、その割に焦点がぼやけているように感じた。また、語りは番組を制作したディレクター、解説はアナウンサー、主人公の手記の朗読は沖縄出身の俳優がそれぞれ担当していたが、その区分けが入り乱れるところがあり、見ている側の情報の整理が難しかった。さらに、自らを「馬鹿者」と自省していた岩崎命吉元ＮＨＫ沖縄放送局長について語る部分も、戦時中と戦後の状況のギャップや温度差があまり伝わってこなかった。この番組は、戦時下におけるメディアの役割が何かを伝えることが大きなテーマだと思うが、もう少し突っ込んだ形で届けてほしかった。今年は沖縄復帰５０周年で、沖縄戦含め復帰前後の沖縄がＮＨＫで多数取り上げられ、県

民として非常にありがたいことだと思っている。

（ＮＨＫ側）

伝えることは非常に大事だと思っている。「沖縄・戦火の放送局」について、今回のテーマは自己検証ということもあり、演出なども抑えながら原点に立ち返って事実を淡々と伝えるようにした。伝わりにくい部分があったことについては、重く受け止めている。

ＮＨＫ福岡放送局
番組審議会事務局

２０２２年７月ＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会

７月のＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会は、２１日（木）、ＮＨＫ福岡放送局（ウェブ開催）において、８人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、事前に視聴したいちおし！九州沖縄「フミダス！ガマダス『水害から命を守り抜け！防災アップデート大作戦』」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に８月の番組編成の説明、視聴者意向および放送番組モニターの報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	古荘　貴敏	（株式会社 古荘本店 代表取締役社長）
副委員長	西野　友季子	（株式会社 ニュー西野ビル 代表取締役）
委　　員	乾　　眞寛	（福岡大学 スポーツ科学部 教授）
	いのうえちず	（雑誌モモト 編集長）
	岡野　涼子	（一般社団法人ＮＩＮＡＵ代表理事）
	久保田　正廣	（西日本新聞社　論説委員長）
	関西　剛康	（南九州大学 環境園芸学部 教授）
	吉島　夕莉子	（吉島伸一鍋島緞通株式会社 ５代目技術継承者 デザイナー）

（主な発言）

＜いちおし！九州沖縄「フミダス！ガマダス『水害から命を守り抜け！
防災アップデート大作戦』」（総合　６月２５日(土)放送）について＞

○　防災というテーマをできるだけ身近に意識できるようにしたいという制作意図は十分に感じられた。ただ、親しみやすさを求めるがゆえのキャラクターやお笑いを含んだ柔らかい番組のトーンと、命や財産に関わる災害のシビアな問題とがマッチせず、番組冒頭は少し違和感もあった。全国の各地域が見られるＮＨＫ全国ハザードマップの２次元コードが画面上に示されていて、身近な話題から自分の地域へ意識を転換させるという番組のねらいは理解できた。その一方で、地元の行政はどのように関わっていくのか、話に出てきた国土交通省の担当者は単に危険だと伝えただけだったのかなど、十分に理解できないこともあった。熊本県立大学の島谷幸宏特別教授の解説も分かりやすく親しみやすかったが、最終的にどのような解決策に行き着くのか、若干不安も感じた。どのようにアプローチしていくのか、地域に合っ

た形で今後は対策が具体的に進展していく様子を伝えられるとよいと思う。また、初めて聞いた分散避難という発想は非常に新しく、今後の参考になった。

○　行政の関わり方が見えにくく、どのように対策したらよいのか正解が見えにくい問題でもあり、今後も数回、番組で経過を追いかけることは非常によいと思う。ナレーターの声が気になり内容が耳に入りにくい部分があったため、もう少しプレーンな声質のナレーションがよかった。一方で、キャラクターのあまびーは熊本弁で話していて親しみが持てた。自主防災会会長の石井謙二さんや役員の髙木良一さんの誠実さも感じられ、専門家と一緒に実際に地域を歩いて危険箇所をチェックすることの大切さを身近に感じられる気がした。分散避難というキーワードや、自分が住んでいる地域ではどうだろうと、我が事として考えられる番組構成になっていて、とてもよかった。全国各地でこのような番組を放送することで、その地域の人たちが身近な問題として防災対策を考えることができると思う。

○　避難計画の重要性を認識するという意味では、非常によい番組だった。防災や減災に対してなかなか自分事に落とし込むことが難しい中で、今まで聞いたこともなかった分散避難という解決策を一緒に導き出していくという構成は非常によく飽きなかった。石井さんや髙木さんは番組のキーパーソンであり、このような人から防災や減災を伝えてもらうことでそれらがより身近なものになると感じた。これからも二人のように、地域のために頑張ってくれている人たちにフォーカスを当てた番組を発信し続けてもらいたい。

○　熊本県域向けに制作された番組だが普遍性があり、どの地域に住んでいても伝わる内容だった。熊本にこだわった番組を見ることで、かえって 1000 年に一度の雨に備える時代だというメッセージは全国共通なのだと感じた。プロジェクトの立ち上げとしても成功しており、２７分間に過不足なく堅い要素や柔らかい要素をうまく盛り込んであったと思う。成功の要因としては二つあり、一つは過去に大きな災害の被害がなく身近に感じやすい菊池市藤田地区という場所を選定したこと、もう一つが石井さんや髙木さんのお二人の存在だと思う。特に、二人については実際の活動もそうだが、番組に公民館からリモート参加しており、スタジオとの一定の距離感や現場感がありよかった。菊池市藤田地区という場所や、二人を選んだ経緯などがあれば聞きたい。また、演出面では、あまびーや熊本出身タレントの中上真亜子さんが番組の持っている堅さを程よく中和する役割を果たしていた。続編については大いに期待しており、最終的には行政をどう動かしていくのか、住民と行政をどう結びつけるのかということが重要だと思う。リアルな政策や取り組みとして結実させるために行政を巻き込んでいくことができれば、番組が持つ普遍性に熊本らしさ

が加わり、より充実したプロジェクトになると感じる。

（ＮＨＫ側）

番組のリサーチ段階では手探りの部分も多かったが、ハザードマップが変わり影響が大きな地域がないか探す中で、密着してつくり上げていくところを描きたかったこと、何とかしなければならないという意識を持っていたことなどから、今回は藤田地区を取り上げることになった。また、自主防災会会長で地域の区長でもある石井さんや、役員で防災士の資格をもつ髙木さんの存在も際立っていて、この二人を軸にして番組づくりを進めた。熊本に非常に知見のある島谷特別教授に指南役をお願いもしたが、地域の人たちが真剣に考えたからこそ、出口までしっかりと進んだと思う。

○　防災を２７分で取り扱う番組として、必要最小限のコメントで、うまく楽しませながら構成をまとめていた。石井さんや髙木さんのコメントに加え、島谷特別教授の的確な現地調査と課題抽出があったが、そのアドバイスに沿ってどのように分散避難をすべきかを住民が考えて取り組み、答えを見つけ出していてよかった。藤田地区という場所を選択したこともよかったし、次のプロジェクトにつながる期待感をもった。その一方で、アドバイスをする側の見る危険ポイントなどが少し違うだけで、答えが大きく変わってしまうおそれもあり、番組制作に対して危うさも若干感じた。また、河川の増水や浸水によってどれだけの危険ポイントが生まれるのか、土砂災害警戒地域などの土砂災害リスクのポイントは大切であり、そういった示唆は非常によかった。課題を大きく解決した第１弾だったので、続編にも期待したい。

○　防災という重いテーマだが、２７分で分かりやすくまとまっていてキャスティングやスタジオの雰囲気により、和やかでとても見やすい番組となっていた。シンプルに要点をとらえたテロップが多く使われており、文字の大きさや色使いにも工夫があるなど、目から入ってくる情報でとても伝わるものがあった。地図や洪水予想、危険な場所を示したシミュレーション映像など、イメージもとても分かりやすかった。全国ハザードマップについても初めて知ったが、実際どうやってどこに逃げるか自分事として考えながら見た。また、分散避難という新しい取り組みも、モデルケースとしてほかの地域にも広まっていけばよいと感じた。番組を通して、地域としてどう準備をしていくのか見直すことも今後重要で、どのように行政を巻き込んで発展していくのか期待している。テンポもよく、全体的によい番組だった。

○　とてもきれいにまとまっていて、一人一人の防災意識を高めながら、被害を少なくするためのＮＨＫの取り組みはためになり、命を守るものだと感じた。この番組を視聴して、いざ避難するとなった場合にどうするのかということを真剣に考えてなかったことに気づかされた。また、ハザードマップがアップデートされていることや分散避難という情報を得ることができた。ただ、私自身、視聴番組でなければこの番組を見ていなかったと思う。タレントや演出など、さまざまな工夫を感じたが、どこまで役に立っていたか少し疑問も残る。出演者も若い方が少なかったので、若者からするとどこかひと事になってしまってしまうのではと感じた。分散避難と言われても、周囲に知り合いがいない人や都市部の人はどうすればよいのか不安があると思う。その部分をもっと掘り下げると、幅広い年齢層が当事者意識を持って番組を見ることができると感じた。

○　さまざまな気づきや課題を見つけることができる、よい番組だった。特に、ハザードマップの更新が法律で義務づけられているということは大変勉強になった。自主防災会の皆さんを中心に描かれていたが、もっと若者も巻き込み、地域が一体となるようなことが必要だと感じた。重ねるハザードマップもとても便利だが、実際に現地調査をすることもとても大切だと思う。しっかりしたデータの上に、実際に危ないエリアをマッピングしていく活動は必要だと感じた。また、分散避難についてはすばらしいアイデアだと思うが、もともとその準備をしている、ふだんからコミュニケーションを取っている地域でないと難しいと感じた。ただ、各自治体で実現するための議論のきっかけを与えたという意味ではよかったと思う。命を守るための番組でありながら、カジュアルに楽しく見ることのできるところが、「フミダス！ガマダス」のよいところなので、これからもその路線を崩すことなく、魅力的な番組づくりにチャレンジしてほしい。

○　これから大雨が降る時期になるので、河川の氾濫や洪水による水害の防災対策の予防としてとてもよかった。島谷特別教授の現地調査では、要点となる注目ポイントを３点（上流・下流・排水）に分かりやすくまとめており、どこに水害の要因があるのか参考になった。特に、藤田地区を流れる河原川は下流で氾濫する条件がいくつも重なっていて、危機的状況にあると理解できた。ふだん生活している場所の立地条件を踏まえてリスク分析することで、早めに避難等の対策を打つことができ被害を少なく抑えることにつながるので、早めに分かってよかったと思う。“早め早めの分散避難”は、避難先の選択肢が広がるという意味を含んでおり、自然脅威に対して受容的かつ優位性を保った考え方があるのだと感心した。また、冒頭に藤田地区の地形をマップ上で俯瞰的に説明していて分かりやすかった。さらに、ドローン撮影で実際の街並みと河川に関する情報が補完され、地区構造の問題を一層リアルに

体感できた。今回は熊本県菊池市藤田地区が舞台だったが、同じような立地条件の地域は全国にいくつもあると思う。この番組は、他の地域にとっても“水害に関する防災対策の教育的な番組”になると感じた。より多くの地域に情報発信できれば、まさにいのちが守れる行動につながると思う。最後に、冒頭に映っていた水害にあった建物の映像は過去の藤田地区のものなのか、藤田地区では大雨による水害と浸水した経験があるのか気になった。

○　放送局と地域が一体となって防災という地域課題の解決に取り組み、番組を通してそれをコミュニティにフィードバックするという、ＮＨＫでしか作り出せない内容で本当にすばらしかった。ハザードマップの見方などもとても丁寧で、防災について具体的で学習効果の高い番組だった。実際に川の付近を歩くほか、避難経路を確認する場面では、アニメーション映像の解説もあるなどリスクがとても分かりやすく、適切な判断力は知ることによって育まれるのだと感じた。また、防災活動を進めるうえで地域のつながりがいかに大切かという視点も、インタビューを通じて上手に示されていた。次の課題は、このプロジェクトで命を守る技術と分散避難という発想を、地域住民とどう共有していくかだと思うが、ぜひ続編を見たい。あえて言うなら、早めの分散避難を勧めるために「孫の顔見に来た」とか旅行に例えたコメントの使用は、孤立感を感じている環境下の方もいると思うので慮るべきと感じる。また、行政との関係はどうなっているのか、この点についても簡単な言及があるとさらによいと思った。

（ＮＨＫ側）

行政の関わりについても多数質問や意見をいただいた。そもそも違う地区に避難をする場合は、市と協定を結ぶ段取りが必要になるため、分散避難を計画・熟慮していく中で行政は関わってくる。具体的な避難計画作りが進む過程で、行政の動きが見えてくることになると思う。また、藤田地区は過去に被害経験があるのかという質問もあったが、大きな被害はなく逆に新しいハザードマップを示されて驚き、立ち上がったと聞いている。分散避難についても、ビジネスホテルなどを利用する新しい形の避難があり、我々にとっても気づきになっている。実際、テレビ画面にＬ字型で注意情報を流すときに、ホテルに避難することも一つの手だと呼びかけたりもしている。本日の意見を参考にして、第２弾、第３弾と進んでいけるよう、継続取材をして放送にまとめていきたい。

（ＮＨＫ側）

制作者側が意図していたねらいや、意図していなかった部分への評価もいただいたので今後に生かしたい。防災・減災という非常に重いテーマを、視聴者に身近に感じてもらうために、キャラクターや熊本出身タレントを起用したが、第２弾、第３弾を制作する中で、自分事として考えてもらうためには、伝えるべき話の核をしっかりしてどのようにやるかが大事かと思う。今後出てくる課題の過程も見せることが、さまざまな地域でも参考になると感じる。今回非常に高い期待をいただいたので、結果どうなるかというところが非常に重いと思う。今後１年間追っていく中で、普遍性を持ちほかの地域でも参考になるようなものにしていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　６月１８日(土)の「発想転換！世界を変えるシン・キング（２)」は、今までのクイズ番組にはない構成でおもしろかった。環境にちなんだ、実際に考えなくてはならない社会問題がテーマで、出演者から出されたさまざまなアイデアを答えにまとめていく過程はすばらしく、物事を考えていく順序ややり方を学べるなど、見応えもあった。ただ解答を選ぶのではなく、出演者がみんなで一緒に解答を考えていくクイズ形式は、難しいテーマでも番組を見たいと思わせるよいきっかけづくりになると感じた。

また、７月１４日(木)の＃てれふく「福岡　ＹＯＫＡ　ＤＥＳＩＧＮ　ディスカバリー」（総合 後 7:30～7:55／福岡県域）を見た。存在するすべての物にはデザインが施されていて、作り手の思いや意図が込められていることに改めて気づかされた。トイレ、山笠、屋台、玩具など幅広いデザインから福岡を知ることができた一方、情報量が多すぎて落ち着いて見ることができなかった。テーマを詰め込みすぎず、二つぐらいに絞ってもよかったと思う。それぞれのテーマをもっと詳しく掘り下げる形でシリーズ化してほしい。

○　６月２９日（水）クローズアップ現代「僕はまだ成長できる～映画監督・是枝裕和の挑戦～」を見た。良い作品を残すために、いかに成長していくか、番組が是枝監督の一連の映画作品のテーマにフォーカスするのではなく、自らに課した是枝監督の成長のノウハウにフォーカスしており、新鮮で影響力があった。特に印象に残ったのは、慣れ親しんだチームよりことばの通じない韓国での映画づくりを通して、見

過ごしていたものが見える力を鍛えたというくだりだ。主体的かつ論理的な選択で、是枝監督はきっとアウトプットを前提としたインプットを行っているのだと感じた。今年６０歳の是枝監督のあくなき成長への願望・挑戦は、人生 100 年時代を生きる私たちにとっても必要なことだと思う。また、韓国映画界が国をあげて人材育成へ投資する様子から日本の地位が既に危ういことにも気付かされた。次世代によい形で映画文化を渡すために、使命をもって活動している人がいることを伝えることが、とりまく環境に変化をおこすきっかけになると思う。自分自身や社会に対して成長を促すために向き合っていく是枝監督の思考や、それにのっとって選びとられた行動には多くの学びがあった。

○　７月１日(金)のザ・ライフ「ＴＳＭＣがやってくる！～活況　半導体最前線～」を見た。半導体の受託生産で世界最大手のＴＳＭＣが、熊本に新工場を作るということで、さまざまな動きをコンパクトにまとめていた。製造業系ユーチューバーである、ものづくり太郎さんの軽妙なトークもあり簡潔な構成だったが、テーマの大きさからすると時間が短く消化不良だった。ＴＳＭＣが熊本にやってくることは、九州にとって最大級のニュースの一つだと思う。関係企業や学校などは九州各県にあるが、半導体復活の話は九州だけではなく日本全体、さらには半導体のサプライチェーンの関係で世界にもつながる話であることから、ＮＨＫが九州沖縄地方のネットワークを活用して継続的に追うべきテーマだと感じる。九州発の特集番組をつくるなど引き続き追い続けてほしい。

７月１０日(日)にあった参議院選挙の報道について述べたい。昨年の衆議院選挙と比べて、今回の参議院選挙の開票速報は大きな混乱もなく、全体の流れを報道していた。焦点だった福岡選挙区３人目の当確についても、午後８時にいち早く当確を打っていたが、これは期日前投票について丹念に出口調査をしていたからだと思う。今回の選挙報道を通しての苦労話や取り組みを聞きたい。

また、安倍元首相が撃たれ亡くなるというショッキングな事件が起きたが、その時のＮＨＫの報道は同じことを繰り返し伝えていた。新しい情報が入ってはその情報をまた繰り返し、そのまま夜のニュースまで持っていくという展開だったが、一般の視聴者がどう感じたのか気になる。もう少し整理して、アクセントを時々入れるなど改善の余地があると感じた。ローカルニュースでも、この事件に関する街の人の声を伝えていたが、別の福岡のニュースを伝えるとよりよかったのではないかと感じた。

（ＮＨＫ側）

前回の衆議院選挙で、議席予測を外してしまうということが起

きたので、東京の選挙班を中心に見直ししたと聞いている。出口調査の場所や時間の見直し、結果分析など基本に立ち返って一つ一つ詳しくみていった結果、今回は議席予測の範囲内にすべて収まった。安倍元首相の襲撃に関する報道についてはそのとおりかと思う。現場にＮＨＫの記者がいて、一報が速く、それなりに臨場感のある映像も集めることができたが、新たな情報がない場合にどうするべきだったのか。専門家の出演や演出面など、今後の課題だととらえている。ローカルニュースについても、福岡で起きたほかのニュースを報道することも一つのやり方だと思うので、今後の検討材料にしていく。

（ＮＨＫ側）

福岡選挙区３人目の当確については、当日や期日前投票の出口調査や情勢取材などをふまえて、総合的に判断して打ち出した。福岡選挙区では１６人の立候補者が出て、多数いる候補者の主張をどのように伝えるかを考えた。今回はテキストマイニングという方法で、各候補者が第一声で訴えたことをデータとして紹介したり、ホームページに各候補のアンケートを掲載したりすることによって、有権者の投票行動を促す報道を心がけた。また、民放各社と映像を共有するなど、なるべく多くの視聴者に選挙の情報を伝えられる工夫もした。

○　７月１日(金)のザ・ライフ「ＴＳＭＣがやってくる！～活況　半導体最前線～」を見た。シリーズ化して発信していくべきテーマだと思う。日本で経済が最も活性化する地域の一つになるので、情報の格差がそのまま稼げる人と稼げない人との格差になってはいけないと思う。ＴＳＭＣにより関連企業の進出などで新しい町が生まれ、それに伴うさまざまな要望が熊本県にもあがっていると聞く。九州全体のビジネスチャンスであり、ＮＨＫがそういった情報を公平に伝えることで、自分たちにもビジネスチャンスがあるのではないかと思う人が出てくることが重要だと考えている。また、半導体について理解しないまま独り歩きしているところがあると感じている。ものづくり太郎さんが解説されるということで、半導体とは何かという解説を期待していたが、製造工程の話だった。さまざまな産業が半導体不足で滞っているという状況もあることから、半導体とは何かを知ったうえで、関連事業の情報やすそ野の広い産業になりうるかなどを発信すると、熊本県はもちろん九州全体にビジネスチャンスが広がるのではないかと期待している。

（ＮＨＫ側）

ザ･ライフ「ＴＳＭＣがやってくる！～活況　半導体最前線～」について、２５分ではなかなか伝えきれないと感じた。例えば九州もかつてはシリコンアイランドと言われるなど、日本でも半導体を多く作っていたが、今は作り手がわずかになっているという歴史を踏まえて､ＴＳＭＣをどう見るかといった視点がなかった。これからも、ＴＳＭＣを中心とした九州での半導体の動き方や展開を継続取材し丁寧に伝えていきたい。

（ＮＨＫ側）

経済の難しい話題を、なるべく多くの方に理解していただけるように、ユーチューバーに出演いただいた。九州や日本にとって大きな問題であるので、継続取材し、よりよい番組をつくっていきたい。

（ＮＨＫ側）

熊本県はＴＳＭＣフィーバーになっている。半導体関連企業のほか、不動産業界、銀行、学校などがさまざまな取り組みや新たな対策を打ち出している状況である。一方で、人材不足の中で人材の獲得競争も起きていると聞いている。また国際情勢の影響など、多角的な視点で見るべきだと思う。福岡局、九州沖縄地方の各局とタッグを組みながらさまざまな形で発信していきたい。

○　７月３日(日)のＮＨＫスペシャル「鯨獲（と）りの海」を見た。私は鯨を食べることは当たり前のことだと認識しているし、おかしいとは思っていない。日本の商業捕鯨について取り巻く環境の問題や、鯨捕りに従事する人の仕事について、この番組をきっかけに知ることができてよかった。特に、鯨の捕り方については驚くとともに、１人だけで捕鯨砲で狙い撃ちする場面は迫力があって興奮した。砲手である槇公二さんの鯨を苦しませないように、一撃で仕留めるという考えに感動した。また、さらに続けて「同じ『命』対『命』」、「だけどこの命を俺らいただかないといけないんです」ということばは、同じ地球上の生物同士という観点において、人間と鯨の命の重さは同じであり、人間が生きるために鯨の命をいただいている、という解釈に思えた。そうすると、“はたしてこのまま鯨を食べていくことはよいことなのか？”と疑問が浮かぶほど感性が研ぎ澄まされ、日常の生活では気づかなかった命の重さについて考えさせられた。番組では、鯨の乱獲を防ぐために法律上で捕鯨できる頭数を決めてあることや、鯨の実態調査を行って監視していることなど、鯨の

生態を守りつつ共存していける方法を提示してあり安心した。番組を通して、鯨の生態や鯨捕りの仕事、さらに生物の命の重さなどなど、自分の価値観をいったん見直そうと思えた。

○　７月１５日(金)のかごスピ「“最後の浜”を洗う波～奄美大島　嘉徳～」を見た。嘉徳海岸の静かなトーンの映像から、ヤドカリがクローズアップされて語り出すという始まりに引きつけられたが、直後の世界自然遺産決定を祝うにぎやかな映像とのギャップを少し感じた。また、奄美大島の集落に住む人々を紹介していたが、一つの島の中でさまざまな問題があることに驚いた。観光が盛んで海や自然が美しい華やかなイメージとは逆の、住む人の苦悩や思いにも焦点が当てられていることに衝撃を感じ、考えさせられるきっかけになった。ＮＨＫには、光の部分だけではなく、その地域の人々の現状にフォーカスを当て、ディープな部分をもっと伝えていってほしい。さらに、番組を見てもらえるような工夫や告知などをしてほしい。

○　７月１５日(金)の「クドキャン！工藤公康の九州沖縄キャンプ旅」(総合 後 7:30～7:55／九州沖縄ブロック)を見た。福岡ソフトバンクホークス前監督の工藤公康さんが、キャンプで各地を巡りながら地域の人たちと関わる番組でとても穏やかな気持ちにさせてくれるよい内容であった。アウトドアが好きという、ふだん見られない一面が番組の中で随所に出ており、構成としてもよかった。工藤さんの家族との関係性や災害ボランティアへの思いなどもわかり、人となりもしっかり伝わってきた。また、地域の人も喜んでいる様子が伝わってきて、このような地域密着型の番組はとてもよいと感じた。

○　７月１６日(土)の超多様性トークショー！なれそめ「幸せのために別居婚を選んだ発達障害カップル」を見た。ＮＨＫが取り組んでいる多様性に対する新しい番組だと思った。タイトルが興味深く、録画して見た。多様性をどのように受け止めるかという重たいテーマだが、司会であるロンドンブーツ１号２号の田村淳さんをはじめとした出演者の軽快なトークのおかげで暗くならず、出演するカップルも自分たちの姿を素直に語っており勉強になる内容だった。発達障害にもいくつかのタイプがあり、ある部分の障害を持っているがある部分では非常に優れた才能を持っているということなど、発達障害への理解を促進する役割も番組は果たしていた。Ｅテレの午後９時３０分という時間帯で、より若い世代や多くの方たち、さらには教育者を育成する大学教育機関やそのほかの教育現場でも、ぜひ見てもらいたいと思った。

○　７月１７日(日)の日曜美術館「よみがえるミュージアム～水害から文化財を守れ～」を見た。４５分の番組だったが、激甚化する災害の中、少ない人員ながらも手作業で一つ一つ美術品や文化財を守ることの大変さを非常に痛感した。今後どのように対策するかを考えるうえで、デジタルアーカイブや支援ネットワークの必要性など、これからはその地域の美術館や博物館だけではなく、周辺と連携しながら守っていくことが重要だと感じた。また、文化シェルターなど、今まで想定してなかった災害から文化財を守るためにどのような対策をしておくべきなのか、コンパクトに学べる番組でよかった。

○　７月１０日(日)の「バラカンが見た沖縄」(ＢＳ１　後 11:00～11:49)を見た。海外向けに放送した番組の再編集版だと理解しているが、内容を盛り込み過ぎていて、それぞれの要素の解像度が粗くなっていた。首里城を紹介するエピソードや、地下にある第３２軍司令部壕を紹介する際、説明が不足している部分もあり、誤解を招くのではないかと感じた。また、紅型、琉球漆器、首里城、現代建築でよく使われている花ブロックについてのエピソードが紹介されるなかで、キーワードとして、ちゃんぷる一文化ということばが使われていた。ちゃんぷるーにはごちゃまぜというニュアンスも含まれ、よい言葉ではないという印象を持っていることから、ちゃんぷる一文化というくくりでよいのか疑問に感じた。一方で、花ブロックブームの礎を築いた建築家の仲座久雄さんの息子である仲座巌さんが、ちゃんぷる一文化よりも、さらに奥が深いお話を番組内で説明されていたことはとてもよかった。

また、７月１５日(金)の「知花くらら“琉球”へのはるかなる旅」(総合　後 7:55～8:38／九州沖縄ブロック)を見た。「バラカンが見た沖縄」と同じような内容に見えるが、掘り下げる深さが全然違っていた。知花さんのファミリーヒストリーを盛り込んでいて心に訴えるような要素があった。同じように沖縄を取り上げていても受ける印象が全く違うと感じた。ただ、沖縄県立芸術大学名誉教授の波照間永吉さんが沖縄文化の保存と復興に尽力した鎌倉芳太郎さんのことば「チンヤハラハダァトゥ　ヌテーナガナガトゥ」を紹介していたが、耳になじみくいことばなので、テロップを活用したほうがよいと思った。

さらに、７月１７日(日)の「日曜討論」について意見を述べたい。ジャーナリストの江川紹子さんの発言に対する司会者の対応を問題視する声があがっているが、あの番組に江川さんを呼んだという事実が大事だと思う。

（ＮＨＫ側）

全体を通して、今回は継続的な取材、放送が必要だということを受け止めた。「クドキャン！工藤公康の九州沖縄キャンプ旅」のように地域密着型の番組や地域で生きる人々に焦点を当てる番組

などを今後も制作するとともに、今回いただいたご指摘を参考に、全国に出しても恥ずかしくないような厚みのある番組を出していきたい。

ＮＨＫ福岡放送局
番組審議会事務局

２０２２年６月ＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会

６月のＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会は、１６日（木）、ＮＨＫ福岡放送局（ウェブ開催）において、９人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、事前に視聴したＮＨＫスペシャル「ＯＫＩＮＡＷＡ　ジャーニー・オブ・ソウル」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に７月の番組編成の説明、視聴者意向および放送番組モニターの報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	古荘　貴敏	（株式会社 古荘本店 代表取締役社長）
副委員長	西野　友季子	（株式会社 ニュー西野ビル 代表取締役）
委　　員	乾　　眞寛	（福岡大学 スポーツ科学部 教授）
	いのうえちず	（雑誌モモト 編集長）
	岡野　涼子	（一般社団法人ＮＩＮＡＵ代表理事）
	楠田　喜隆	（株式会社 雲仙きのこ本舗　常務取締役）
	久保田　正廣	（西日本新聞社　論説委員長）
	吉島　夕莉子	（吉島伸一鍋島緞通株式会社 5代目技術継承者 デザイナー）
	吉水　請子	（極東ファディ株式会社 取締役 商品経営本部 本部長）

（主な発言）

＜ＮＨＫスペシャル「ＯＫＩＮＡＷＡ　ジャーニー・オブ・ソウル」
（総合　５月２２日(日)放送）について＞

○　番組を通して、本土やアメリカとの間で常に沖縄は自分たちのアイデンティティーと向き合ってきたということを感じた。冒頭の全体説明がコンパクトで、その後モチーフが繰り返されることで理解も深まり、興味深く視聴した。沖縄の問題に関心がある人だけでなく、音楽に関心がある人たちに沖縄への興味や理解を促すところが特によかった。土地の歌を歌い、すべてを受け入れて日本のふるさとになるという優しさや包容力、一方で、アメリカを血肉にして逆境を乗り越えていく不屈の強さという沖縄の二つの顔を一度に見ることができ、視聴者の沖縄観を深めることができたと思う。ミュージシャンの三浦大知さんのナレーションは標準語で沖縄を感じさせないものだったが、逆に心に温かく響き、俯瞰（ふかん）的でとてもすてきなナレーションだと感じた。

○　この番組を視聴してよかった。沖縄の歴史や人々が生き抜いてきた時代を音楽の変化で振り返るという切り口がとても新鮮で、あっという間の１時間だった。今まで関心がなかった人や幅広い世代が歴史を知る機会になったと思うし、沖縄本土復帰５０年を新たなひもとき方で見せた。沖縄や音楽の歴史も分かりやすくまとまっており、今までの歴史や思いが複雑に絡み合ってできた音楽だということも知ることができた。何度も見返したいと感じた。

○　５０年の間にこれほど幅広いジャンルの音楽が沖縄から生まれていたことに驚いた。沖縄の人々がたどった歴史と生きる力を感じた。米軍基地、米軍の兵士による犯罪など、さまざまな厳しい環境があったなかで、「僕らのロックは生きるための武器だった」ということばがとても印象的だった。当時の社会状況や映像を加えた構成はとても興味深く、音楽を聴くだけではなく、背景や思いが伝わってきて見る側を引きつけた。番組の初めと最後に登場するミュージシャンのＡｗｉｃｈさんもインパクトがあり、「アメリカを血肉にしていく」や「逆境を自分たちの力に変える」という、彼女の静かで淡々としたことばが、ストレートで衝撃だった。また「ＴＳＵＢＡＳＡ」という彼女のエネルギッシュで魂に響く歌は、沖縄の歴史が重なってとても感動的だった。今もまだアメリカが沖縄にあることで、光と影が共存しながらこれからも沖縄の人々は生きていくということを感じた番組だった。

○　とても面白かった。ドキュメンタリーとしても、音楽を楽しむ番組としても両方の面で優れており、ＮＨＫの総合力も感じた。性別や世代などで感じ方が違うと思うが、時代時代の音楽で多くのことを語る非常にうまい構成だと思った。ドキュメンタリーという側面ではＢＥＧＩＮのボーカルの比嘉栄昇さんの「沖縄を“ふるさと”にしてください」というコメントが心に刺さった。よい取材のなかでとれたコメントだと思うが、取材の苦労話など教えてほしい。個人的には喜納昌吉さんの存在も音楽シーンを語るうえでは欠かせないと思うが、今回のアーティストからどうして漏れたのか疑問に思う。番組の仕上がりを見ると、Ａｗｉｃｈさんという現代的な人物を最後に持ってくることから逆算して構成したという見方もできるが、今回のような番組について、シナリオが先にあるのか聞きたい。

（ＮＨＫ側）

比嘉栄昇さんのコメントについては、できるだけ多くの人に伝わるように試行錯誤したが、一部の人たちから琉球音階は大和の音階と違うわけだから、ふるさとのはずがないというご意見もいただくなど、音楽の難しさも痛感した。喜納昌吉さんがなぜいな

いのかという指摘は多数いただいた。今回、本土復帰前後の沖縄のロックを始まりにしようと決めていたため、編集上の混乱を避けるために、それより以前の喜納昌吉さんを紹介しなかった。ただ、ミュージシャンの石嶺聡子さんのパートで「花」は紹介するなどさまざま議論した。当初、音楽を紹介するだけでは「ＮＨＫスペシャル」にならないという懸念があったが、Ａｗｉｃｈさんの存在を知り、沖縄の痛みも受け止めて歌にして今を生きているこの人だったらすべて受け止められるのではないかと思い、番組実現の推進力が上がった。

○　1970 年代からいままで、沖縄の音楽のスタイルはさまざま変化しているが、それぞれの音楽に秘められた沖縄の精神とルーツには、戦後のアメリカ統治下の影響が色濃くあることを初めて知った。アメリカ兵とのトラブルやコザ暴動なども詳しく知るきっかけとなった。番組に出演された方々のことばから当時の複雑な心情までも共有することができたと思う。特に、ミュージシャンの島袋寛子さんや、Ａｗｉｃｈさん、マリー・ウィズ・メデューサ元リーダーの喜屋武幸雄さんと、沖縄アクターズスクール創設者のマキノ正幸さんの話は、生きるために必死な気持ちが伝わってきた。アーティストとして成功を収める過程で苦しんだ経験や心情を本音で語っており、その本音がこの番組の真の価値だと感じた。歴史的資料でもある映像や当時の情報、またアーティストの方々への取材、ナレーションもすばらしかったが、さまざまな情報を最終的にはドキュメンタリーと音楽というシンプルな構成と見応えのある表現にしたことは、ＮＨＫ全体の総力だと思った。ただ、ナレーションで、沖縄県は一人当たりの所得が全国最下位、本土との間に差別という見えない壁が存在していたと紹介されたが、どれぐらい社会的影響のある差別があったのかという背景も、もう少しほかの表現で紹介して欲しかった。

（ＮＨＫ側）

差別があったことは事実であり、編集の中でどこまで入れようかと考えたが、今回は歌に時間を割こうということでファクトを持ってコメントする、あのような形で紹介した。

○　若い世代やさまざまな世代の人たちに、沖縄本土復帰５０年関連の番組を見てもらうという目的であれば、音楽という観点で制作したこの番組は大成功だと思う。ついつい見入って、さまざまな驚きや発見、考えさせられるような場面が多々あった。年代に分けていたところが非常に見やすく、その裏でアメリカや米軍と共存していく若者たちの渇望や沖縄の苦悩も一緒に感じることができた。沖縄アクターズ

スクール創設者のマキノ正幸さんのコメントも衝撃的だった。本土復帰５０年の観点を音楽に変えたことによって本当に見やすく、ＮＨＫが蓄積してきた素材の力を改めて感じた。

○　５４分にこれだけの要素を詰め込むために、構成には非常に苦労されたと思う。歌と踊りの島というフレーズについて、あの番組の中で実際どこに入れこむのかは難しい部分もあるが、現代音楽だけで語ると少し背景が伝わりにくいと感じた。比嘉栄昇さんのコメントは取材者としてはすばらしいと思う反面、一県民として見ていると沖縄が消費されることに対するもやもやを感じてしまい、自分は同調できないと思った。アーティストの選定にはいっさい疑問はなかった。ただ、三浦大知さんの連続テレビ小説「ちむどんどん」主題歌「燦燦」のＰＶが流れたときには、番組のＰＲのように感じて残念だった。ヒップホップアーティストは沖縄にもたくさんいるが、Ａｗｉｃｈさんは群を抜いてすばらしく、ここに最後集約されるというのは、番組としてとてもよいと思った。

○　この番組が放送された時間は午後９時からなので、視聴者の年齢層は高いと思う。時間帯的には若者は見ないかもしれないが、中高年の方がこの時間帯に音楽を通じて沖縄のことを考えるという点で、番組として非常に成功したと思う。５月１１日(水)のクローズアップ現代「５０年前の沖縄にタイムトラベル▽本土復帰“歴史への旅”」でもコザの音楽のシーンが出てきていたが、それが番組として今回ぐんと広げられており、より理解できた。ベトナム戦争でアメリカ人が命がけで戦ったあとに沖縄に戻ってお酒を飲み、ロックを叫ぶ気持ちも分かるし、それが魂の叫びにつながって違う音楽がつくられた素地があると感じた。また、本土復帰５０年をさまざまな角度で捉えようとしたＮＨＫの制作意図に納得した。社会的な問題も含め、音楽や歌を縦軸にしたこの番組は本当にすばらしかった。

○　最初の題字や青みがかった映像がおしゃれだった。沖縄の歴史とその時代に流行していた音楽を時系列で紹介しており、非常に勉強になり楽しかった。異常な精神状態の兵士の前で、命がけでプレーすることで磨かれた沖縄ロックやコザ暴動など、「沖縄に裁く権利はなかった。人々の命はあまりにも軽かった」ということばには非常にインパクトがあった。返還後もアメリカへの憎悪と憧れという複雑な感情を併せ持ちながら人々が歩んできたことなど、さまざまなことを考えさせられた。貧しさから脱出するための手段として沖縄アクターズスクールを設立したマキノ正幸さんのことばからは、その時代を生き抜いた沖縄人の強さを見ることができたと思う。内なる沖縄と外来の音楽の融合によって生まれた沖縄ポップスが、現在の日本の音楽シーンをリードしたと思うし、最終的にＢＥＧＩＮのように、生まれ育った

故郷を見つめ直すことで、「島人ぬ宝」や「三線の花」などの名曲が生まれたところには非常に感動を覚えた。また、最後はＡｗｉｃｈさんの圧倒的な楽曲で締めくくられており、これまでの歩みが今につながっていることが感じられた納得のフィナーレだった。沖縄発のダンスミュージックは世界でも日本が一番進んでいたと思うが、今は韓国のダンスミュージックが世界を席巻しているように思う。どのように韓国のミュージックに抜かれたのか、今後そういう番組等があればぜひ見てみたい。

○　1972 年の沖縄返還までは、アメリカ兵を客に音楽を演奏することがとても過酷な状況だったということを番組を通して知った。今も続く日米地位協定の問題にも衝撃を受けた。沖縄の若者にとってエンターテイメントは生きる術であり、生きる術と希望を与えた沖縄アクターズスクールの創設者の功績はすばらしいと感じた。そのほか、ラップと言う手段で沖縄の人の心を歌っているＡｗｉｃｈさんを含め、多くの沖縄出身アーティストの存在や音楽にも考えさせられるものがあった。三浦大知さんのナレーションもよかった。番組冒頭はＤＡ　ＰＡＭＰのキャッチーな曲から始まり、重いテーマも含む番組の内容に引込まれたが、そこに番組構成のすばらしさを感じた。音楽という切り口は多くの人が興味を持ちやすく、本土復帰５０年の節目に沖縄の実情や歴史を知ることができる番組だった。全編を通し「アメリカと戦い」「アメリカへの憧れ」「米軍基地との共存」「歌と踊りを愛する沖縄の人の姿」が表されており、沖縄の日差しのような明るさ、それとともに作り出される深い影を感じた。音楽を通して、タイトル通り沖縄の魂を感じるすばらしい番組だった。

（ＮＨＫ側）

私たちのねらいが多くの方に伝わったのがうれしい。スクープだけでは、沖縄の問題や課題は伝えられないということは重々認識している。どのように伝えたらよいか、今回はＶＲ旅行という形や、沖縄の歌を切り口に使うなど、さまざまな方向性で試行錯誤した。今後も伝えられることは伝えていきたい。

（ＮＨＫ側）

番組をご覧いただき、それぞれの立場や年齢、経験によって感じていただけたことがあり、成功したと思う。沖縄の抱える問題については、沖縄とそれ以外の地域との意識の格差が大きな課題だと思っていたが、視聴率だけでは測れない、視聴の“質”の面では、ご覧いただいた視聴者にしっかりと届いていると感じた。今、ＮＨＫも新しいものさしを模索しているが、さまざまな検討をしていかなくてはいけないと思った。

＜放送番組一般について＞

○　５月２７日(金) の長崎スペシャル「“若者よ　自信を持て！！”サッカー元日本代表　大久保嘉人」を見た。サッカー元日本代表の大久保嘉人さんの高校生時代の経験やサッカー部の後輩へのエールと指導、自信を持つことの大切さなどが取り上げられており、気持ちが少し前向きになる内容だった。大久保さんが長崎県立国見高校３年生のときには、インターハイや全国大会などで得点王として活躍されていたが、高校２年生まではなかなか自分のプレーや自分自身に自信を持てない性格だったと打ち明けており共感を持てた。自信を得たことでプレースタイルや行動も変わり、試合内容や人生自体もよい結果になったことや、自信を持てるようになるまで練習することと、妥協せず諦めないように努力を続けるということが印象的だった。一方、大久保さんの学生時代のエピソードだけではなくて、現在の国見高校サッカー部の紹介や、国見町についても紹介があってよかった。

○　５月３０日(月) のクローズアップ現代「から揚げ店“急増”の秘密～令和の食と幸福論～」を見た。今のＮＨＫのよいところと、問題だと思うところが両方表れていると思った。どのように幸福論に持っていくのか、つかみがキャッチーで、から揚げ店を始める人を細かく調べたところもすばらしかった。から揚げ店が増えているという生活ニュースから、今の日本人は自分の時間を有意義にコストパフォーマンスよく使おうと考えていることがうまくまとめられていた。今の世相を考えさせる企画の立て方、取材力、まとめ方が非常によかった。ただ、おいしいから揚げの作り方については紹介せずに、ゲストで作家・演出家の鴻上尚史さんのコメントや、ほかの取材で得た情報を放送したほうがジャーナリスティックな番組としてより成立したと感じた。ほかの番組にも時々散見する傾向で、視聴者に愛され選ばれることを過剰に意識するがゆえに、かえって全体の仕上がりが悪くなるケースがあると思う。

また、文芸春秋の記事で「前田会長よ、ＮＨＫを壊すな」という非常にショッキングなものがあった。ＮＨＫは確かに改革の方向に向かっていると思うが、それが現場にゆがみなどを生んでいないか聞きたい。

（ＮＨＫ側）

一つの番組にサービス精神旺盛に要素を盛りこむ意識が強すぎるところがあるかもしれない。テレビは個々のことにフォーカスを当てて伝えることを非常に得意としているメディアだ。トータ

ルとしてバランスをとり、ＮＨＫに対する信頼を高めていただけるように番組をつくっていきたい。

文芸春秋に記事が載ったいきさつは承知していないが、さまざまな改革が同時に進んでおり、なるべく丁寧な説明を尽くしている。不安をかかえる職員がいても不思議ではないが、組織をよい方向に変えていきたい思いは皆同じだと思う。放送人にとって一番大事なのは、みずみずしい感性だ。ＮＨＫは何よりコンテンツを大事にする組織であり続けたいと思うし、それを目指してみな同じ思いでやっている。

○　６月３日(金)のザ・ライフ「みんなで知恵シェア　九州防災ライブ」(総合 後7:30～8:42）を見た。災害に対する備えや避難に対するさまざまな疑問や課題を九州各地の知恵をシェアしながら備えていこうという内容でタイムリーだった。ゲストのほかにオンライン参加する自治体担当者や一般の参加者の顔が見える形式で進められていたが、視聴者参加型のアンケートなど、ライブだからこその双方向の番組づくりがとてもよかった。「水害の保険に加入していますか？」という質問で番組がスタートしたが、とてもおもしろく引きがよかった。テーマに沿って分かりやすい説明もあるなど構成もよく、少し人数が多いと感じたが、ゲストのキャスティングも専門家、お笑い芸人、女性タレントなどバランスがよかった。避難指示については、自治体の感じ方と実際のギャップがあり過ぎるという結果に、ゲストの髙田明さんが「伝えたつもりで伝わっていない」と話していたが、納得するコメントでよかった。一方で、番組を通してオンラインの回線が不安定なのが気になった。自治体担当者の話などが音声不良で聞くことができず非常に残念だった。オンライン参加者の画面についても挙手が分かりづらかった。７２分だったがあっという間で、さまざまな身の回りのリスクも見直そうという気持ちになった。視聴者への最後の質問で、「レベル４の避難指示　どうしますか」という前半と同じ問いかけに対して、当初よりも避難するという人が増えた結果になったことから、この番組の効果を感じた。自分事と感じられるような番組づくりや、ＮＨＫニュース防災アプリなどももっと活用してもらえるような発信を今後もしてほしい。

（ＮＨＫ側）

オンラインの不具合はとても反省している。これまでにない切り口もあった番組だっただけに残念だった。システムを構築する外部業者との連携や、万が一の場合のバックアップのしかたも現在検証しており、不安を感じずに見てもらえるよう今後取り組んでいきたい。

○　６月５日(日）のＮＨＫスペシャル「いつ逃げる？　どこへ逃げる？～新・全国ハザードマップ　水害リスクを総点検～」を見た。防災や水害の番組やニュースが非常に気になる時期だが、番組として非常に勉強にもなり、問題提起もありよかった。画面に二次元コードがずっと出ていて自分の地域のハザードマップを確認できた。さまざまな取り組みなどの紹介があるなかで、スタジオでは２メートルの水が来た場合についてＶＲで見せるような仕組みがあったり、スタジオ内でのリアルな感想を言い合う場面など、構成が非常に見やすくて飽きずに見ることができた。学校で防災関係の授業をするときにこのような番組が防災教育として活用できるとよいと感じたが、実際に使用できるのか聞きたい。直接教材にならなくても、検討することで子供や地域に親しんでもらえることにつながっていくと思う。

（ＮＨＫ側）

防災については、すべての地域局が、ＮＨＫが必要な存在だと感じてもらえる重要なテーマとして取り組んでいる。防災士の資格を持ったアナウンサーがイベントで話すなど、なるべく地域の皆さんとの接点も増やしている。教育目的での番組活用については、どういったことができるか模索していきたい。

○　６月１１日(土)の財前直見の暮らし彩彩「２０２２春」（総合 前 7:35～8:00）を朝のニュースからの流れで見た。おばあちゃんからお母さん、娘へと代々受け継がれた田舎暮らしの知恵、しかもそれが簡単にできるという切り口がおもしろく、気がついたら最後まで見ていた。出てきた料理もとてもおいしそうで、二次元コードでレシピも紹介していて便利でよかった。新型コロナウイルスの影響で現地に行って試食がなかなかできないなかで、ナレーションの山崎育三郎さんが料理を実食してコメントするつくりは新しいと思った。２５分の番組だったが、グルメ、旅、園芸、社会などさまざま側面を持っている番組だと感じた。昔のよい知恵を残すため、食育につなげるために、学校やＪＡ、道の駅などでこのコンテンツを流せたらと思う。番組の一部を動画にして流すとよいと感じた。

○　６月１日(水)の財前直見の暮らし彩彩「２０２２春」（Eﾃﾚ 後 10:30～10:59）を見た。俳優・財前直見さんの日々が輝きを放っていて、本当に明るい気持ちになったし、自分の生活を磨いて輝かせるのは結局自分次第だと考えさせられた。料理のレシピの書き起こしも本当にセンスにあふれていて、これを受け取る息子さんにとっても視聴者にとっても、すてきな贈り物だと思った。ホームページでもレシピを見

ることができ、トータルでよいつくりになっていると感じた。また、財前さんが書いた「財前直見の暮らし彩彩」というタイトルが画面右上に掲げられていて、彼女の才能・タレント性が番組の面白さの中心にあったことは間違いないが、あわせてセルフプロデュース力の大切さも痛感した。ライフスタイル提案の訴求力のある方を発掘し番組にしていて、大成功だったと思う。

○　６月１２日(日）のＮＨＫスペシャル「夢見た国で～技能実習生が見たニッポン～」を見た。番組は技能実習制度そのものの問題点や、コロナ禍の影響によるビザの特例措置の弊害を描き出していて、技能実習制度を疑問に思う気持ちがより強くなった。ビザの特例措置に伴って健康保険証が作れなくなった人が病気になった際の問題に対する出入国在留管理庁と厚生労働省の担当者の話もうまく編集していた。過去は日本も経済的な優位性もあり技能実習生が来ていたが、経済力の低下と日本人のひどい行いがＳＮＳで出回っていることで今は日本の人気が下がっているという話が出てきており、よく見る日本を称える情報とは非常に対極にあると感じた。３年半の期間をかけて丁寧に取材されていて、気が重くなるようなドキュメンタリーだったが、「ＮＨＫスペシャル」でないとできないと思う。このような番組も必要だと思うので、引き続き取り組んでほしい。

○　６月１５日(水） のクローズアップ現代「崖っぷち！？“投票率”は上がるのか」を見た。投票率が上がらないという問題に対して、ゲストで俳優の鈴木福さんのような若者の意見を交えていてリアルだった。投票率が高い具体的な町の取り組みも丁寧に取材されていて納得感が高かった。インタビュー内の「本当にやってくれるか信用もない」という声や当事者意識の低さなど、もっとリアルな声を集め、若者から幅広い世代に広げて、政治や選挙について根底にある問題をみんなで考える番組をぜひつくってほしい。このような番組から当事者意識を持ってもらい、選挙へのハードルを下げて選挙に行きやすくなればよいと感じた。引き続き、今回取り上げられていた町以外の取り組みの取材やきっかけづくりになるような番組制作を期待している。

○　４月５日(火）から放送開始の【ドラマ１０】「正直不動産」を１０話まで見た。１話～４話についてはＮＨＫプラスで視聴できると知り視聴し、それ以降はリアルタイムで視聴した。ドラマの展開が面白くて痛快、また不動産賃貸時の知識を簡単に得られるため有益であると感じた。一話ごとに「子育て夫婦の住居」「高齢者のこれからの住居のあり方」「不動産投資」等の多彩で身近なテーマが取り上げられており、視聴者が自分事のように捉えられる構成が良かった。このような面白いドラマから、

不動産分野に興味を持つきっかけとなると感じた。主人公役の山下智久さんが二枚目だけどとてもコミカルな役を上手く演じきっていて好感がもてたし、出演者のキャスティングもとてもバランスよく感じた。建前でごまかそうとすると祟りから嘘がつけずに本音が出てしまう場面を、風が吹くシーンというわかりやすい演出にしていて、とても楽しく視聴できた。ぜひとも続編を期待したい。

○　５月２９日(日）の「ぼくたち、弁護士“夫夫”です。」（ＢＳ１　後 11:00～11:49）を見た。法律上は認められないものの、公に結婚式を挙げて夫婦として暮らす男性の同性カップルを追ったドキュメンタリーだったが、ＬＧＢＴＱ＋の人たちにとってはまだまだ生きづらい社会だと感じた。弁護士である主人公の二人が、持ち込まれるＬＧＢＴＱ＋の相談案件について、依頼人に感情移入してしまい、傷つく姿を見ていてつらかった。ただ二人の様子から、好きな人と一緒にいたい気持ちが伝わり、明るくなるとともに心も温まった。札幌地方裁判所で、同性婚を認めないことは違憲であるという判決がでたことも紹介されていたが、これらをきっかけに好きな人同士が一緒に暮らせるように守られるような法律ができればよいと思う。

（ＮＨＫ側）

今のＮＨＫが直面している状況とも通底する課題が指摘されたと思う。見たいものだけ見る傾向が強くなっているなかで、伝え手と受け手の認識のギャップには挑戦し続けていくしかないと思う。ＮＨＫがあってよかったといわれるためには、コンテンツの中身が重要だと思うので、そのための努力を続けていく。

ＮＨＫ福岡放送局
番組審議会事務局

２０２２年５月ＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会

５月のＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会は、１８日（水）、ＮＨＫ福岡放送局（ウェブ開催）において、８人の委員が出席して開かれた。

会議ではまず、「２０２１年度九州沖縄地方放送番組の種別ごとの放送時間」について、報告があった。続いて、事前に視聴したウオカツ！「鹿児島湾　魅惑の深海魚」／「春だ！カツオだ！沖縄・伊良部島」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に６月の番組編成の説明、視聴者意向および放送番組モニターの報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	古荘　貴敏	（株式会社 古荘本店 代表取締役社長）
副委員長	西野　友季子	（株式会社 ニュー西野ビル 代表取締役）
委　　員	乾　　眞寛	（福岡大学 スポーツ科学部 教授）
	いのうえちず	（雑誌モモト 編集長）
	岡野　涼子	（一般社団法人ＮＩＮＡＵ代表理事）
	久保田　正廣	（西日本新聞社　論説委員長）
	吉島　夕莉子	（吉島伸一鍋島緞通株式会社 ５代目技術継承者 デザイナー）
	吉水　請子	（極東ファディ株式会社 取締役 商品経営本部 本部長）

（主な発言）

＜ウオカツ！「鹿児島湾　魅惑の深海魚」（総合　２月１日(火)放送）／
「春だ！カツオだ！沖縄・伊良部島」（総合　４月２２日(金)放送）について＞

○　ウオカツ！「春だ！カツオだ！沖縄・伊良部島」を見た。カツオを食べたいと率直に思うほど興味が湧く伝え方だった。魚博士である中学生の伊藤柚貴さん、タレントの小雪さんの掛け合いも軽快で、元漁師で元水産庁職員の上田勝彦さんを加えた３者のキャスティングはバランスがよかった。地元漁師の子供である漢那諒さんを通して、漁師の家族、後継者問題などの視点でも見ることができた。カツオといえば高知県のたたきのイメージだったが、食べ方の種類やなまり節という薫製の加工食品の紹介で、カツオの楽しみ方に幅があることも分かった。番組終了後に、どこでどんなものが買えるかをインターネットで調べたが、調べたくなるような、軽快な番組だった。

○　ウオカツ！「春だ！カツオだ！沖縄・伊良部島」は、カツオのおいしさがとてもよく伝わる番組だと感じた。上田勝彦さんが、「これが伊良部のカツオの味」と、強調しているシーンがあったが、沖縄県民としては非常にありがたかった。ただ、各地の魚の魅力を今後伝えていくなかで、必ずしも２０代女性をキャスティングしなくてもよいのではと感じた。例えば女性の研究者や、また料理担当として、漁業組合の婦人部、地元民宿の女将さんに出演してもらうなど、さまざまな女性のキャスティングができると思う。伊藤柚貴さんのナレーションはかわいらしく、詳しいので、見ていてとてもおもしろかった。

ウオカツ！「鹿児島湾　魅惑の深海魚」についてもあんなにおいしそうなエビがあるのか、と楽しみながら見た。未利用魚の活用についての問題提起もあり、単なるグルメ番組ではなく、生態の紹介や漁業の現状を伝えるという意味で、非常によい番組だと感じた。

○　ウオカツ！「鹿児島湾　魅惑の深海魚」を見た。率直によい番組だと思った。今年度、地域番組を制作するにあたり、地域の課題について、問題提起だけではなくて解決の糸口をつかむ番組をつくりたいという話があったが、まさに社会問題を掘り下げ、行動を促すような流れになっていて非常によかった。伊藤柚貴さんは、本当に魚が好きだということが伝わってきてほほ笑ましく、地域には知られていない魅力がまだたくさんあることを、素直に感じることができた。キャスティングに関しては、視聴者の代弁や、漁業における課題について問題提起する役割の方がいてもよいと思ったが、今回は中学生や大学教授を起用し、タレントだけではない、地元の方が出ていたのもよかった。伊藤柚貴さんと地元の方との結びつきも紹介していたが、取材力あってこそのエピソードだと感じた。未利用魚など課題はたくさんあるなかで、地元の方たちが頑張っている姿を見ることができ非常によかった。

○　両方とも見た。２５分にバランスよく内容が入っていて、キャスティングも含めて一つの在り方として好感が持てた。伝統漁法や鹿児島湾の海底の秘密など新しい発見もあり、最終的には後継者不足などの漁業が抱えているシビアな問題にまで切り込んでいて、よい番組だと思う。ただ、これだけＮＨＫらしさを持った番組なのに、あまり知られていないように感じたので、より多くの人に見てもらえるようＰＲし、盛り上げていく取り組みが必要だと思う。例えば、番組の内容を追体験してもらうイベントを各地で実施するなど、一つのキャンペーンとして取り組めば盛り上がると思う。この「ウオカツ！」のコンセプトで、お酒や甘いものなど、魚以外にもつくっていけるのではないかと感じた。このような形で地域を応援することは、ＮＨＫのローカル展開の今後の突破口の一つになり得るとも思う。また、ＮＨＫエン

タープライズ九州支社が今回制作しているが、地元では気づかないものに光を当てることができていたので、そのテイストは失わないでほしい。

○　ウオカツ！「鹿児島湾　魅惑の深海魚」を楽しく見た。番組冒頭、キビナゴの漁師料理が登場し、引き込まれた。鹿児島湾は他の湾より深く、魚種も多様で深海魚も生育しているということだが、海底の映像や地形図が盛り込まれているとより想像しやすかった。鹿児島県では深海魚の認知度は低く、市場でもあまり見ないが、番組内で深海魚やエビがおいしそうに映し出されていたので、深海魚に対する親しみは伝わったと思う。未利用魚や伝統的漁業、高齢化問題などバランスよく盛り込んだ構成はすばらしかった。またキャスティングもよく、大学教授である大富潤さんは堅すぎず、中学生の伊藤柚貴さん、タレントの長濱ねるさんの自然な反応もよかった。魚離れが進んでいるなかで、このような番組で九州の魚の魅力が紹介されることはすばらしいと思う。魚の魅力と併せて食べ方・味わい方を、今後も工夫しながら伝え続けてほしい。魚以外にもさまざまな食材があるので、例えば九州で一体となって何かできたら、ほかの地域とは違う発信もできるのではないかと感じた。

○　両方とも見た。食卓に並ぶ魚をどのように獲っているかという食育の面で、とても分かりやすく取材されていた。知るという点ではとてもよい番組で、食べてみたいと思ったし視聴できてよかった。しかし、ただ知って、食べて応援するというだけで本当の応援になるのか考えさせられた。さらっとし過ぎていて、考えていかなければならないことも流れていきそうな気がした。もっと現状をシリアスに伝えて、これから伝統を守っていくために何ができるのか、例えば、漁師を育てることや、伝統を守りながらも進化させていく新しい取り組み、未来に向けての動きについて、もう少し掘り下げると、もっとのめり込んで番組を見ることができたと思う。

○　両方とも見たが、特にウオカツ！「春だ！カツオだ！沖縄・伊良部島」について意見を述べる。美しく豊かな海とおいしい魚で、行ってみたい、食べてみたいという視聴者の感性に訴えかけるつくりになっていた。とれたてをさばいた透明なカツオの身からは、新鮮さが伝わってきて、思わず視聴後に周囲の人にこの場面について話してしまうほど印象的だった。また、日頃魚に親しんでいる出演者でさえも、魚を食べた際のコメントは難易度の高いものだと感じた。番組はおもしろく、知らない地域の海の魅力を存分に伝えてくれるので爽快な気分で視聴したが、カツオ漁をとりまく問題についてさらっと流れているように感じた。夢中になって見た番組だからこそ、自身の課題意識を引き出してもらえたと感じたが、問題の要因や制作者の課題意識などもあると、消化不良感が解消されたと思う。地域漁業の魅力発信を最大の目的としている番組だと感じたが、抱える課題にフォーカスする分量が増え過ぎ

ると、そのよさが半減してしまう。難しいと思うが、よい頃合いを模索しすてきな番組を提供し続けてほしい。

○　両方とも見たが、特にウオカツ！「鹿児島湾　魅惑の深海魚」について意見を述べる。本当に魚が食べたくなる番組だった。さまざまな魚介類や調理方法について詳しく紹介したのはとてもよかった。特に、ヒメアマエビの炊き込み御飯に興味をもち、インターネットでも調べたが、取り寄せることは難しそうだった。しかし、そのような食材のほうが、その地域に行ってみようという気持ちになるし、食が観光資源にもなるという新たな気づきも得た。未利用魚などを料理に使うように地元の飲食店に勧めているのはサステナビリティな取り組みで、このテーマでも横に展開すると、一つの番組ができるのではないかと感じた。また、漁師の仕事を知ることで漁師を志す若者が増えればよいとは思ったが、簡単な問題ではなく、どのようなステップや方法で漁師になるのかについて、一つの大きなテーマとして取り扱ってもよいと思う。キャスティングのバランスはよく、長濱ねるさんはコメントが上手で、伊藤柚貴さんのナレーションもとてもよかった。ただ、鹿児島県をテーマにした番組なのに、福岡県志賀島で収録していたことは疑問だった。全体を通して、非常に楽しく勉強できる、よい番組だった。

○　ウオカツ！「春だ！カツオだ！沖縄・伊良部島」を見た。とてもおもしろかった。伊良部島大橋の下をくぐりながら船で移動するなど旅行気分を味わえ、伊良部島の街の景色や、漁師の仕事、伊良部島の伝統漁業など業界動向情報を知ることができて満足した。カツオ漁についてもしっかりと撮影されていて、特に生き餌とりの追い込み漁では水中カメラでも撮影されていたので分かりやすかった。また、伊良部島の漁師の高齢化や後継者不足などの問題を認知した。地元漁師の子供である漢那諒さんの「パパの船の“喜翁丸”の船長になりたい」ということばを聞いて少し安心したが、いずれ漁師が激減し、将来この番組が消費者や伊良部島の漁師にとって、貴重な資料になるぐらい価値ある番組になるのではと感じた。番組を盛り上げる個性的な出演者が多かったが、全体的にはバランスが整っていた。カツオ一本釣りの漁獲方法、沖縄県内のカツオの消費動向と、地元の漁師流のおいしい調理方法や過去の歴史について知ることができ、番組視聴後に見てよかったという気持ちが沸き上がってきた。番組の認知度が高くないように感じたので、エンディングで次回放送の予告をすると、次回継続視聴にもつながるのではないかと感じた。

○　ウオカツ！「春だ！カツオだ！沖縄・伊良部島」を見た。沖縄でカツオというのは新鮮で、かつお節の消費量が日本一ということも初めて知った。伊良部島大橋や、港の白い建物と明るいブルーの海は、地中海のようで大変美しく、ぐっと魅せられた。

中学生の魚博士伊藤柚貴さんが柔らかな話し方でよいキャラクターで、元漁師で元水産庁職員の上田勝彦さんのウエカツ流簡単クッキングはどの料理もおいしそうだった。そして、魚を釣るのも食べるのも大好きという小雪さんは華やかで元気があり、見ていて楽しくなった。新鮮なカツオの刺身の「もっちもち」というコメントもおいしそうに感じた。番組終盤の漢那諒さんの「パパの船の“喜翁丸”の船長になりたい」「カツオ御殿を作る」といったことばに希望を感じたが、後継者を増やすためにも、金銭的な情報や、なぜ後継者がいないのかなどの理由など具体的な説明を入れてもよいのではと思った。また地方だけでなく全国で放送することで、人口の多い都市部から漁業に興味を持って移住する方がでてくるのではないかと思う。

（ＮＨＫ側）

魅力と問題提起を、２５分に収めるバランスが非常に難しかった。魚をとりまく現状について、視聴者が知らないことが多く、まずは知っていただくことが応援につながると考え制作した。一方で、魚のおいしさを伝え、いかに食べたい気持ちにさせるかという部分については、努力している。また、地域貢献につながるようイベント展開も検討している。演出については、いただいた意見をふまえてブラッシュアップしていく。

＜放送番組一般について＞

○　５月５日(木)のふたりのディスタンス「千と千尋の神隠しスペシャル　橋本環奈・上白石萌音」(総合 後10:00～10:45)を見た。現在、博多座でも上演されている「千と千尋の神隠し」の舞台でダブル主演を務める橋本環奈さんと上白石萌音さんに密着した番組で、稽古場に入った、ただ一つのカメラということで非常に興味があり視聴した。二人の緊張感が、画面を通じてひしひしと伝わってきて、同じ目標に向かう二人の距離が徐々に縮まっていく様子がおもしろく見入った。人にフォーカスをし、じっくりと番組をつくり上げていく手法はいつもすばらしいと思うが、今回は二人の距離感で番組を構成したところがおもしろかった。ふだんテレビでは見ることのできない二人の表情や、本音もしっかりと伝わってきた。今回のように、舞台などと連動させる番組づくりもとてもよいと思うし、例えば、さまざまな地域で伝統芸能や観光などに携わる人々にフォーカスを当てる番組を、もっと作ってもらいたいと感じた。

○　５月１０日(火)のクローズアップ現代「女らしく…って言わないで！声を上げ始めた若者たち」を見た。相手のことを思って発したことばでも、好意的差別になってしまうことが実際にあり、受け取る側の気持ちや伝え方についてとても考えさせられる番組だった。番組の中で、「男のくせに」とは、頑張らない時に叱咤することばで、「女のくせに」とは、女の子が頑張りすぎた時に使うことばというのがあったが、それは、ほんの一例の使い方ではないかと気になった。「女らしく…って言わないで」という題名も、見る前から幅が限られてしまってもったいないと思った。性のバイアスから離れて、それぞれ個人にとっての“らしさ”を尊重する内容であれば、共感を得られ、多くの人が考えるきっかけにつながるのではないかと感じた。自分自身も固定概念や、先入観をなくして、一人の人間として接していかなければならないと感じ、見てよかった。

○　５月１１日(水)のクローズアップ現代「５０年前の沖縄にタイムトラベル▽本土復帰“歴史への旅”」(総合 後7:30～8:15)を見た。ＶＲ空間に再現した1972年の沖縄にタイムスリップし、当時の貴重な映像を織り交ぜながら本土復帰を伝える設定は、沖縄本土復帰５０年関連の番組のなかでも新しく特徴的だった。バーチャルリアリティーにアバターとして登場する参加者も全国の若者で、現代の若者が感じたことを発信し、また若者に改めて考えさせる切り口も斬新だった。桑子アナウンサーとガレッジセールのゴリさんがＭＣだったが、沖縄の方言を混ぜながら番組が進むことで興味深く視聴することができた。番組で紹介された「命（ぬち）どぅ宝」ということばが、現在のウクライナの情勢を思い起こさせ、さまざまなことを改めて考えるきっかけにもなった。ＮＨＫとしては斬新な設定の報道番組であったと思う。

○　５月１２日（木）あしたが変わるトリセツショー「掃除・勉強・仕事に今すぐ実践！脳をだます集中力ＵＰワザ」を見た。ためしてガッテンの後の番組として興味があって視聴した。集中力アップとはどの世代にもあてはまる興味深い内容であり、生活や仕事に取り入れたいと思う人が多いと思う。番組冒頭で視聴者をマジックで引き付けた場面は興味をそそり、分かりやすくて良かった。脳の構造をまず説明をして、そこからどのように取り組めばよいのか、具体的な解説があり、見ている側は理解を深めつつ納得して取り組めると感じた。トリセツもすぐにダウンロードしたが、番組視聴後も紙媒体でトリセツが手元にあると実践しやすく、よい取り組みだと思った。ＭＣの石原さとみさんが産休のため、市村正親さんが助っ人エンターテイナーとしてＭＣをされていたが、今なお若くてキレのある動きを見て、元気が出た。「ショー」の形をとっているが、劇団四季出身の市村さんが出演されることによって舞台感が増して良かった。トリンキー役の濱田マリさんの関西弁のお話も楽しく、ワイプに出てくるゲストのコメントも共感できるものがあり楽しかった。

○　５月１３日(金)のザ・ライフ「沖縄経済　その可能性　～若者たちの挑戦～」を見た。沖縄経済の柱であった観光がコロナ禍によって打撃を受けるなかで、新しいビジネスや可能性に挑戦する若者を追った番組だった。新しいビジネスが生まれる様子は興味深かったが、さまざまな若者が登場することで少し混乱してしまった部分もあり、番組全体としては少し薄く感じた。番組で沖縄科学技術大学院大学の存在を知ったが、研究に集中できる環境や体制が整っており、海外から優秀な学生や研究者が集まり、ベンチャー企業を起こしてさまざまな活動をしていることは興味深かった。沖縄には、教育と研究に力を入れて新しい何かが生まれる場としての一面もあることに気付き、もっと知りたいと思った。老舗ののれんを受け継ぐ地元沖縄の若者が異業種同士で語りあうシーンもあったが、全国各地に共通する悩みでもあるので、もう少し取り上げてもよかったと感じた。元気な若者が挑戦する姿を見ることができたが、今後彼らがどのようにビジネスを展開し、可能性をひろげていくのか気になった。

○　５月１３日(金)のザ・ライフ「沖縄経済　その可能性　～若者たちの挑戦～」を見たが、おもしろかった。まずは、沖縄県のコザ地域にあるシャッター通り化した商店街に、なぜか県内外からベンチャー起業家たちが集まり、閑静な商店街に変化が起きていることをはじめて知った。その起業家を呼び込む仕掛け人である豊里健一朗さんの活動は起業家にとってスタートアップしやすい環境だと感じたし、起業実績には驚いた。とてもユニークな事業もあり、新しい変化を感じた。また、沖縄県はシングルマザーの方が比較的多いため“短時間で高収入”の働き方ができるようにＩＴプログラミング技術教室を開業など、社会問題に対してのベンチャー起業家の紹介もあり、よかった。他方、そういったベンチャー起業家の紹介だけではなく、戦後の沖縄がアメリカの占領下から日本へ返還された過去の記録や、今後は観光産業だけではなく、新しく科学技術産業に取り組んでいく姿も見えてよかった。番組で紹介された水と親水性のあるポリマー技術が、干ばつになっても農産物への影響被害が出にくくなるので安定した生産が守られると聞いて、改めて科学技術の重要性と、科学技術研究の場を与えている沖縄県の先見性に感動した。

○　５月１３日(金)のドキュメント７２時間「プリントシール機　彼女たちの春」を見た。２０年以上前からあるプリントシール機だが、現在も若者に人気があることに驚き、当時からどのように変化したのか、Ｚ世代の若者の感覚が気になり視聴した。まずはプリントシール機の進化に驚き、さまざまな編集機能があることで、スマートフォンで撮影・編集するよりも変身できることが人気の理由だと知った。で

きあがったシールは実物と別人のようだが、それがまさにＺ世代の若者が求めていることで、彼らの変身願望がかいま見えた。画像データがスマートフォンに転送される機能など、時代を反映して機能が進化していること、また、番組を通してＺ世代の若者の習慣も知ることができた。同じ組織の中にもさまざまな世代が存在しているので、世代間のそれぞれの違いを認識し、お互いを知るという意味で、このような番組は非常に勉強になるし、これからも視聴していきたい。

○　５月１２日(木)のクラシックＴＶ「ヒーローを奮い立たせる音楽～作曲家　渡辺宙明～」を見た。クラシックを楽しむ人が増えるように、いつもウエルカムな雰囲気全開の番組だが、進行役の清塚信也さんのオープンマインドなキャラクターのおかげで、ゲストも視聴者も肩の力が抜ける、よい番組だと思う。大正生まれの渡辺さんの映画音楽から、よく知るアニメソングまで膨大な作品群を、どのように「クラシックＴＶ」に仕上げるのかと思いながら見たが、クラシックとの接点を抽出しながら掘り下げていくまとめ方がおもしろく、日頃の仕事やものの見方として生かせると感じた。音楽にパンチを効かせるための渡辺さんの楽器の選び方や、擬音スキャットの多用など、子供の頃に親しんできたアニメソングの秘密を知ることもできてうれしかった。また、今もなお現役の作曲家の胆力がひしひしと伝わってきて、渡辺さんの曲のあえてのクラシック編曲を、渡辺さん自身どう受け止めて、どんな感想を持たれたのか、聞いてみたかった。

○　５月１４日(土)のＢＳ１スペシャル「５０年目の告白　“安保の裏方”が見た沖縄」を見た。防衛施設庁でかつて働いていた 200 人以上に取材するなどリサーチが丁寧で、伏線の回収のしかたも秀逸だった。防衛施設庁や、基地の土地使用に関するところに着目している点が非常によく、登場人物のことばを借りながら制度の仕組みを分かりやすく解説し、過去の経緯も丁寧に説明している点にも好感が持てた。元職員の方々の、たとえば、「沖縄の役に立てたと思いますか」という質問に対して「役に立ったかどうかは私自身ではお答えができない」といったことばが非常に重かった。今も引きずっている問題に、矛盾や現実をうまく回収させていて、すばらしい番組だと思った。

○　５月１４日(土)のＢＳ１スペシャル「５０年目の告白　“安保の裏方”が見た沖縄」を見た。非常に印象に残った番組だった。制作にあたり、複雑で大変な作業を要したと思うが、復帰に向けた当時の沖縄の防衛施設庁の現場の苦悩や、沖縄と本土の距離感が伝わる番組になっていた。非常にうまく取材されていたので、その苦労話などを聞きたい。沖縄本土復帰５０年関連の放送はＮＨＫの総合力を感じさせる

展開だった。報道からドラマからコンテンツをフルに使って、一つのテーマを世の中に打ち出していくことはＮＨＫの魅力だと思うが、大河ドラマ「鎌倉殿の１３人」については行き過ぎているように感じる。ドラマ自体はおもしろいが、歴史関連の番組がすべて鎌倉時代や源頼朝・義経をとりあげていることに若干過剰感を持っている。

４月からのローカルニュースについては、確実に前年度よりよくなっている。人を増やさずにローカルニュースを充実させるためには、さまざまな働き方改革の苦労や課題があると思うが、その取り組みについて聞きたい。

（ＮＨＫ側）

大河ドラマ盛り上げの過剰感について、問題意識はＮＨＫ内にもあり、議論になったこともあったと記憶している。バランスを考えなくていけない。いただいた貴重な意見を受け止め、今後、そのような違和感を持たれないような番組のつくり方をしていかなければいけないと思う。

（ＮＨＫ側）

九州・沖縄ブロックとして、どう沖縄の問題を取り上げていくのかと考えたなかで、番組の柱を「５０年目の告白　“安保の裏方”が見た沖縄」とした。記者やディレクターが連携し、よくぞここまで調べ上げて交渉したなと思うような取材をしていた。４月から土日午後６時４５分からの県域放送もスタートしたが、報道現場にだけ負担がかからないように、セクション間の連携など各局なりの体制で臨んでおり、福岡局としてもサポート体制をとっている。放送サービスと働き方のバランスを取りながら、よい放送を出していく。

（ＮＨＫ側）

クローズアップ現代「５０年前の沖縄にタイムトラベル▽本土復帰“歴史への旅”」、ＢＳ１スペシャル「５０年目の告白　“安保の裏方”が見た沖縄」などは制作者が新機軸で伝えること、できるだけ多くの層にアピールしようと取り組んだ結果だと思う。ただ、視聴率の面では沖縄とそれ以外の地域でかい離があった。沖縄の課題は日本国民全体の課題であるということを理解してもらうためにも、沖縄以外でもっと見てもらう取り組みが必要だと思う。また、平和や沖縄の問題が、九州沖縄地方の重要な課題で

あるのと同様に、第１次産業の問題も極めて重要なテーマだと考えている。その延長線上に「ウオカツ！」があり、問題提起にとどまっているのではないか、もっと先があるのではないかというご指摘も、しっかり受け止めなければならない。さまざまな多面的なアプローチで続けていく、あるいはイベント的なものに展開していくことも重要だと思う。宮崎局では青森局と連携した「ミステリークッキング」という食をテーマにした番組を制作した。放送以外の展開も検討し、よい形の地域貢献につなげていきたい。

ＮＨＫ福岡放送局
番組審議会事務局

２０２２年４月ＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会

４月のＮＨＫ九州沖縄地方放送番組審議会は、２１日（木）、ＮＨＫ福岡放送局（ウェブ開催）において、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、事前に視聴した鹿児島発地域ドラマ「この花咲くや」、大分発地域ドラマ「君の足音に恋をした」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に５月の番組編成の説明、視聴者意向および放送番組モニターの報告が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委 員 長	古荘　貴敏	（株式会社 古荘本店 代表取締役社長）
副委員長	西野　友季子	（株式会社 ニュー西野ビル 代表取締役）
委　　員	乾　　眞寛	（福岡大学 スポーツ科学部 教授）
	岡野　涼子	（一般社団法人ＮＩＮＡＵ代表理事）
	楠田　喜隆	（株式会社 雲仙きのこ本舗　常務取締役）
	久保田　正廣	（西日本新聞社　論説委員長）
	関西　剛康	（南九州大学 環境園芸学部 教授）
	吉島　夕莉子	（吉島伸一鍋島緞通株式会社 ５代目技術継承者 デザイナー）
	吉水　請子	（極東ファディ株式会社 取締役 商品経営本部 本部長）

（主な発言）

＜鹿児島発地域ドラマ「この花咲くや」

（ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ ３月１６日(水)放送）について＞

○　短い時間のなかでも防災や生きることへの葛藤など見どころが満載で、鹿児島を舞台とする必然性もあり、見応えがあった。登場人物全員の役割や配役もよく考えられていた。生きる意味に迷う人たちの抱える問題が、いつ噴火するともしれない桜島と共存する、その土地ならではの死生観の中で克服されていくストーリーに心が動いた。また、美しい桜島の景色が自分の目線のように映されるため、私もその場に行った気になり、ドラマに引き込まれた。神話や災害の記録映像も必要以上に説明的ではなく、自然でよかった。視聴した地域の人たちのシビックプライドの向上にも大きく貢献する番組だと感じた。

○　桜島と生きる人々の実際の生活の様子や苦悩、自然災害への備えの在り方など、さまざまな要素が１時間に詰め込まれており、とても見応えがあった。昔の映像を交えながら物語が進んでいたが、当時を知るきっかけになる必要な映像だと感じた一方で、映像の切り替わりが唐突で分かりにくい部分があった。もう少し工夫すると、ドラマの流れや雰囲気も、そのまますっといけるのではないかと感じた。また、「あの年の男の人が頭を下げて、猫を飼いたいなんて言わない」というせりふがあったが、そのような方もいるのではないかと気になった。

○　地域発ドラマは、それぞれの地域に向き合ってつくられており、報道性を感じるので非常に注目している。地域発ドラマの課題として方言の難しさがあるが、今回の鹿児島弁も非常に難しく、リアリティーを追求すると気になる部分があった。一方で、灰を集めてごみ捨てのように出す克灰袋や、桜島フェリーのうどんなど、地元の人のリアルな話もうまく取り込んでいるところはさすがだと思った。また、今回のドラマには桜島というテーマがあり、分かりやすい話にはなっていたと思うが、さまざまな愛情、防災、農業、地域づくりなどたくさんのものを、１時間に盛り込み過ぎている印象をうけた。芸達者なキャスト陣だったため、うまい芝居をしている場面は成立するものの、通しで見ると収まりが悪いところもあった。もう少しテーマを絞ることで訴求力も増し、よりまとまりのよいドラマになるのではないかと感じた。

○　タイトルから明るいドラマを連想していたが、２人の登場人物が災害や人の命などに関する非常に無情な過去を背負っていて、ドラマとしてそれぞれの生きざまが重たく感じた。最後に少し明かりが差すような終わり方や、桜島フェリーのうどんなどの場面では、鹿児島のドラマであるということが伝わってきてよかったが、途中でもう少し明るい話がほしかった。感情移入していただけに、どんどん重たい気持ちになってしまった。鹿児島の明るい、強いなどのイメージに対して、制作者側と私の思いは相違していたと感じた。

（ＮＨＫ側）

男性が猫を一人で飼っているのは変だという認識で捉えられることがあってはいけないので、ご指摘は、今後の番組づくりの参考にしたい。方言については、一般の鹿児島弁よりは共通語に近いものとし、登場人物によって鹿児島弁のレベルを変えるなど工夫したが、難しい部分もあった。愛の重さや震災も絡めた重いテーマを描き切ろうと思い、その代わり、映像をなるべく明るくするため、黄色のイメージを出すなど工夫もしたが、もっと明るいド

ラマだと思っていたという地元の皆さんの感想も多くいただいた。

＜大分発地域ドラマ「君の足音に恋をした」
（ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ ３月２３日(水)放送）について＞

○　登場するキャラクターもさまざまな年齢層で楽しく、ドラマとしてもとてもまとまっていた。過去にあった水害の記憶を、写真で表現していたが、自然な形でストーリーの中に入っていた。川や水を通して、穏やかな部分と災害などの負の部分、両方を入れ込んだ構成がとてもおもしろく感じた。主人公がヒロインに恋をしたことと、日田下駄を通して、日田市の人々や暮らしに、だんだんと引き寄せられていく部分がつながっていたことがあとになってわかり、「君の足音に恋をした」というタイトルもとてもよいと思った。ドラマを通して、日田市の人々の温かさ、明るさを感じるだけでなく、次へのステップという形で、主人公が力強く踊る最後のシーンなどから、希望も感じる仕上げになっていた。ドラマのなかで日田市の特産品である日田杉にもっとふれてもよかったのではないかと思ったが、全体を通してとても楽しく、実際に日田市に行き、日田下駄のダンスを見たり、観光をしたいと思わせてくれる番組だった。

○　東京からの移住者と地元に住む人が、違う目線で日田市という土地を捉えている点がおもしろく、日田市の人々の地元愛を特に感じたドラマだった。水害の話も盛り込まれており、当時の大変さが分かるとともに、水害への注意喚起になればよいと感じた。杉と下駄のこともよく分かる構成になっていて、下駄の模様がある映像や、日田焼きそばもピックアップされていてよかった。事情を抱える若者どうしが、ダンスを通じて交流を深める内容は爽やかで、主人公が最終的にダンスを踊って、ヒロインが戻れる場所を守っていこうとする姿勢にとても好感をもった。地域の建物などは災害や老朽化で失われることもあるが、コミュニティーを守っていくことで人と人がつながり、思い出や生きる場所を守ることができるということが、このドラマには込められていると感じた。ただ、主人公の東京からの移住理由がわかりにくかったので、深掘りするとよりよかった。

○　タクシーのシーンから始まったが、日田杉との出会いの場面もきちんとあり、日田市を舞台に触れ合う人間模様と、日田市の魅力と日田杉についての番組が始まると、序盤から期待感をもった。一方で、ドラマチックな展開と裏腹に、主人公が引っ越してきたばかりの家に着いた途端に、ダンスチームの“日田下っ駄一ず”がいきなりダンスを始める異様さや、登場人物の設定の薄さを感じた。“日田下っ駄一ず”の

活動や意義は感じたし、日田市の豊かな自然や川の魅力などもあったが、そもそもなぜ日田杉がまちおこしとしてよいのか、日田市と日田杉にどのような歴史的、産業的な関わりがあったのか、また地元の人たちの思いなどが描かれていないように感じた。主人公の人間的な成長を感じた点はよかったが、ストーリーがどこか上辺だけのように感じ、主人公の両親が日田市への移住を決断した理由などの重要なプロセスが、少し足りなかったと思う。復興というテーマが盛り込まれており、登場人物と日田市の魅力など、一つ一つはよい素材だったが、６０分間のドラマとしては、もう少しやることができたのではないかと感じた。ドラマを制作するにあたり、脚本家と演出で、どのようなプロセスがあったのか気になった。

○　舞台である日田市は地元であり、地域に住む者として視聴した。放送前から、日田市はこの話題でもちきりで、地元がテレビで取り上げられることの喜びをずっと感じていた。ＮＨＫ大分放送局がある大分市から日田市は 100 キロメートルほど離れていて、番組で取り上げられることがなかなかない地域だが、今回はしっかり取材していただき、地域にとっては知ってもらえる喜びも感じられたのではないかと思う。また、過去の災害についても若者たちの目線で取り上げていたのでよかった。方言に関しては、イントネーションに違和感を感じつつも、それも含めて地域発ドラマのよさだという寛容な気持ちで見た。地域をしっかりと取材し、そこに住む人たちの暮らしを発信することが、今後もっとさまざまな地域であればよいと思った。

○　大分の美しい自然の描写や、日田下駄や日田焼きそばが地元の特産品として強烈な印象を残した点はよかった。ドラマの主軸となる下駄ダンスの歌と踊りはとても記憶に残りやすく、大分を印象づけるのに、大きな効果を発揮していた。タイトルに恋ということばが使われているものの、恋愛ドラマとしては中途半端な印象だった。主人公が引っ越しした先で、“日田下っ駄ーず”がいきなり下駄ダンスを披露する場面や、全くダンスをしてなかった主人公が、終盤で見事な演舞を披露する場面も、違和感があった。1時間ドラマの場合、視聴者が離脱しないような工夫は必要だが、リアリティーさを感じなくなると、逆に視聴者は離脱するのではないかと思う。また、今回ドラマをつくるにあたり、防災の要素が必須事項となっていたのかどうか聞きたい。防災の要素は確かに大事だが、さまざまな要素を詰め込むと、誰に対して何を示したいのかが薄れてしまうので、注意が必要だ。地域発ドラマは地域活性化のためには、とても重要な番組だと思うので、ぜひ今後も続けてほしい。

（ＮＨＫ側）

脚本家とディレクターは、二人で日田市を訪問するなど、二人三脚でストーリーをつくり上げていった。リアリティーさが足り

ない、移住の理由が分かりにくいという点に関しては、当初２～３時間ドラマのような脚本のボリュームから、１時間ドラマに収めていく中で大事な要素が抜け落ちてしまったかもしれず、今後の参考にしたい。また、水害については重要なキーワードとして捉えていた。あまり深刻なものにしないように、写真展という形で紹介したが、度重なる水害に立ち向かう姿を描くことによって視聴者の心を励ましたり、ふだんニュースを見ていない方にも、ドラマという形で、水害について示すことができてよかったと考えている。今回のドラマを見た人たちが、日田市の現状を自分の目で確かめたい、観光して日田市を応援したいと思っていただければ、地域の復興支援につながると考えている。今後もさまざまな手法で、地域からのコンテンツを制作し、全国に発信していくことで、地域を応援していきたい。

＜放送番組一般について＞

○　３月１１日(金) の長崎スペシャル「元卓球部のディレクターが パラ卓球・太田歩美選手に密着してみた！」を見た。長崎県在住の、パラリンピック卓球の日本代表を目指す太田歩美さんに、若手ディレクターが密着したドキュメンタリー番組で、とてもおもしろかった。ディレクターが、太田さんとよい距離感をとり、卓球に対する思いや意気込みを上手に捉えていた。太田さんが試合で負けて落ち込んでしまった時には、密着取材による精神的負担を思うディレクターの感情の揺らぎがそのまま描写されていた。取材対象である選手とディレクターと立場は違えども、人としての信頼関係の結び方にとても人間味が感じられてよかった。番組を通じて、ＮＨＫが若い人材にどんどんチャレンジできる環境を整えていることも感じた。

○　３月１９日(土) の【ストーリーズ】事件の涙「“無実の死刑囚”の遺言　～免田栄えん罪事件～」を見た。免田さんの冤罪事件について、熊本日日新聞の元記者である高峰武さんが、免田さんから託された資料や取材などから新しい事実や見方にたどり着く様子にＮＨＫのカメラが密着し、丹念に取材して描いていた。アイデア、企画力が非常にすばらしく、仕上がりもよかった。取材の自前主義も大事だが、特定の事件や事象を追っている人を丹念に追っていくというやり方も、ＮＨＫの一つの強みだと感じる。

○　３月２１日(月)に最終回を迎えた【よるドラ】「恋せぬふたり」８話を見た。アロマンティック・アセクシュアルという、他者に対して恋愛感情を抱かないし、性的にもひかれないという指向の男女二人が生き方を模索していくドラマだったが、主人公の岸井ゆきのさんと高橋一生さんをはじめとした出演者の演技が非常にすばらしく、細かい感情の動きを繊細に表現していた。ＬＧＢＴＱ＋関連の番組は増えていると思うが、このようなリアリティーを保持したフィクションのドラマにしてもらうことで、特定の人を傷つけることなく、考えるきっかけを与えてもらったという意味で、とても価値があると感じた。ドラマとしても大変おもしろく、美しい映像と人間感情がきちっと描かれる中で、とても納得性がある終わり方だった。

○　３月２３日(水)のあいみょん１８祭　「あいみょんと１０００人の１８歳世代が共演！」（総合 後 10:00～11:15）を見た。若者たちからの応募動画には、コロナ禍で青春時代を送らざるをえないやるせない状況を何とか打破したいという思いがあふれていて、迫力に圧倒された。あいみょんの「双葉」という新曲は、傷つきやすく、移ろいやすい若者への愛にあふれた、すばらしい楽曲で感動した。途中の歌唱指導や本番にむけて 1,000 人の若者たちの思いが一つになっていくプロセスは象徴的な場面で、とても意味のある切り取り方がされていると感じた。1,000 人をリモートでつないで、モニターに映して歌うという特殊なコロナ禍の１８祭は、どんなときでもつながる方法があるという、制作者の意思のあるチャレンジにほかならず、時代性に即したすばらしい成功を見せていたと思う。一方で、インフルエンサーなど、集団をオーガナイズしていく技術の怖さも感じ、メディアの力や責任も忘れずに視聴する必要があると感じ、それを踏まえた番組づくりを今後も継続してほしい。

○　４月１日(金) のロクいち！福岡内の「追跡！バリサーチ 性犯罪・性暴力なくすために」コーナーを見た。福岡は性犯罪が非常に問題であることを描く企画だったが、警察が出した資料を読み返すシーンを印象的に使っていた。福岡県警察は性犯罪として６０数件を発表しているが、ニュースにできているものは少ないということを効果的に伝えていた。また調査報道でいうと、自治体への情報公開請求について、ＮＨＫ鹿児島放送局のＮＥＷＳ　ＷＥＢの記事がでていたが、非常によくまとまっていてよかった。マイナビ・日経　2023 年卒大学生就職企業人気ランキングでは、ＮＨＫは文系総合ランキングで４１位だったが、前年の 103 位から飛躍しており、見事だと思う。ＮＨＫは若手にどんどん大事な仕事を任せていると聞いているが、ＮＨＫの人材の確保、若手の教育について聞きたい。

（ＮＨＫ側）

大学生就職企業人気ランキングについては、若者に限らず、ジェ

ンダーを含めて多様性を少しでも大事にするコンテンツを出していきたいという思いが評価につながった部分もあるのではと思う。少数派の意見、例えば、中央と地域の関係も同じだと思う。地域発の情報を増やし、地域の独自色にしっかり目を向けて、それを尊重する放送を出していくことで、全体としての多様性が保たれる、そうした放送が今の時代のあるべき姿だと思う。

（ＮＨＫ側）

調査報道について、視聴者の皆さんから情報を得たものや、独自に調べたものを深く掘り下げていこうとしている。放送するのはもちろんのこと、ネットにも展開して、さまざまな表現のしかたで発信しているところだ。

（ＮＨＫ側）

４月１日(金)の「追跡！バリサーチ」企画は性犯罪という、取り上げなければいけないが、なかなか取り上げにくい部分に向き合ったものである。より視聴者本位にたち、きちんと伝えていく姿勢で、今後臨んでいきたい。

○　４月５日(火）から放送開始の【ドラマ１０】「正直不動産」を見た。自身も不動産屋とやり取りした経験があり興味をもって見たが、とてもおもしろい内容だった。ドラマは時代を表す、風刺するような要素も含まれていると思うが、移動される方が多いこの４月に、とてもタイムリーな番組だと思う。また、ＮＨＫのドラマには、ためになるビジネス的要素などが盛り込まれていることが多いと感じた。ＮＨＫはドキュメンタリーなどの密着取材は本当に定評があるが、ドラマの方向性や観点については、何かコンセプトのようなものがあるのだろうかと思った。

○　４月８日(金） のザ・ライフ「街角ドキュメンタリー　沖縄・老舗ハンバーガーショップで」を見た。たくさんの方に話を聞くなど、とても時間のかかる取材が必要だと思うが、本土復帰５０年というキーワードを絡めながら、新型コロナウイルスの影響や基地問題、沖縄の歴史など、人々のそれぞれの暮らしやさまざまな思いが、とても丁寧に取材されていてよかった。２５分の中で、うまくまとまっていたと思う。もっとさまざまな人の話やエピソードを聞きたい、２５分では足りないと思った番組だった。ＨＹの仲宗根泉さんのナレーションも、沖縄の雰囲気が出ていてよかった。さまざまなキーワードを絡めた、各県でのこのようなシリーズを楽しみにしている。

○　４月１４日(木)のあしたが変わるトリセツショー「アンチエイジングの新常識！病を遠ざける３０秒血管ケア」を見た。バラエティーと教養、科学的な知識を併せた番組として「ガッテン！」という長寿番組があったが、ややスタイル的に固定化されて古いイメージだった。俳優の石原さとみさんが登場することによって、非常に新鮮さを感じ、とても興味の持てる内容だった。情報も新鮮で、見せ方も非常に説得力があり、科学的な根拠も併せて放送されている、とてもおもしろい新番組だなと感じた。ただ、今後、俳優の市村正親さんがＭＣを務められると聞き、石原さとみさんで感じた新鮮さがどうなるのか少し心配している。

○　４月１５日(金)のかごスピ「追跡！失われた刀を求めて」を見た。視聴者から寄せられた刀をめぐる情報を元に、ＮＨＫ鹿児島放送局の調査団が取材、追跡した番組で、三つのストーリーが、映像や歴史などを背景に、３０分でとても分かりやすくまとまっていた。徹底した取材があってのことだと思うので、ＮＨＫならではの番組だと感じた。ネットで日本刀が購入できるなど初めて知ることもありおもしろかったが、日本刀コレクターであるイアン・ブルックスさんが、鹿児島の旧国宝、無銘則重について調査する場面では、旧国宝の無銘則重がどういうものなのかを、もう少し知りたかった。ＮＨＫ鹿児島放送局のホームページで、「あなたの疑問を募集します！」というページを見たが、刀の取材を継続すると書かれてあったので、今後どのように展開していくのか気になる。

○　４月１５日(金) の 数学者は宇宙をつなげるか？　完全版「ａｂｃ予想証明をめぐる数奇な物語」（ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 11:00～16 日(土)前 0:29）を見た。番組では世界中の数学者に取材をしていて、さまざまな視点や経緯を踏まえながら構成されていたので、非常に興味深かった。京都の苔寺のコケから足し算とかけ算がどういうことかを説明するなど、数学に詳しくない視聴者にもとても分かりやすく、しかも、凝ったＶＦＸやＣＧを駆使していたので、興味と理解を促していた。これだけ美しいＶＦＸやＣＧを駆使している番組なので、日本だけでなく世界へむけて放送する予定ではないかと感じた。世界の数学界が半分以上認めないという風潮の中で、数学界の現状を、ａｂｃ予想証明を通じて分かりやすく伝えていた。非常に難解な内容だったが、一般視聴者も十分に理解できる入り口に立たせてもらったような番組でよかった。

○　おはよう九州沖縄を毎朝見ている。佐々木理恵キャスターがお休みになって以降、キャスターが日によって変わっていたので、ニュースが耳になかなか入ってこな

かったが、新年度からは新井秀和アナウンサーがメインキャスターとなったことで、非常に安定感があり、ニュースがしっかりと耳に入ってくる。

（ＮＨＫ側）

調査報道についてあげると、大分放送局でもイスラム教徒の墓地問題を、「クローズアップ現代」に展開したり、デジタル記事で公開したりしている。また大分県内に 200 人ほどいるミャンマーの方々に、祖国に残る家族への思いや支援の動きを特集で伝えるような動きもしている。地域課題の調査報道、それから世界で起きていることを、身近な問題として考えていただけるような報道に努めることが、地域局の役割の一つだと思う。さまざまな形で取り組んでいきたい。

（ＮＨＫ側）

リアリティーをしっかり大事にする番組は、きちんと評価されるということを感じた。ステレオタイプな表現については、気をつけなければいけないし、ドラマでもリアリティーに、しっかり向き合いながら取り組まなければいけないと思う。地域でのドラマ制作において、キーワードとなるのは一体感だと感じる。その地域に即したテーマでドラマを展開することで、地元の話題となり、地域の一体感をさらに高め、活性化のお手伝いができるし、全員参加でドラマをつくり上げることによって、放送局内の一体感も高まる。ドラマに限らず、地域の皆さんに少しでも地域貢献だと思っていただけるサービスを展開することによって、放送局内のモチベーションも一体感も上がる。両方ともプラスになるような仕事の在り方を、今後も目指していきたい。

ＮＨＫ福岡放送局
番組審議会事務局